

稻 荷 町 遺 跡

—第1～4・6次発掘調査報告—



稻荷町遺跡垂直写真（1948年極東米軍撮影）

1994. 3

盛岡市教育委員会

稲 荷 町 遺 跡

—第1～4・6次発掘調査報告—

1994. 3

盛岡市教育委員会

序 言

盛岡市には古くは1万年以上も昔の縄文時代草創期の遺跡から、新しくは岩手公園の盛岡城跡に代表される江戸時代の遺跡まで、約500箇所の遺跡が確認されています。これらの遺跡の大半は、地下に埋もれているもので、「埋蔵文化財」として扱われていますが、昭和40年代以降の急激な市街化や大規模開発の波におされ、知られないままに破壊・消滅してしまったものも数多くあります。

市の北西部に位置する大館・稲荷地区もその例外ではなく、稲荷町遺跡でも昭和55年から宅地造成や住宅建設に伴い、12箇所において発掘調査が実施されてきました。

調査の結果、古くは縄文時代の落とし穴をはじめ、平安時代の終わり頃と考えられる建物群、江戸時代の曲屋を中心とする屋敷跡などが確認されました。またこの地は古代末期に前九年の役で登場する厨川柵擬定地、中世期の厨川城に隣接し、近世においては秋田街道が通り、古くから交通の要衝の地であったと考えられ、これらの成果は文献上において空白期とされる古代末期から中世期の実態を知る上で貴重な資料になるものと思われます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり指導・助言を下された岩手県教育委員会文化課に対し、深く感謝を申し述べると共に、ご理解・ご協力下さった地権者各位ならびに地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

盛岡市教育委員会教育長 佐々木 初 朗

例 言

- 1 本書は、岩手県盛岡市稲荷町および大館町所在の稲荷町遺跡第1～4・6次発掘調査報告である。
- 2 遺構の平面表示は、平面直角座標第X系を座標変換した調査座標で表示した。
 - ・調査座標軸方向 第X系に準ずる
 - ・調査座標原点 X-32 200.000 Y+24 000.000
- 3 高さは標高値をそのまま使用した。
- 4 土層図は堆積のあり方を重視し、線号の太さによって堆積の違いをあらわした。土層注記は層理ごとに本文に記載し、個々の層位については割愛した。
 なお層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（1967 小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業(株)発行）を参考にした。
- 5 遺構記号は次のとおりとした。

記号	遺構	記号	遺構	記号	番号	遺跡・時代	番号
	堅穴住居跡	R A	溝跡	R G		縄文～弥生	000～199
建物跡	R B	配石・集石	R H	古代～近世	200～999		
柱列	R C	井戸跡	R I	遺跡北東部	200～399		
土塚	R D	遺物集中区	R P	遺跡南東部	400～599		
堅穴	R E	その他	R Z	遺跡南西部	600～799		
				遺跡北西部	800～999		

- 6 本書の編集執筆は教育委員会文化課文化財係八木光則・似内啓邦・小原俊巳・三浦陽一・藤岡光男・津嶋知弘・神原雄一郎・内山陽子の協力を得て、千田和文・室野秀文が担当した。
- 7 本書を作成するにあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った。記して謝意を表したい（五十音順敬称略）。
 浅野晴樹（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、小野正敏（国立歴史民俗博物館）、工藤清泰（青森県浪岡町役場）、千田嘉博（国立歴史民俗博物館）、高橋与右衛門（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）、羽柴直人（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）、藤沼邦彦（宮城県教育委員会）、本澤慎輔（岩手県平泉町教育委員会）、八重樫忠男（岩手県平泉町教育委員会）

目 次

序言	
例言	
目次	
I 遺跡の環境	
1 位置と地形	1
2 歴史的環境	2
II 調査経過	
1 調査経過	4
III 調査内容	
1 第1次調査	
(1) 遺構の検出状況	8
(2) 中～近世の遺構と遺物	8
2 第2次調査	
(1) 遺構の検出状況	28
(2) 縄文時代の遺構と遺物	31
(3) 古代以降の遺構と遺物	38
(4) 遺構外遺物	58
3 第3次調査	59
4 第4次調査	61
5 第6次調査	61
IV まとめ	
1 第1次調査	62
2 第2・3・4・6次調査	64

図 版 目 次

- 第1図版 稲荷町遺跡垂直写真（1948年極東米軍撮影、1986年撮影）
- 第2図版 稲荷町遺跡地形写真：北辺部堀跡、南東部堀跡、西側段丘崖
- 第3図版 第1次調査：検出遺構全景、RB801・803・804掘立柱建物跡、RC805掘
立柱列跡
- 第4図版 第1次調査：RB801掘立柱建物跡柱穴土層断面、底部
- 第5図版 第1次調査：RE801竪穴、RD801土塚、RD811・812土塚掲白出土状況
- 第6図版 第1次調査：国産陶器（表・裏）
- 第7図版 第1次調査：国産磁器（表・裏）
- 第8図版 稲荷町遺跡第2次調査区垂直写真、調査区北西部全景
- 第9図版 第2次調査：調査区北東部・南東部全景
- 第10図版 第2次調査：RD001・002・004～010土塚
- 第11図版 第2次調査：RD011～020土塚
- 第12図版 第2次調査：RB405～407掘立柱建物跡
- 第13図版 第2次調査：RB413～415掘立柱建物跡
- 第14図版 第2次調査：RD401～403・405・407～409土塚
- 第15図版 第2次調査：RG402・403・405溝跡、焼土遺構A～D
- 第16図版 第2次調査：出土遺物(1) 縄文時代の遺物、RD407土塚須恵器壺、
ふいご羽口・粘土片・炉体石材
- 第17図版 第2次調査：出土遺物(2) かわらけ・白磁碗・灰釉盤・瓷器系甕（表・
裏）
- 第18図版 第3次調査：調査区北半部・中央部全景、RD021土塚
第4次調査：調査区全景
第6次調査：調査区全景

表 目 次

- 表1 稲荷町遺跡の調査概要
- 表2 稲荷町遺跡第1・2次調査検出掘立柱建物跡一覧
- 表3 報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	稲荷町遺跡の位置と周辺遺跡	3
第2図	稲荷町遺跡全体図	5・6
第3図	第1次調査区（遺跡北東部）全体図	9・10
第4図	第1次調査 RB801・802掘立柱建物跡	11
第5図	第1次調査 RB803掘立柱建物跡、RC806・807柱列跡	13
第6図	第1次調査 RB804掘立柱建物跡、RC801～803・805柱列跡	15
第7図	第1次調査 RB805掘立柱建物跡、RC804柱列跡	17
第8図	第1次調査 RE801竪穴、RD801土塚	18
第9図	第1次調査 遺構内出土陶磁器・石製品	20
第10図	第1次調査 RD802～810土塚	21
第11図	第1次調査 RD811・812土塚	22
第12図	第1次調査 遺構外出土陶磁器(1)	24
第13図	第1次調査 遺構外出土陶磁器(2)、塑像	25
第14図	第1次調査 石器・石製品	26
第15図	第1次調査 金属製品	27
第16図	稲荷町遺跡第2～4・6次調査区全体図	29・30
第17図	第2次調査 RD001～006土塚	33
第18図	第2次調査 RD007～013土塚	35
第19図	第2次調査 RD014～020土塚	37
第20図	第2次調査 RB401掘立柱建物跡	38
第21図	第2次調査 RB402掘立柱建物跡	38
第22図	第2次調査 RB403掘立柱建物跡	39
第23図	第2次調査 RB404掘立柱建物跡	40
第24図	第2次調査 RB405・406掘立柱建物跡	41
第25図	第2次調査 RB407・408掘立柱建物跡	42
第26図	第2次調査 RB409・410掘立柱建物跡、RC401掘立柱列跡	44
第27図	第2次調査 RB411掘立柱建物跡	45
第28図	第2次調査 RB412掘立柱建物跡	46
第29図	第2次調査 RB413掘立柱建物跡	47
第30図	第2次調査 RB414・415掘立柱建物跡	48
第31図	第2次調査 RB416掘立柱建物跡	49
第32図	第2次調査 RB417掘立柱建物跡	49

第33図	第2次調査 RD401～406・410土坑、焼土遺構A～C	51
第34図	第2次調査 RD407～409土坑	53
第35図	第2次調査 RE401竪穴、焼土遺構D	54
第36図	第2次調査 RG401溝跡	55
第37図	第2次調査 RG402溝跡	56
第38図	第2次調査 RG403～405溝跡	57
第39図	第2次調査 出土遺物	58
第40図	第3次調査区 南半部	59
第41図	第3次調査区 北半部、第6次調査区	60
第42図	第4次調査区	61

I 遺跡の環境

1 位置と地形

北上盆地北西端、北上川以西雫石川以北の地域は岩手山を中心とする地形形成が行われている。岩手山南麓の泥流地形（雫石盆地の北側一小岩井農場付近）の東縁には南北の帯状の山地（沼森山山地）が連なり、これが北上盆地の西壁となっている。その東側には火山灰砂台地（滝沢台地）が北上川まで東西4～6 km、南北10数kmの範囲に広く分布している。地質的には洪積火山灰や分火山灰がのる。台地の中央には北上川と平行するように諸葛川が南流し、その東側には木賊川・菓子川などの小河川が流れている。また現状でほとんど観察できない埋没谷が幾筋も走っており、台地を細かく開析している。台地の南東端は北上川に沿って突出し、北上川と10～15mの比高差のある急崖をもって接している。火山灰砂台地の縁辺には主に縄文時代の遺跡が数多く分布し、また古墳～平安時代の集落遺跡もみられる。

北上盆地

火山灰砂台地

この台地の南西側には中位砂礫段丘IIが形成されている。東西3 km、南北2 kmの範囲で、西は沼森山山地とその山麓に形成される小扇状地、北や東は火山灰砂台地、南は低位の砂礫段丘IIIに接している。砂礫段丘IIでは上述の火山灰を欠き、シルトや粘土が厚く堆積する段丘である。これらの堆積物は諸葛川や西の沼森山山地からの河川などによるものであろう。この砂礫段丘の南側は雫石川北岸に形成された幅数100mの低位砂礫段丘IIIにより画されている。低位砂礫段丘は雫石川以南に広く分布し、薄いシルト層の下がすぐ砂礫となる。高位砂礫段丘Iは盛岡市付近では未発達である。中位砂礫段丘には縄文時代の遺跡は顕著ではなくなり、古代以降の遺跡がみられるものの竪穴住居跡などは多くは確認されていない。

砂礫段丘

稲荷町遺跡は中位砂礫段丘の南端東側に位置する。諸葛川は中位砂礫段丘の南縁で流路を東～南に大きく弧状に屈曲させながら雫石川に注ぐ。遺跡は弧状屈曲部の東側にあり、東西300 m、南北350mほどの半円形が遺跡範囲とみられる。遺跡縁辺は西が諸葛川により画され、北から東にかけては幅15m、深さ2 mほどの堀跡と考えられる低地が取り囲んでいる。この低地は自然の旧河道を堀として利用したものと考えられ、第10次調査では堀跡および土塁の一部が確認された。また南側は明確な比高差をもたず、雫石川の低位砂礫段丘IIIに移行する。なお諸葛川現河床との比高差は3～4 m程である。

堀土跡

遺跡の現況は市街地の中にあり、中央を東西のJR田沢湖線、南北の市道が通り、十字形に遺跡が分断されている。また東側に水路（小諸葛川）が走っているが、遺跡周縁の低地の内側を弧状に流れており、遺跡の東限を画するものではない。一部水田などが残されていたが、近年宅地造成により、現況は急変しつつある。

*参考 1978岩手県企画開発室『北上山系開発地域土地分類基本調査』「盛岡」

2 歴史的環境

稲荷町遺跡の歴史的環境として、北上川以西、雫石川以北の厨川地区～滝沢村の遺跡分布に
厨川地区 について概観しておきたい。

前述の火山灰砂台地縁辺には縄文時代～平安時代の遺跡が集中している。特に台地の南東端
の突出部南縁には長さ2 kmの範囲に6遺跡が集中している。時期別にみると、まず縄文時代
縄文時代 草創期～早期では大新町遺跡が挙げられ、多少の時間差をもちながら、大館町・館坂・安倍館
遺跡にも分布している。大新町遺跡は爪形文や押型文・沈線文土器群が大量に出土したことで
著名である。中期には拠点集落の大館町遺跡を核に前九年・小屋塚・大新町・大館堤の各遺跡
で派生的な集落遺構がみられる。大館町遺跡で中期前葉～中葉の竪穴住居跡がきわめて多数重
複しあって確認されている。前九年遺跡や小屋塚遺跡では縄文中期中葉～末葉の竪穴住居跡と
大形のフラスコ形貯蔵穴が検出されている。大新町遺跡や大館堤遺跡からも中期中葉の竪穴住
居跡が散発的に確認されている。

台地突出部の西縁には、宅地化が進んでいることもあり、遺跡はほとんど確認されていない。
諸葛川の西側では、室小路遺跡で縄文時代の溝状陥し穴10基、耳取遺跡で溝状陥し穴37基、円
形陥し穴5基などが確認されている。さらに西側の山地内の沢ぞいには縄文後期の遺跡が集中
しており、大館町周辺とは遺跡立地、時期が異なっている。

古 代 古代では、小屋塚・大新町遺跡・大館町遺跡から古墳～平安時代（7～11世紀）の竪穴住居
跡が調査検出されている。これまで14棟の確認で、あまり密度は濃くはないが、継続的な土地
利用が行われていたようである。また諸葛川西岸では、砂礫段丘II南端の幅I遺跡で奈良時代
前半の竪穴住居跡が、またその北部の火山灰砂台地には高柳・諸葛川遺跡があり、古墳時代の
集落が確認されている。

なお古代末期に前九年の役で登場する厨川柵・姫戸柵跡については、安倍館・里館遺跡が擬
定地となっているものの遺構は確認はされていない。ただし11世紀の遺構や遺物は、近年の調
査により、小屋塚・大新町・大館町・境橋・室小路などの遺跡で竪穴住居跡や土器が検出され
始めている。

中 世 中世では居館遺跡として、安倍館・里館・大釜館の各遺跡が知られている。安倍館遺跡は北
上川西岸の大規模な遺跡で16世紀主体、里館遺跡は砂礫段丘II南端にある館跡で、15～16世紀
中心と捉えられている。両遺跡は時期的にも重複し、また至近距離にあり、強く関連しあった
居館であろう。大釜館は発掘調査が進められているが、時期や構造はまだはっきりしていない。
また山地沿いにはいくつかの館跡も確認されている。

近 世 近世では、北上川西岸に鹿角街道、雫石川北岸に秋田街道が通っている。鹿角街道沿いの安
倍館遺跡では、屋敷跡が何棟か検出され、秋田街道沿いの里館遺跡でも屋敷跡が確認されてい
る。里館には「里館稲荷社」があったとされ、その遺構も調査されている。稲荷町遺跡の南側
を秋田街道が通り、遺跡南東部には厨川稲荷神社がある。その由来は里館稲荷社を遷宮したも
のか別の稲荷社か定かではなく、創建時期なども不明である。



第1図 稲荷町遺跡の位置と周辺遺跡

0 1 : 25,000 1000m

II 調査経過

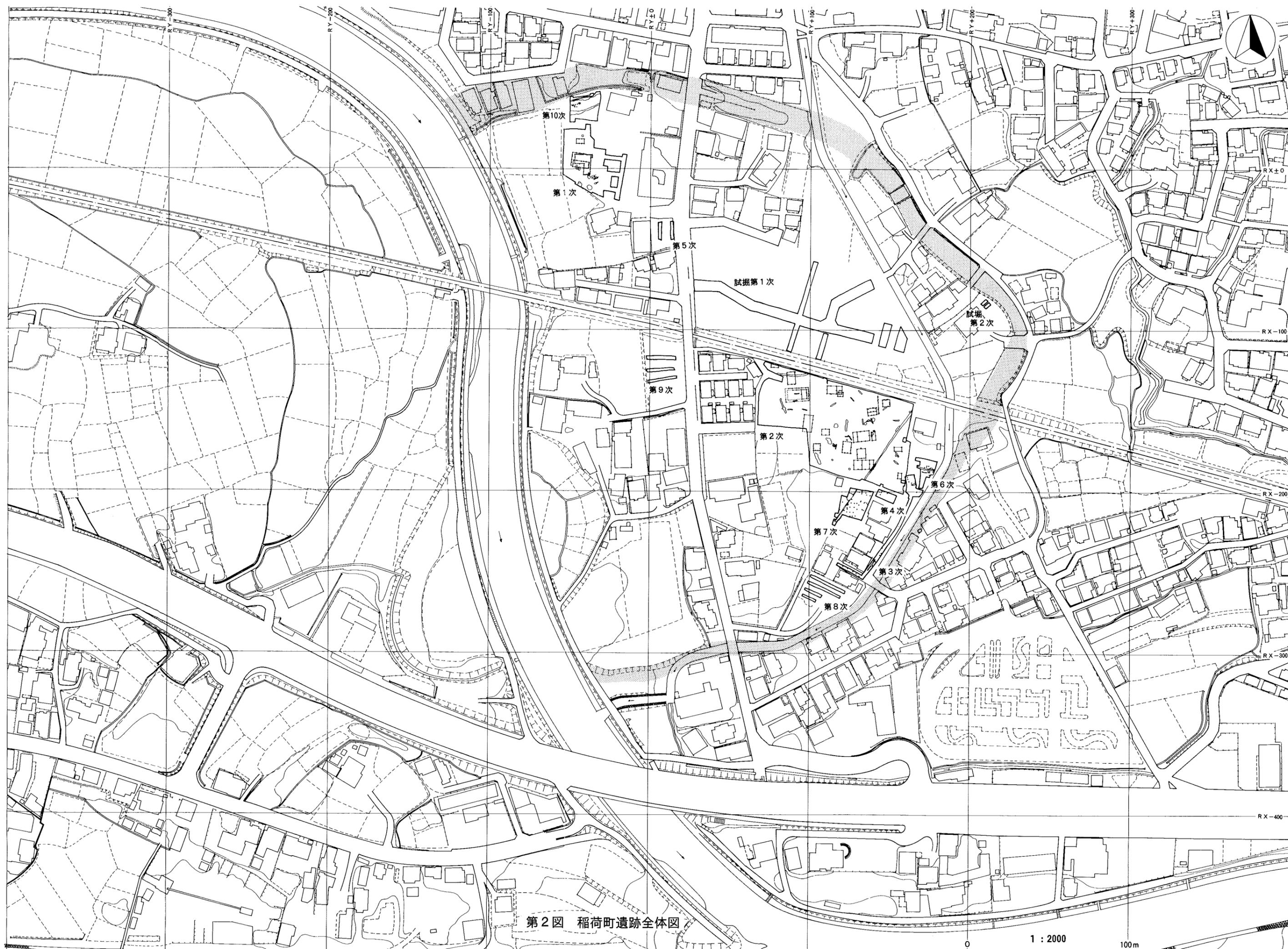
1 調査経過

遺跡は市街地に位置しているため、かなり宅地化が進行しており、また鉄道や市道が十字に遺跡を分断している。本遺跡における発掘調査は1980年度から実施され、既に12箇所を数える。試掘1次調査区は遺跡東半のほぼ中央に位置し、宅地造成および個人住宅建築に係る試掘調査である。開発予定面積7,148㎡に対し、新設道路部分に幅6m、総延長152m、宅地造成分に幅3m、総延長68mのトレンチ3本、個人住宅建築部分に幅5m、長さ15mのトレンチ2本を入れたが、遺構遺物は確認されなかった。基本層序は上部から水田床土を含む水田耕作土（I層）、やや堅緻な暗褐色～黒褐色土（II層）、少量の黒褐色～暗褐色土を含む堅緻な褐色土（III・IV層）、赤褐色に酸化した粘性をもつ黒褐色土（V層）、粘性をもつ暗褐色土～黄褐色土の互層（VI層）の順となっており、II層は開田時に上半部がかなり削平されている。

調査の概要

次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構・遺物
試1	盛岡市大館町319-1ほか	宅地造成	1,254	80.4.16 80.4.25	遺構・遺物なし
1	盛岡市大館町233-8ほか	宅地造成	1,135	80.8.19 80.9.20	中・近世掘立柱建物跡15棟、竪穴1棟、柱列跡7条、土塚12基など
試2	盛岡市大館町15-6	住宅増築	16	83.8.10	遺構・遺物なし
2	盛岡市稲荷町18-1, 19-2	宅地造成	5,206	86.7.1 86.7.31	縄文時代土塚20基、古代以降の竪穴1棟、掘立柱建物跡17棟など
3	盛岡市稲荷町13-2, 17-4	私道整備	316	87.4.13 87.4.17	縄文時代土塚1基、時期不詳の溝跡2条、小柱穴10数口など
4	盛岡市稲荷町13-15	住宅新築	60	87.5.8 87.5.13	古代以降の柱穴など
5	盛岡市大館町26-10	住宅新築	53	87.11.4 87.11.5	遺構・遺物なし
6	盛岡市稲荷町16-6・7・26, 17-4・5外	住宅新築	215	88.4.11 88.4.13	時期不詳の溝跡1条、小柱穴など
7	盛岡市稲荷町16-4	住宅新築	355	89.11.20 89.12.16	古代以降の柱穴群、溝跡など
8	盛岡市稲荷町12-2	住宅新築	137	90.10.8	遺構・遺物なし
9	盛岡市稲荷町144-1, 177	店舗新築	107	91.8.26	遺構・遺物なし
10	盛岡市大館町235-3	住宅新築	275	91.10.14 91.11.11	中世の堀跡、柵跡、土塁など

表1 稲荷町遺跡の調査成果



第2図 稲荷町遺跡全体図

1 : 2000

100m

同じ1980年度には第1次調査も実施されている。調査区は遺跡北西部にあり、1,788㎡の宅地造成に係る試掘および本調査で、トレンチによる試掘調査で遺構の確認された範囲のみを本調査として実施した。その結果、近世曲屋跡を含む掘立柱建物跡や柱穴列および土塚などを検出した。試掘第2次調査は1983年度に実施され、調査区は遺跡東端中央、河道状の低地に接する遺跡縁辺に位置する。住宅増築に係る試掘調査で、幅2m、長さ4mの東西トレンチ2本を入れたが、遺構・遺物は全く確認されなかった。

第1次調査

試掘第2次

第2次調査区は遺跡南東部にあり、宅地造成に伴う調査である。まず試掘調査を1985年11月9日～11日に行い、多量の柱穴群などを検出し、翌年7月1日～31日に本調査を実施した。調査の結果、縄文時代の陥し穴状遺構（Tピット）など20基、古代以降の竪穴1棟、掘立柱建物跡17棟、柱列1条、溝跡5条、土塚10基などを検出した。掘立柱建物跡の多くは平安時代末期以降と考えられ、1間が7.5尺以上を基準としており、時期的にまとまったもので、中には四面庇建物跡なども検出されている。出土遺物は僅少であるが、11～12世紀の北宋白磁碗の破片などがみられる。

第2次調査

1987年度には第3～5次調査が実施されている。第3次調査区は、第2次調査区の南側のL字形の道路部分の調査である。幅2m、総延長94mの範囲の中で、縄文時代の溝状陥し穴1基、時期不詳の溝跡2条、小柱穴10数口などを検出した。第4次調査区は、第2次調査区の南東に位置する。住宅新築にともなう調査で、古代以降と思われる柱穴5口を検出した。第5次調査区は、第1次調査区の南東、南北市道の西側にあたる。住宅新築に係る試掘調査で、幅2m、長さ11mの南北トレンチ2本を入れたが、地山面まで既に削平されており、遺構・遺物は全く確認されなかった。1988年度には2件の住宅建築に係る事前調査として、第6次調査が実施された。調査区は宅地造成工事の事前調査として実施された第2次調査区の東側、第3次調査区の北側に位置する。調査の結果、東西方向に走る溝跡および小柱穴11口が検出されたが、いずれも時期的には新しいものである。

第3次調査

第4次調査

第5次調査

第6次調査

1989年度には1件の住宅建築に係る事前調査として、第7次調査が実施された。調査区は宅地造成工事の事前調査として実施された第2次調査区の南側に位置し、調査の結果、2次調査につづき南北方向に走る溝跡、掘立柱建物跡を構成しない小柱穴42口などが検出された。いずれも時期的には同時期の古代末以降に所属するものと考えられる。1990年度には1件の住宅建築に係る事前調査として、第8次調査が実施された。調査区は第7次調査区のさらに南方に位置し、幅1.5mの東西トレンチ4本（総延長68m）を入れて実施したが、既存住宅の基礎および攪乱が著しく、遺構・遺物を確認することはできなかった。

第7次調査

第8次調査

1991年度には第9次調査として店舗建築に係る試掘調査、第10次調査として住宅建築に係る緊急発掘調査が実施された。第9次調査区は遺跡のほぼ中央部、南北に分断するJR田沢湖線南側の旧水田に位置する。幅1.5～2m、長さ17～18mのトレンチを東西方向に3本入れたが、盛土層が厚く、かつ遺構検出面は開田時に既に削平されており、遺構・遺物を確認することはできなかった。第10次調査区は第1次調査区の北西部に隣接し、調査の結果、遺跡北側の区画線となる堀跡、それと平行に走る柵跡および土塁跡などが確認された。時期的には中世期に相当するものと考えられる。本書では紙面の都合上、遺構の確認された第1～4・6次調査について掲載し、試掘調査および第7次調査以降の成果については別途報告予定である。

第9次調査

第10次調査

III 調査内容

1 第1次調査

(1) 遺構の検出状況

第1次調査の地点は、発掘調査実施以前は水田となっていた所であり、地形はほぼ平坦となっている。遺跡の層序は、褐色シルトの地山の上に水田床土、水田耕作土がのるという簡単なものである。ただし調査区の南西部では、地山と水田床土との間に黒褐色土が約10cm前後の厚さで堆積していた。水田床土の厚さは約3cm～4cm、耕作土（黒褐色土）の厚さは約30cm内外である。検出遺構はいずれも地山面の上面で検出された。調査区のうち東端部は遺構は検出されず、トレンチ調査のみで終了した。調査区中央部から南西部にかけて330個の柱穴と土塚、竪穴等の構造が集中し、さらに西方へ広がる可能性が大きい。検出遺構はいずれも中世以降の年代のもので、掘立柱建物跡5棟、掘立柱列跡7列、竪穴建物跡1棟、土塚12基が検出された。

(2) 中・近世の遺構と遺物

R B 801掘立柱建物跡（第4図）

調査区中央部に検出した掘立柱建物跡で、江戸時代の「曲がり屋」の遺構である。東西棟の母屋の南東側に、南北棟の角屋を突出させたL字型の建物跡である。棟方向は母屋がS87°E、馬屋がN2.5°Eを示す。この建物跡はR D 803土塚を切るほか、R B 803・804・805、R C 807・804柱列と重複するが、柱穴相互の切合いがなく、新旧関係は明確でない。

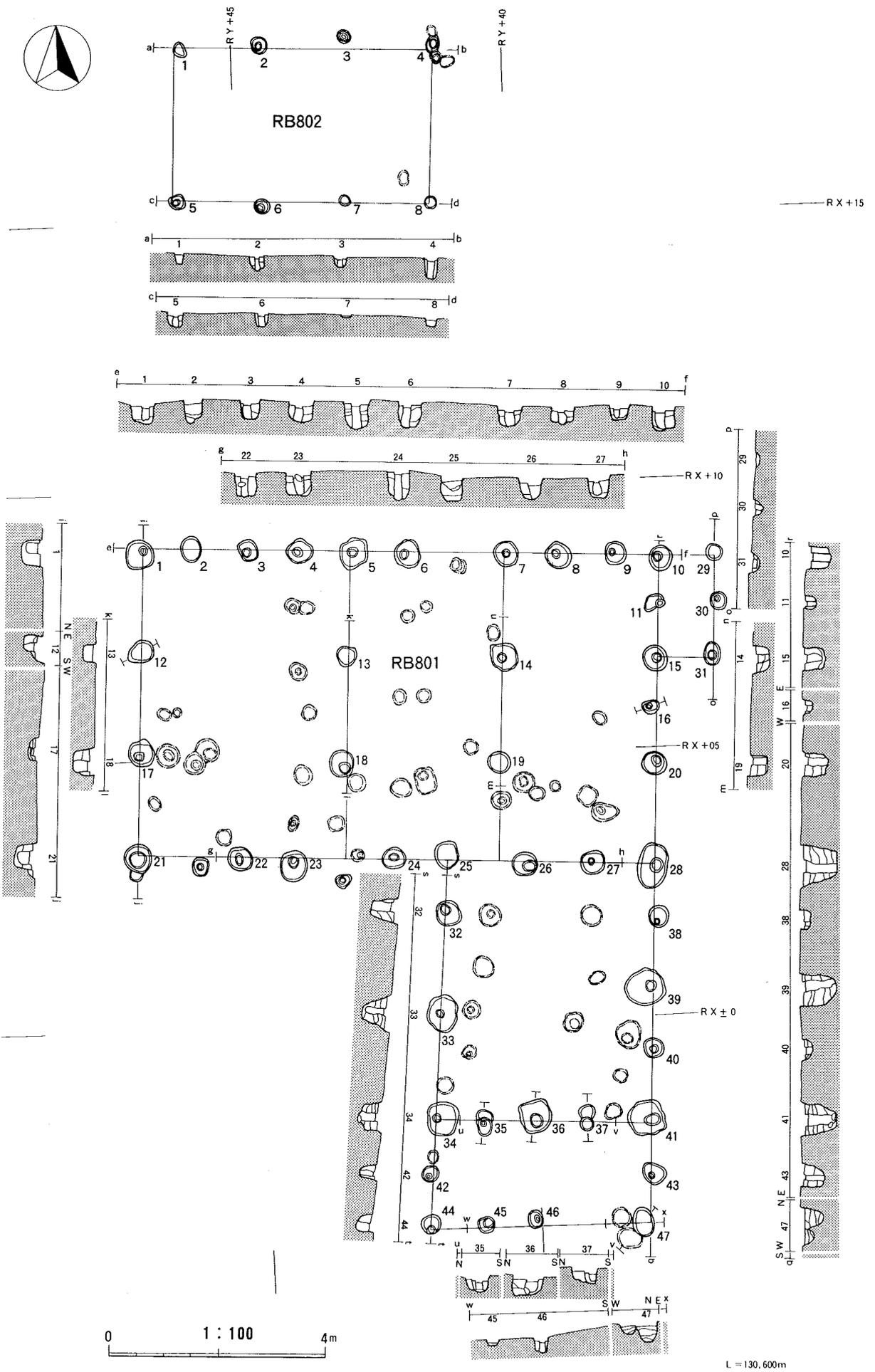
母屋 母屋は桁行5間（総長9.52m）、梁間3間（5.37m）で西妻部分をのぞき、半間毎に柱を建てている。柱間は1間毎の個所では1.91m等間、半間毎の個所では0.952m等間となり、それぞれ6尺3寸、3尺1寸5分の近似値となっている。北東部には1m×1.91mの下屋が張り出している。内部は間仕切によって3室に分かれており、西から2間×3間、1間半×3間、1間半×3間の規模である。これらは西から座敷・常居・土間の順と推定される。ただし南側柱筋は、間仕切の延長上の柱を欠いたり、土間と角屋の間は不規則な柱配置となっており、北側柱筋の柱位置と対応しない。この点母屋内部の間取りについてはまだ検討の余地を残す。

柱穴は径40cm～50cm、検出面からの深さは40cm前後のものが多いが、No17のように深さ20cmと浅いものや、28のように径80cm、深さ66cmという大形のもの、11・16・29～31のように、径20cm～30cm、深さ20cm程度と小形のものもある。柱痕跡は大半の柱穴で確認されており、径15cm～23cmほどの丸柱が多い。17のみは一辺18cmほどの角柱である。柱穴の埋土は、柱痕跡（A層）は黒褐色土主体で比較的軟らかく、掘方埋土（B層）は、黒褐色土と黄褐色シルトの混合土を詰めており硬くしまっているものが多い。

角屋は桁行2間半（4.8m）、梁間2間（3.84m～4.0m）の大きさで、南妻に1.8～2.0m×4.05mの下屋を設けている。角屋の東側柱筋と母屋の南側柱筋・北側柱筋とは直交するが、これに対して角屋の西側柱筋の方向は2°ほど東へ振れており、角屋自体が南へ開く形となって



第3図 第1次調査区(遺跡北西部)全体図



第4図 第1次調査RB801・802掘立柱建物跡

いる。柱の配置は、西側柱筋では母屋南側柱筋より半間の距離を以て1.92m等間の2間、半間毎の柱は入らず、6尺3寸の柱間に近い。東側柱筋では、北から1.1m・1.21m・1.21m・1.28mの4間で、不揃いである。南妻は半間毎に柱が入り、西から0.88m・1.0m・0.95m・1.20mである。下屋の部分は西側柱が1.01m等間、東側柱筋が北から1.0m・0.88m、南妻の柱筋は西から1.05m・0.94m・2.07mである。角屋の内部は曲がり屋の諸例から馬屋であったと推定されるが、馬屋の存在を示す竪穴状の窪みは、既に削平されていたらしく確認されなかった。

柱穴は1間毎に立つ柱のものは大きく、半間の柱、下屋の柱は小さい。大形のものは直径が50cm～75cm、深さ40cm～60cm、小形のものは径20cm～40cm、深さは20cm～35cmである。柱痕跡は37・47以上の柱穴すべてに確認されており、大形の柱穴では径15cm～25cm、小形の柱穴は10cm内外の径で、いずれも丸柱である。埋土は柱痕跡が黒褐色土主体でいく分軟らかい。掘方埋土は黄褐色シルトのブロックが多く混入する黒褐色土で硬い。

遺物はNo16柱穴より煙管の雁首と、小さな鉄片が出土した。

R B 802掘立柱建物跡 (第4図)

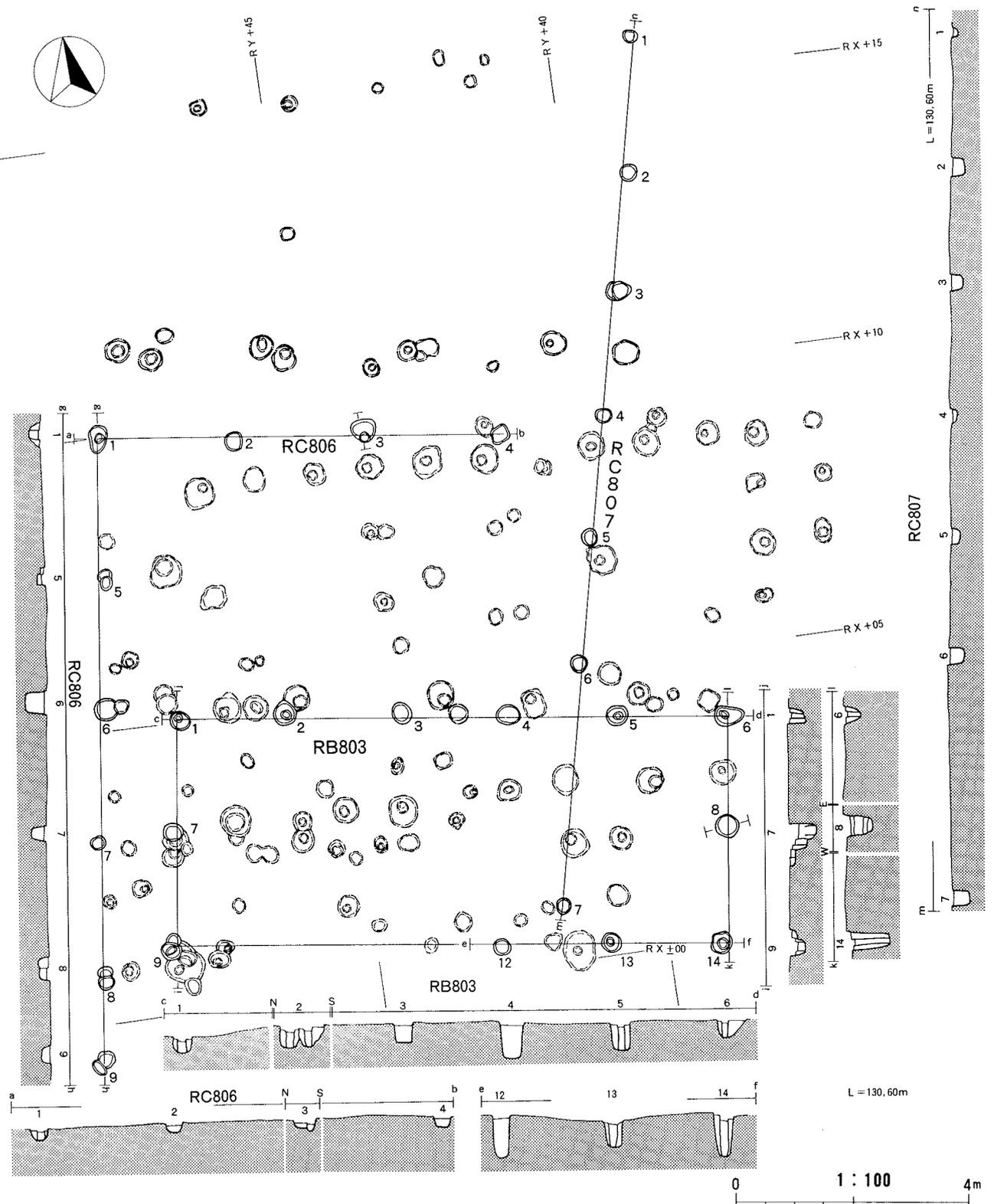
R B 801掘立柱建物跡の北側6.5mの位置に併行して存在する小形の掘立柱建物跡である。棟方向はS 87° Eを示し、桁行3間(総長4.8m)、梁間(2.84m)の東西棟である。南北両側柱の柱間寸法は、およそ1.6m(約5尺3寸)等間である。柱穴は小形で、径25cm～30cm、深さは浅いもので10cm、深いもので40cmである。確認された柱痕跡はすべて丸柱で、径10cm内外の太さである。柱穴埋土は、柱痕跡は黒褐色土主体、掘方埋土は黄褐色シルトが少量混入する黒褐色土である。出土遺物はない。

R B 803掘立柱建物跡 (第5図)

R B 801・804・805、R C 807、R D 501・502土塚と重複する。R B 804掘立柱建物跡を切り、R D 501・502土塚に切られるほかは、柱穴相互の切合いがなく、新旧関係は不明である。桁行5間(総長9.5m)、梁間が1.96m等間で、桁行は6尺3寸、梁間が6尺5寸の値に近い。南側柱のうち、西から1間め2間めの柱穴は、R D 501・502土塚に切られて欠失する。柱穴は径30cm～40cmのものが多く、深さは浅いもので30cm、深いもので60cm、柱痕跡は径10cm～15cmの丸柱である。埋土は柱痕跡は黒褐色土主体、掘方埋土は黒褐色土、褐色土の混合土である。出土遺物は全くない。

R C 806掘立柱列跡 (第5図)

R B 803の西、北側を囲む直角の柱列である。方向は西列がN 7° E、北側がN 7° Wを示し、R B 803とほぼ併行する。R B 804・805と重複するが、R B 805建物跡に切られるほかは柱列相互の切合いがなく、新旧関係は不明である。北列は総長6.95mで2.32m等間、西列は総長10.71mで5間の柱間であるが、南端のNo 8・9間が1.36m(約4尺5寸)と狭く、No 1～8までの4間は2.34m等間で北列と同じ約7尺7寸の柱間である。柱穴は径25cm～30cm、深さ15cm～30cmと比較的小形である。柱痕跡はNo 1・3で確認され、径10cm内外の丸柱である。埋土は柱痕跡は黒褐色土主体、掘方埋土は褐色土と暗褐色土の混合土である。



第5図 第1次調査RB803掘立柱建物跡、RC806・807柱列跡

出土遺物はNo 3 柱穴掘方埋土から無銘銭（第15図3）、柱痕跡から古寛永通寶（同4）、No 4 柱穴から永樂通寶の鏝銭（同2）が1点出土している。

R C 807掘立柱列跡（第5図）

R B 801・803掘立柱建物跡と重複する柱列跡であるが柱穴相互の重複がなく、新旧関係は不明である。7個の柱穴から成り、6間の柱間で総長15.04m、方位はN12° Eを示す。柱間寸法は1～6間が2.05m～2.35mで、多少の異同はあるが平均2.16m等間である。曲尺の7尺1寸に近い。南端の6～7間は4.2mで、ほぼ2間分に相当する。これにより本来は7間の柱列であったらしい。

柱穴は径20cm～30cm、深さ10cm～30cmで、柱痕跡は確認されない。埋土はすべて黒褐色土主体、遺物は皆無である。

R B 804掘立柱建物跡（第6図）

調査区西寄りにあり、R B 801・803掘立柱建物跡、R C 801～803掘立柱列と重複する。R C 803掘立柱列を切り、R B 803掘立柱建物跡に切られる。確認された部分では、桁行3間、梁間3間の東西棟で、調査区外西方へさらに拡がるものと推定される。棟方向はS84.5° Eを示す。確認された部分では桁行7.2m、梁間6.8mの規模で、桁行は西から2.64m・2.28m・2.28m、梁間は2.26m等間である。桁行は西側の1間は約8尺7寸、その他の柱間寸法は7尺5寸に近い。桁行方向の東2間分は総柱であるが、西側のNo 1・No10の間は柱がなく、部屋割りされていた可能性が大きい。柱穴は径40cm内外の比較的小形のものと、径50cm～60cmの大形のものがある。深さは浅いもので18cm、深いもので60cmである。柱痕跡は径15cm～25cmの丸柱である。埋土は柱痕跡が黒褐色土もしくは暗褐色土主体、掘方埋土は黄褐色シルト、黒褐色土の混合土である。柱穴内からの出土遺物はない。

R C 801・802掘立柱列跡（第6図）

ともに調査区西辺にある柱列跡でR C 801掘立柱列跡は、R C 802掘立柱列跡に切られている。また、R B 804掘立柱建物跡と重複するが、柱相互の切合いがなく、新旧関係は不明である。

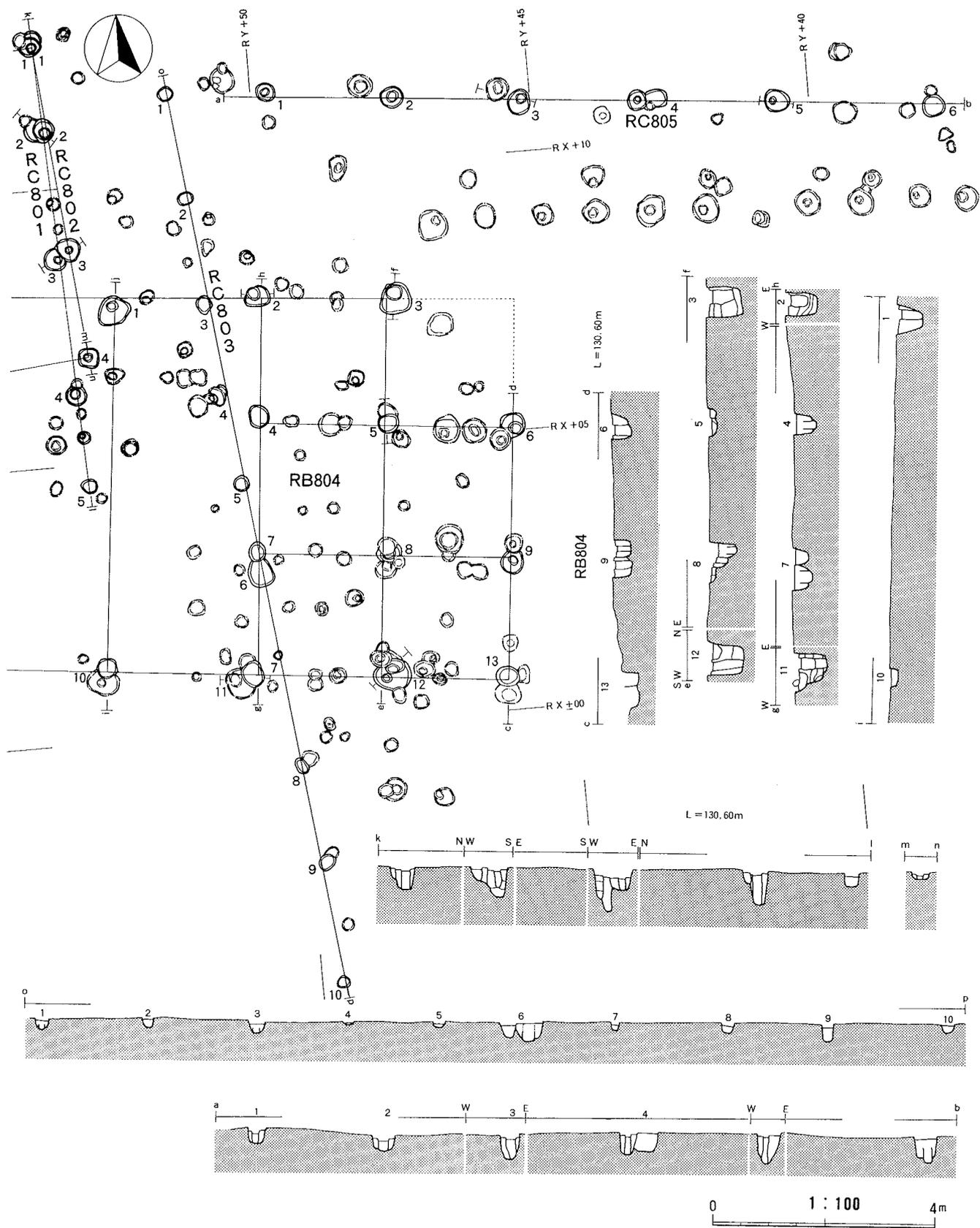
R C 801掘立柱列はN 2° Wを示し、総長8.2m、4間の柱間である。中央2間は2.4m等間で約8尺、南北両端の柱間は1.7mで約5尺6寸の柱間である。調査区外西方へさらにのびる建物の一部と考えた場合、中央2間は身舎の東妻、両端の柱間は庇と推定される。

R C 802掘立柱列跡は、N 5° Wを示し、北から1.55m（約5尺1寸）、2.18m（約7尺2寸）、1.98m（約6尺5寸）の3間である。

柱穴の大きさはどちらの柱列も径30cm～45cm、深さは15cm～75cmで、柱痕跡は径10cm～15cmのものが多い。埋土は柱痕跡が黒褐色土～暗褐色土主体、掘方埋土は黄褐色土と暗褐色土の混合土である。出土遺物はない。

R C 803掘立柱列跡（第6図）

R B 804掘立柱建物跡と重複し、切られている。主軸方向はN 7° Wを示す。総長16.35m、



第6図 第1次調査RB804掘立柱建物跡、RC801~803・805柱列跡

9間の柱列である。柱間寸法は1.5m～2.2m、平均1.82m（約6尺）である。柱穴は小形のものが多く、径15cm～40cm、深さは10cm～35cmである。柱痕跡の明確でないものが多い。埋土は黒褐色土ないし暗褐色土主体である。出土遺物はない。

R C 805掘立柱列跡（第6図）

R B 804掘立柱建物跡の北3.65mにある掘立柱列跡で、R B 805掘立柱建物北側柱列と重複し切られている。主軸方向はS 85° Eを示し、R B 804建物跡とおおむね併行する。また、西端のNo 1柱穴は、R B 804建物No 2～No 11の柱筋の延長上に位置している。柱列の総長は12.08m、柱間寸法は2.05m～2.9mと移動があるが、平均2.42m（約8尺）で5間の柱間である。柱穴は径30cm～40cm、深さ30cm～50cmで、径10cm～15cmの丸柱の柱痕跡が認められる。埋土は柱痕跡が黒褐色土主体、掘方埋土が黒褐色土と暗褐色土混合土である。柱穴の内部からの出土遺物は皆無である。

R B 805掘立柱建物跡（第7図）

R B 801・803・804建物跡、R C 806・805柱列跡と重複し、R C 805・806柱列跡を切っている。桁行4間、梁間3間の柱間で、棟方向はS 83° Eを示す。桁行は総長11.3mで、No 1～No 4柱穴間の3間は2.52m（約8尺3寸）等間、東端のNo 4～No 5間は3.74m（約12尺3寸）である。梁間は総長8.53mで、2.84m（約9尺4寸）等間である。ただしこの建物は、規模のわりに柱穴が小さく、間仕切等の柱列が不明確であることや、東妻部分の柱穴が欠落していることなど建物跡として疑問の多い構造ではある。あるいは囲いのようなものか。

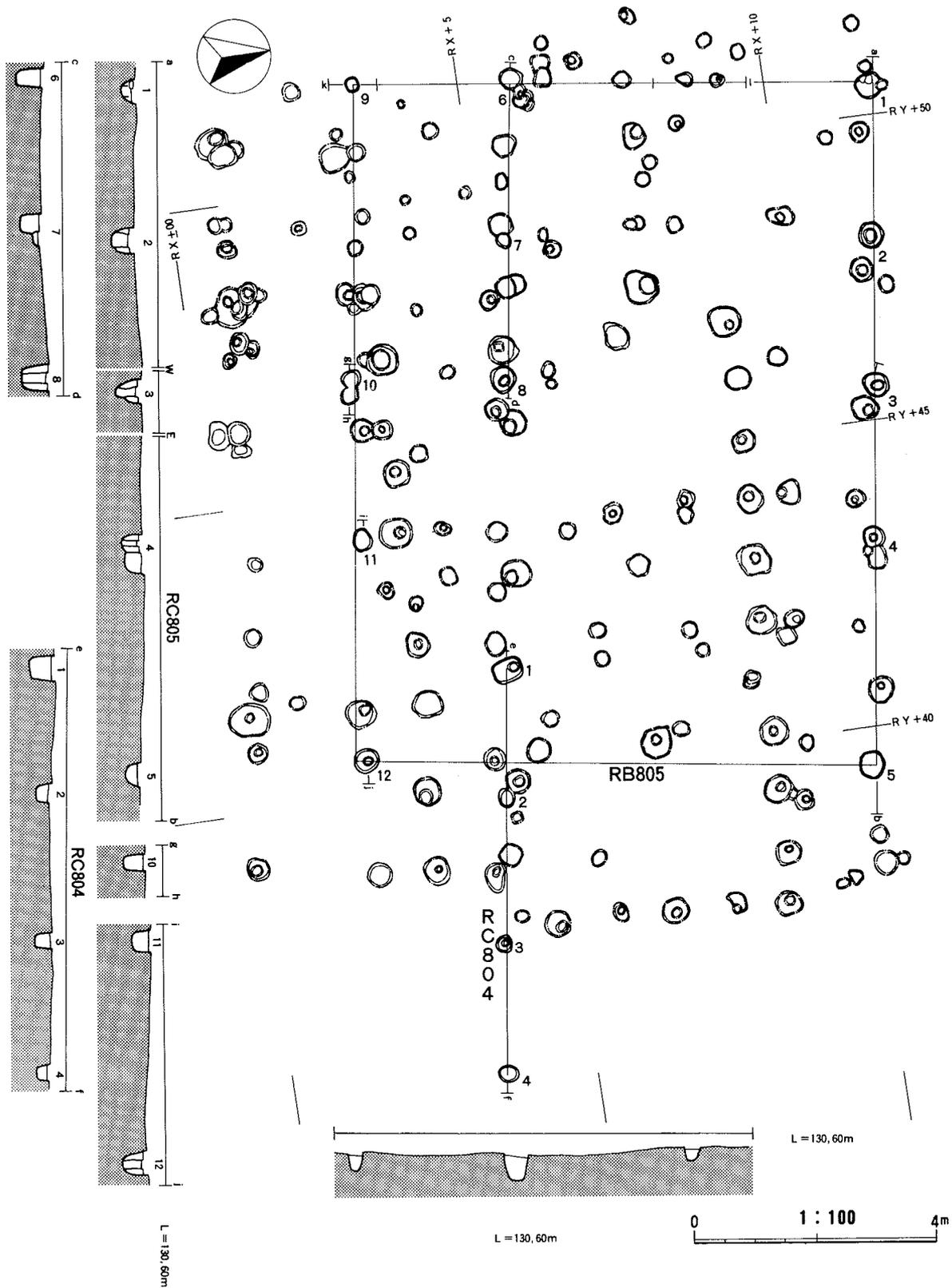
柱穴の大きさは小形のもの径15cm～20cm、深さ20cm内外、大形のもの径40cm内外、深さ40cm内外である。柱痕跡は径10cm～20cmの丸柱である。埋土は柱痕跡が黒褐色土主体、掘方埋土は黄褐色シルトと黒褐色土の混合土である。柱穴内からの遺物はない。

R C 804掘立柱列跡（第7図）

R B 801・805掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。総長6.75m、主軸方向はS 82° Eを示す。R B 805建物跡のNo 6～No 8柱列の延長上にあり、あるいはR B 805建物の一部になる可能性もある。3間の柱間で、およそ2.25m（約7尺4寸）等間である。柱穴の大きさは径30cm～50cm、深さ25cm～40cmである。柱痕跡は2ヶ所で確認されており、径10cm～15cmの丸柱である。埋土は柱痕跡が黒褐色土主体、掘方埋土は黒褐色土と褐色シルトの混合土である。柱穴内からの出土遺物はない。

R E 801竪穴（第8図）

調査区の南端に検出された竪穴で、南半部は調査区外となっている。北側に1.1m×1.1mの張出しがあり、これを出入口部と考えた場合、竪穴の主軸はS 15° Wを示す。竪穴の規模は検出部分で東西2.5m、南北1.9mで、約2.5m四方の隅丸方形プランと推定される。周囲の壁はゆるやかに立ちあがり、高さは約28cm残存している。床面は比較的硬く、おおむね平坦であるが、竪穴中央部が最も深くなっている。床面および竪穴の周囲に竪穴に伴う柱穴は確認されて



第7図 第1次調査RB805掘立柱建物跡、RC804柱列跡

いない。入口部に1個の三角錘状の自然石、北東隅近くに不整形な平たい石と、円形の平たい石が重ねられていた。これらの石には使用痕等は全く認められない。それぞれ床面上に置かれており、北東部の円形の石の下の床面には、わずかな焼土の堆積が認められた。

埋土はおおむね2層に分れ、自然堆積である。A層は黒褐色土主体で酸化鉄分の沈澱が認められる。B層は黒色土ないし黒褐色土主体の土であり、褐色のシルトがわずかに混入する。出土遺物は皆無である。

R D 801土坑 (第8図)

R E 801堅穴の東にある大型の土坑である。東西3.2m、南北2.6mの楕円形で、深さは55cm～60cmである。北東部の壁がくびれており、これに対応するように、北壁際にD層の堆積があり、北壁を縮小している可能性がある。底面は中央部がやや低いがおよそ平坦である。埋土は4層に大別され、A～C層は自然堆積、D層は人為堆積である。A層は暗褐色土主体で、これに黄褐色のシルトが混入し、酸化鉄分の沈澱が認められる。B層は黒褐色土主体で褐色土が少量混入する。C層は黒色土ないし黒褐色土主体、D層は黒褐色土主体、あるいは黒褐色土と褐色土混合で、小礫、木炭粒が多く混入する。埋土はC層は軟らかく、他は比較的堅くしまっている。遺物の出土はなかった。

R D 802土坑 (第10図)

R B 801の角屋部分とR D 803土坑に切られている。東西1.15m、南北2.5m、深さ20cmの不整形な土坑である。埋土は2層あり、A層は黒褐色土主体で木炭粒が多く混入する。B層は黒褐色土ないし暗褐色土主体である。いずれも自然堆積である。B層の上面は比較的平坦であり、一部に灰・焼土の堆積が認められるほか、同一面から掘り込まれた柱穴状ピットによって焼土・灰の層が切られている。埋土中からの出土遺物はない。

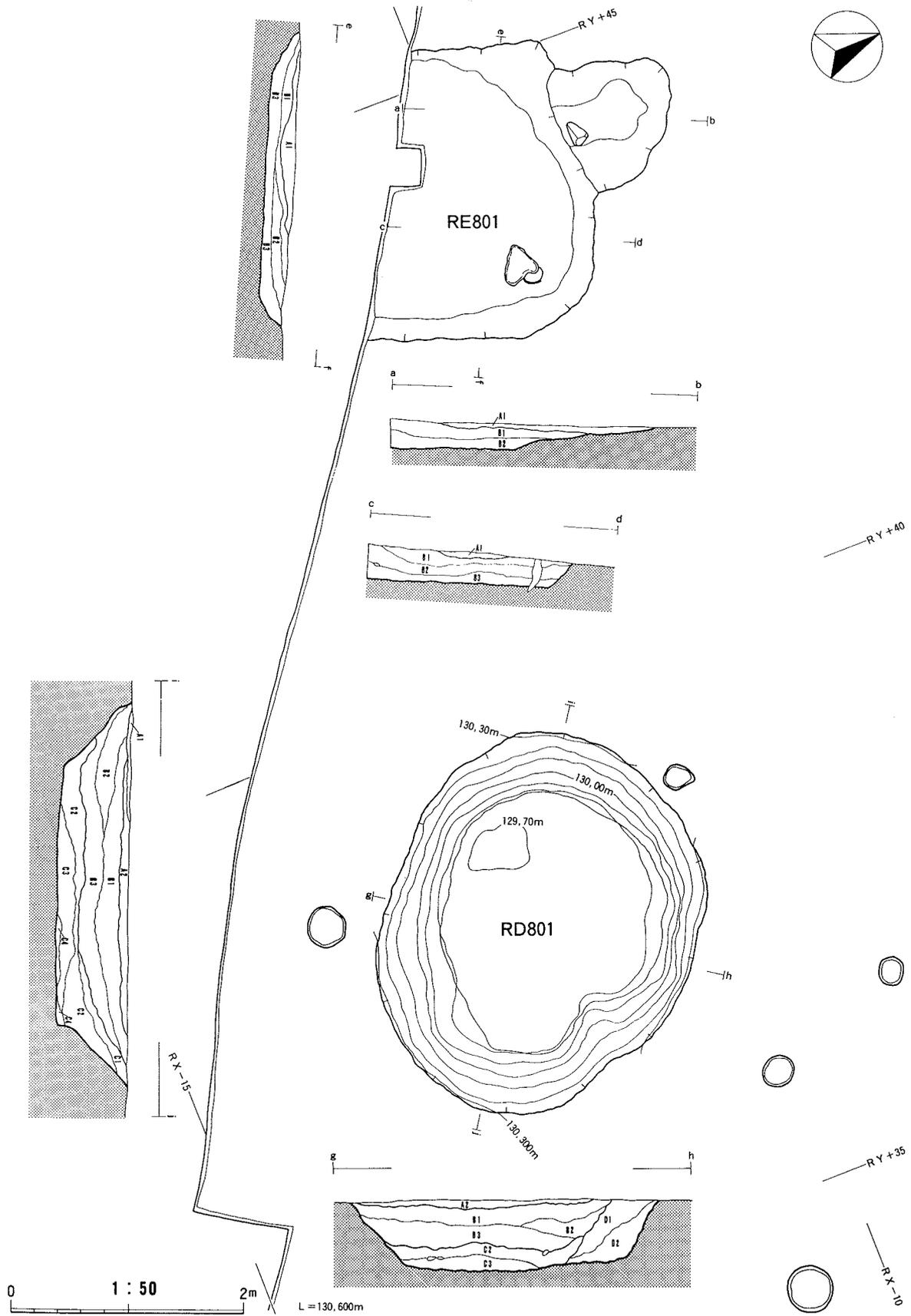
R D 803土坑 (第9・10図)

R D 802土坑を切る。径2m～2.1m、深さ20cm～25cmの不整楕円形の土坑である。埋土は2層でいずれも黒褐色土主体で自然堆積であるが、A₂層は木炭粒を含む。

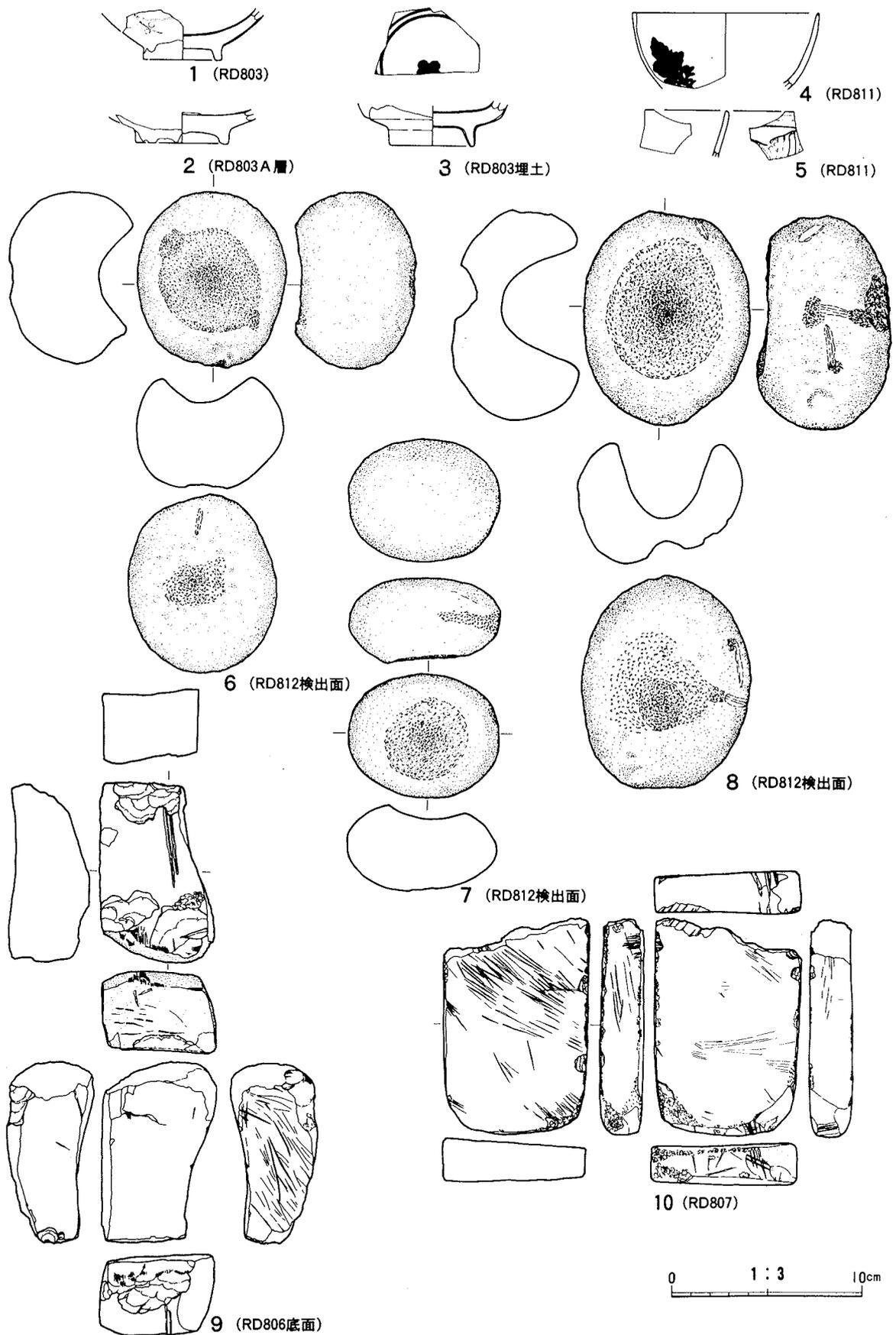
遺物は第9図1～3の陶磁器、第15図5の新寛永通寶が出土している。第9図1は19世紀代の志野の碗底部である。体部内外は白色の長石釉で、鉄絵の草花文の痕跡が残る。高台部及び高台内は露胎である。2は肥前磁器の皿で17世紀後半から18世紀代の製品である。底部は蛇ノ目釉ハギ、高台部は削り出しである。3は肥前系磁器の筒型碗で、外面青磁である。内面見込みは濃の五弁花文である。このほか相馬系の鎧茶碗の小破片が出土している。

R D 804土坑 (第10図)

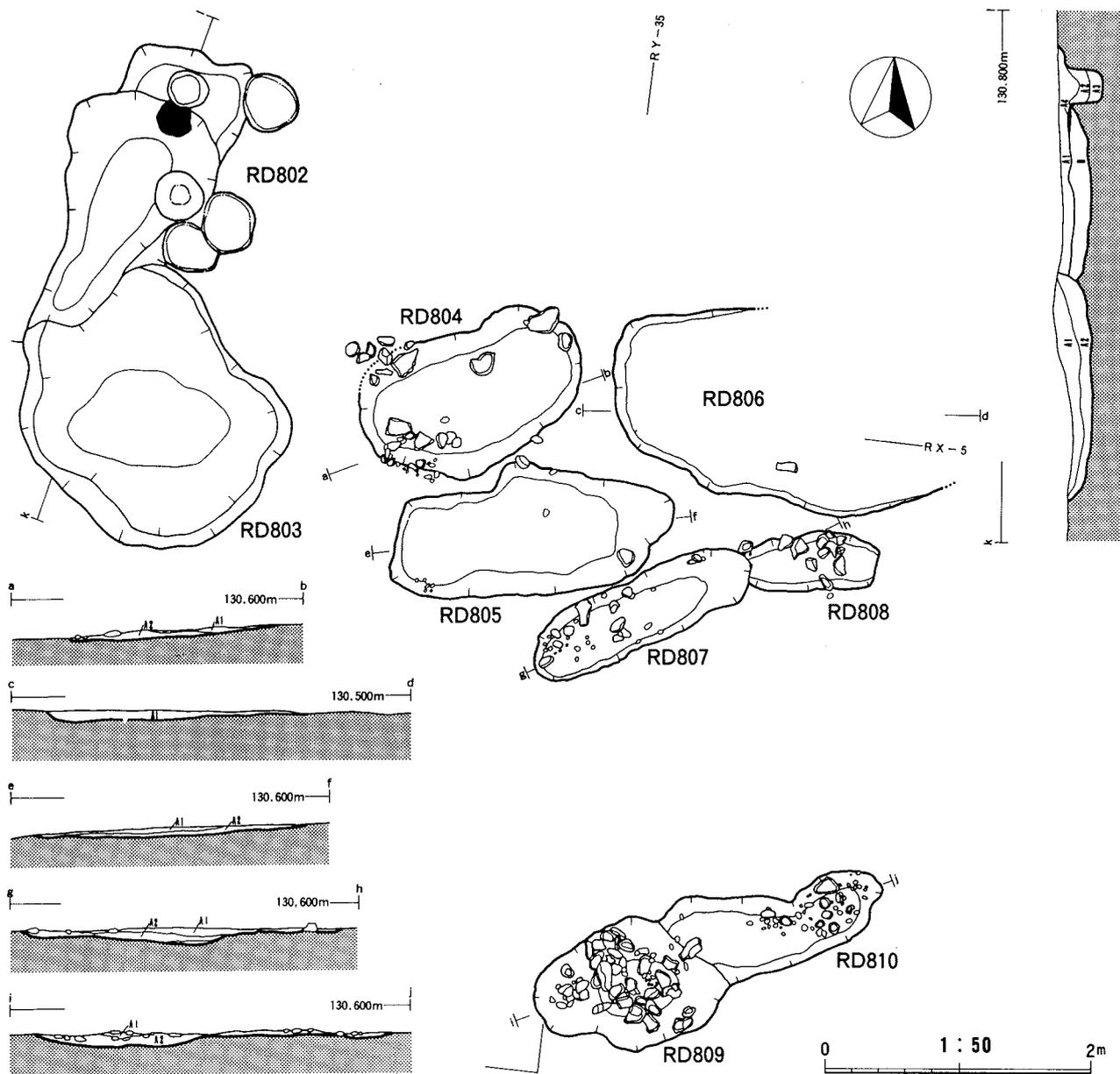
R D 803土坑の東にある。プランは東西1.7m、南北1.1m、深さ6cm～8cmの楕円形を呈し、断面は浅いレンズ状を呈する。壁際に径10cm～30cmの不規則な礫の集中が認められる。埋土は小礫を多く含む暗褐色土主体で、硬く、自然堆積である。出土遺物はない。



第8図 第1次調査RE801竖穴、RD801土塚



第9図 第1次調査遺構内出土陶磁器・石製品



第10図 第1次調査RD802~810土坑

RD805土坑 (第10図)

RD804土坑の南側にある土坑である。平面は不正楕円形で、南北1.05m、東西2.2m、深さ5cmである。埋土は硬い黒褐色土主体で自然堆積、出土遺物はない。

R D 806土坑 (第9・10図)

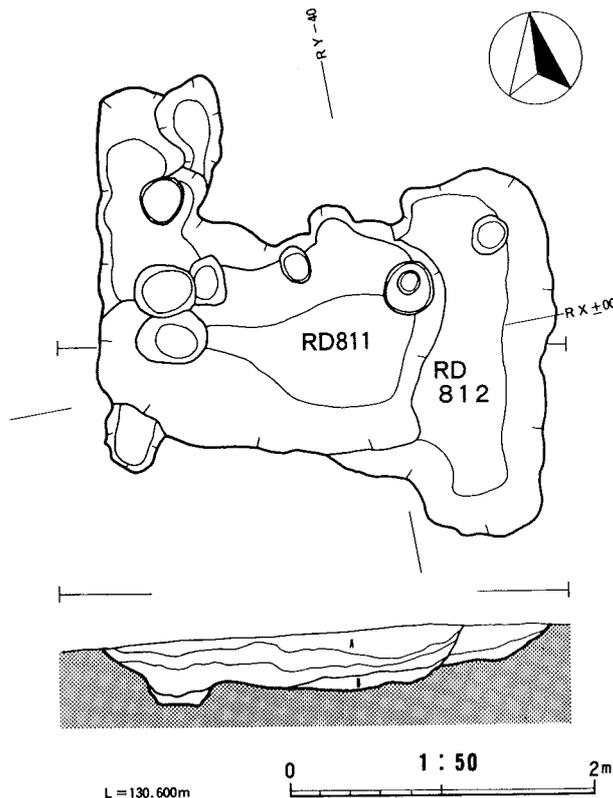
R D 804土坑の東側にあり、東側半分近くが削平のため失われている。残存部分で計測すれば、東西2.7m以上、南北1.5m以上、深さ8cm内外である。底面は比較的平坦で、底面上にうすい砂層が認められる。埋土は黒褐色土主体で自然堆積、遺物は底面上から第9図9の砥石が出土している。

R D 807・808土坑 (第9・10図)

R D 805・806土坑の南側にある。重複があり、R D 807土坑がR D 808土坑に切られている。R D 807土坑は東西1.8m、南北0.5mの長楕円形で、深さ12cmある。埋土は黒褐色土ないし暗褐色土主体で自然堆積、埋土中に径5cm～20cmの礫が混入する。出土遺物はない。R D 808土坑は土層断面から長さ1.97m、巾0.4mの長楕円形で深さ5cmである。埋土は黒褐色土主体で堅く、径10cm内外の小礫が混じり、自然堆積である。埋土中の礫に混入して第9図10の砥石が出土した。扁平な形状で各面に使用痕が見られる。

R D 809・810土坑 (第10図)

R D 807・808土坑の南方へ約2m離れている両土坑は互いに重複しているが、埋土が著しく浅いため新旧関係は判別できない。R D 809土坑は東西1.45m、南北1mの不整形なプランで、深さは10cmである。埋土は黒褐色土ないし暗褐色土主体で、径10cm～25cmの礫が多く混入する。出土遺物はない。R D 810土坑も同様の埋土で、規模・プランは長さ1.7m、巾0.6m、深さ4cmの長楕円形である。出土遺物はない。



第11図 第1次調査R D 811・812土坑

R D 811・812土坑 (第9・11図)

R B 801掘立柱建物の南側にあり、R B 803掘立柱建物の南側柱筋を切る。双方ともに不整形なプランで重複し、R D 811土坑が新しい。

R D 811土坑は南北1.4m～2.3m、東西2.3m、深さ40cm～50cmである。埋土は自然堆積でA層が黒褐色土主体、B層が黄褐色土と暗褐色土の混合土である。B層から第9図4の肥前の色絵磁器碗破片(17世紀後半?)、5の肥前磁器の碗で蓬の葉らしい文様の破片(18世紀代)が出土した。

R D 812土坑は南北2.5m、東西1.4m以上、深さ25cmの規模である。埋土は自然堆積で黒褐色土主体である。遺物は図示していないが、埋土中から相馬系の灰釉陶器碗の破片が出土している。このほか、検出面からは第9図6～8の小形の搗臼が出土している。丸い礫の表と裏の中央に凹みがあり、表面の凹みは碗形で大きい。7は表面の

み凹み、6の凹みより浅いが、側面に敲打痕が認められる。

柱穴群

建物跡、柱列跡以外に調査区中央部より西側のほぼ全域にわたって243個の柱穴が分布している。大半は本来掘立柱建物跡や掘立柱柱列跡を構成するものと考えられるが、遺構としてのまとまりが確定できないものである。柱穴の規模は径15cm～20cm、深さ15cm内外の小形のものから、径60cm内外、深さ40cm内外の大形のものまで存在する。これらのなかには柱痕跡を有するものも多い。遺物はNo80柱穴より第14図1の削器、No195柱穴から第15図1の政和通寶が出土した。

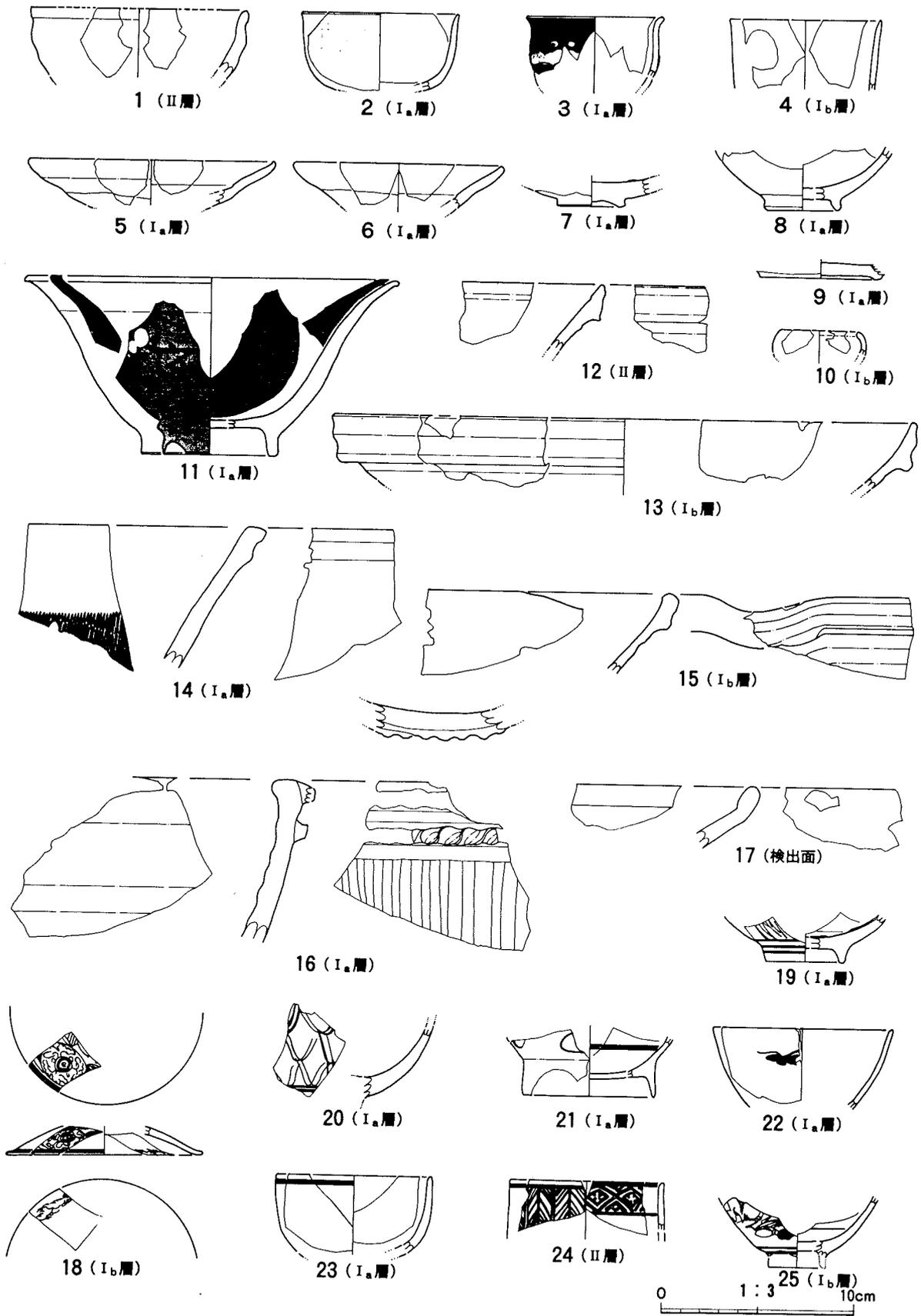
(3) 遺構外遺物

陶磁器 (第12・13図)

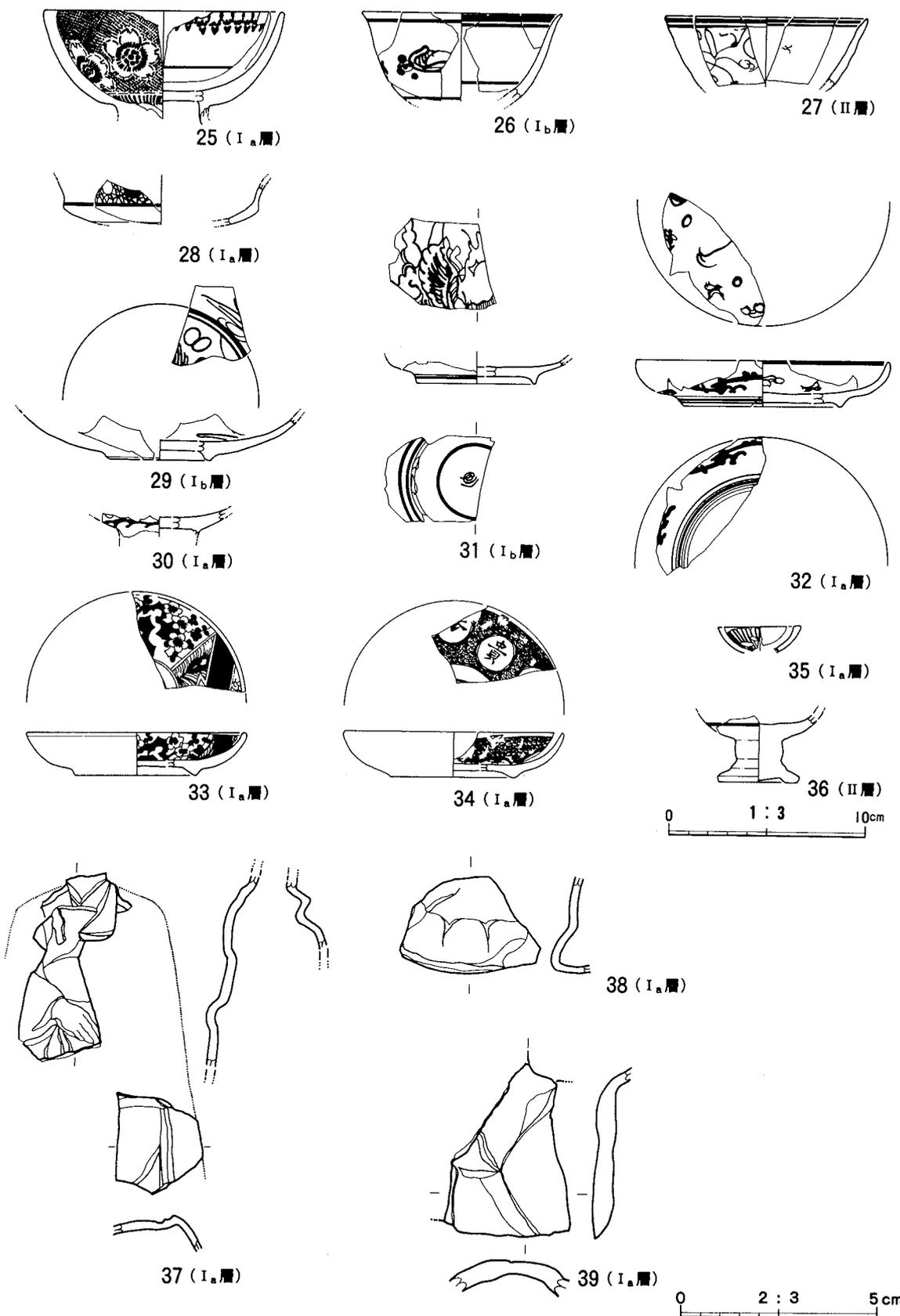
第12図1は瀬戸美濃大窯I期の鉄釉の天目茶碗の破片である。2・3は産地が不明であるが湯呑茶碗の破片である。2はうすい黄緑色の釉に銅緑釉をかけたもの、3は内面白濁釉、外面はチョコレート色の鉄蒔に白色、黄土色の文様を施すものである。共に18世紀以降の製品か。4は相馬系の灰釉筒形茶碗である。5は相馬大堀系の灰釉碗である。4・5は18世紀代の製品である。6～8は唐津の灰釉皿である。6・7は体部と口縁部境の内面に段を有し、体部外面下部が露胎となるもので、17世紀前葉の製品である。8は皿の底部で、外面及び高台部は露胎内面は灰釉でトチン痕がある。16世紀末葉の製品である。9は瀬戸美濃大窯III～V期の灰釉の底部である。内面に輪トチン痕が残り、高台は扁平である。10は白濁釉のかかる小形の合子のようなものか。11は肥前の京焼風陶器碗で、くすんだ黄橙色の胎土に透明釉、鉄絵の梅の木文を施す。12・13は備前系の挿鉢である。16世紀末から17世紀代の製品である。14の挿鉢は茶色の鉄釉がかかり、内面は細かな櫛目が入る。19世紀以降の国産品である。15は備前系の挿鉢口縁部で、暗赤褐色の釉がうすくかかる。17世紀から18世紀代の製品である。16・17は瓦質土器の手焙りの口縁部である。16は口縁部外面直下に突帯があり、指頭圧痕および胴部は縦方向のヘラミガキが施される。18～35は国産磁器類である。18は染付の蓋で18世紀～19世紀代のもの、19・20は肥前のくらわんか手の碗で19は梅花文の一部、20は二重綱目文で共に18世紀前葉から中葉の製品、21は肥前系の広東碗の底部で18世紀末から19世紀前半代のもの。22～25は18世紀末～19世紀代の肥前系の小形の碗類である。25はプリントによる桜の花文の碗で19世紀後半から20世紀代のもの。26は18世紀末以降の碗、27は江戸時代の碗で肥前系の可能性がある。28は小形の鉢で18世紀末以降であろう。29～34は皿類である。29は17世紀後半頃の肥前の皿である。30・31は肥前系の皿類で18世紀後半から19世紀代のものである。33・34は銅板プリントによる緑色の文様の皿で、近現代のものである。35は肥前系の小形の紅皿、36は肥前系の仏飯器である。ともに18世紀から19世紀の製品である。

37～39は塑像の破片である。このうち37・38は無釉の磁器で同一個体、39は橙色に焼成されており、白く彩色されていた形跡がある。

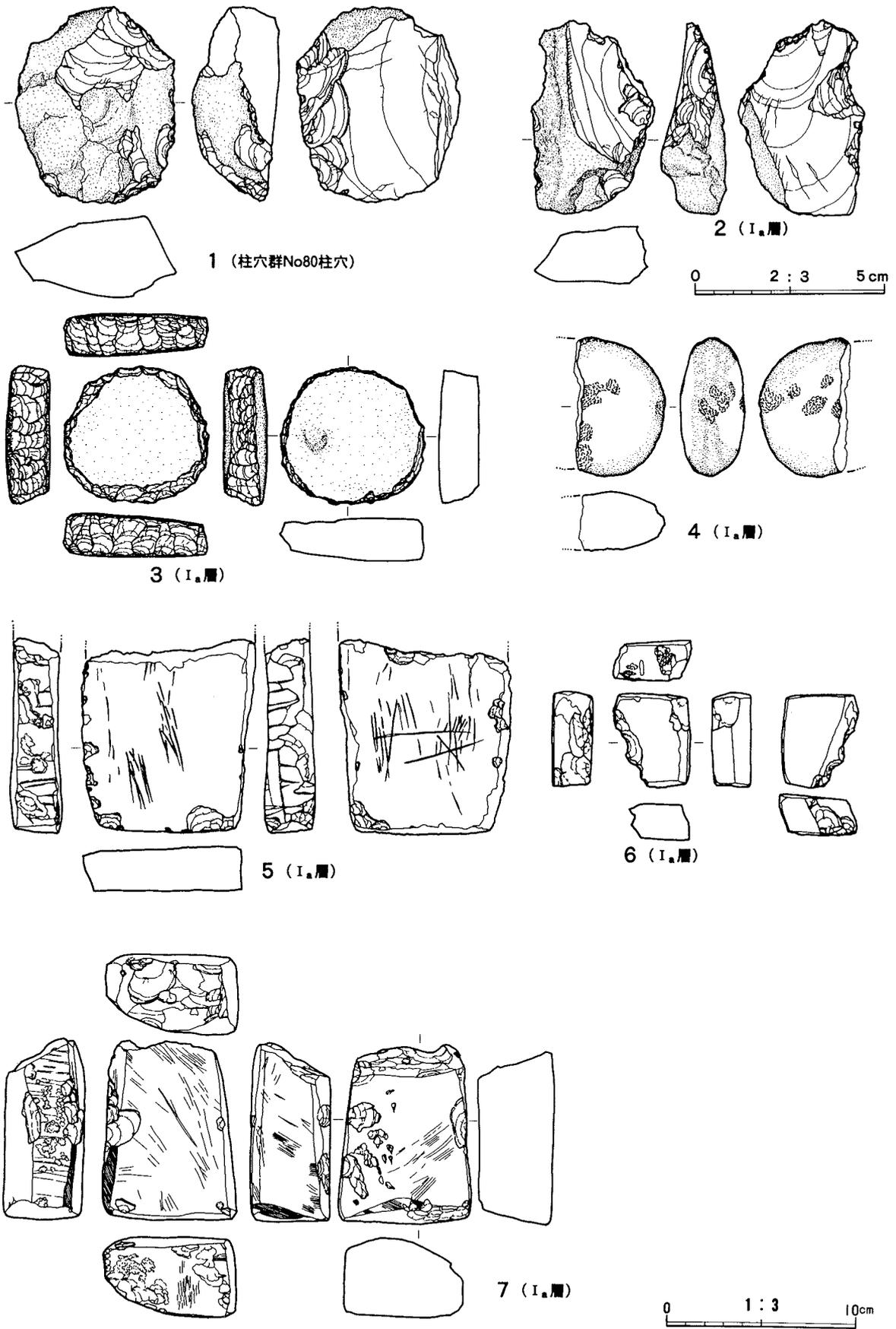
第14図2は縄文時代の削器、3は円形の扁平な礫の縁辺部を打ち欠いて調整したもの、4は凹石である。ともに縄文時代の石器であろう。



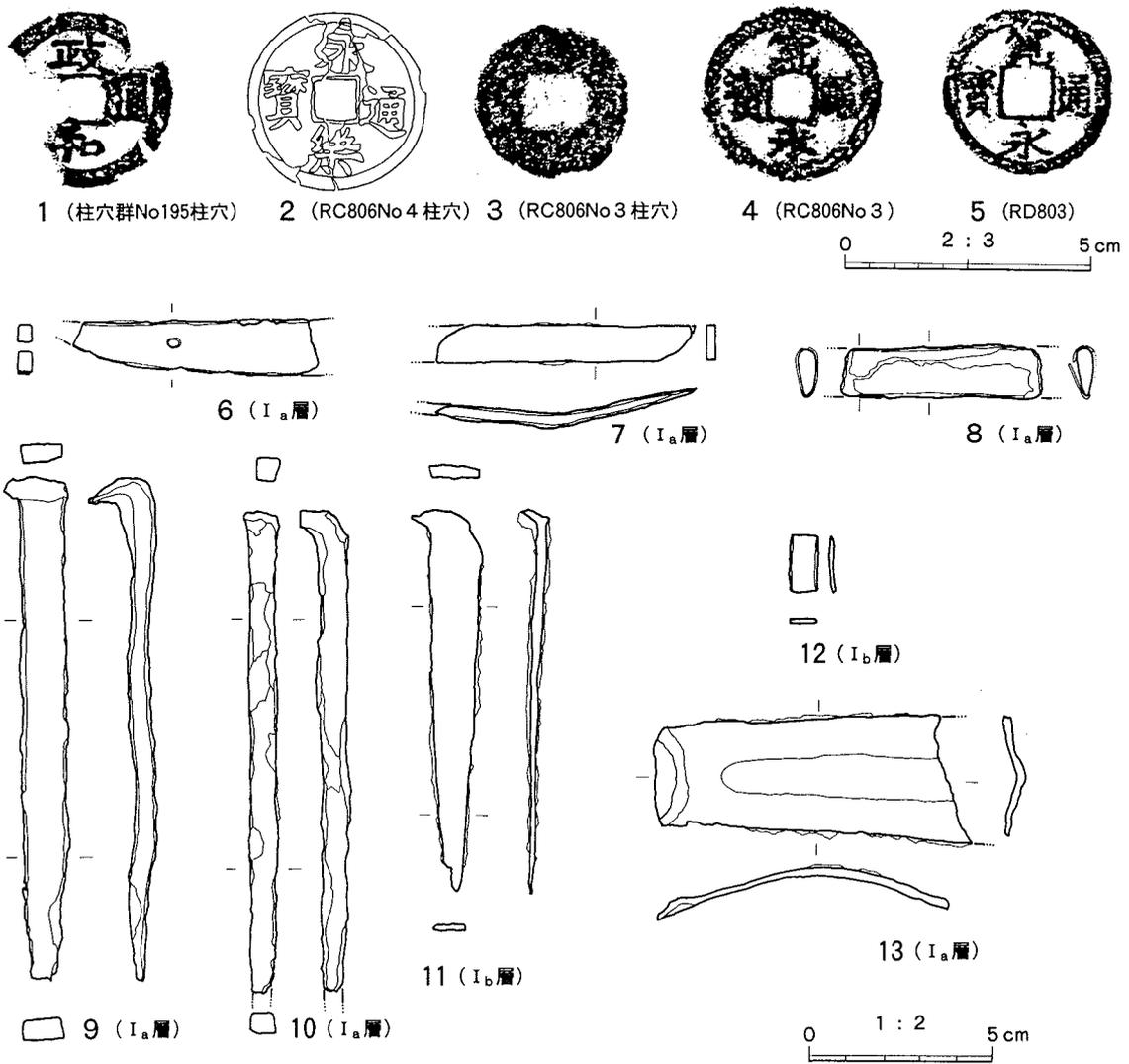
第12図 第1次調査遺構外出土陶磁器(1)



第13図 第1次調査遺構外出土陶磁器(2)、塑像



第14図 第1次調査石器・石製品



第15図 第1次調査金属製品

第14図5～7は表土から出土した砥石である。いずれも6面全てに使用痕があり、5・7の側面には細い棒状のものを研磨した痕跡が認められる。

第15図6～13は遺構外出土の金属器類である。6は小刀の柄部分で、目釘穴がある。7は子状刺突具で、切先部分のみ刃が作られる。8は小柄の柄の部分で銅板を巻いている。9～11は釘であるが、9・11は断面が平たく作られている。12は小さな銅板で用途不明のもの、13は同じく用途不明の鉄製品である。このほか図示していないが、蹄鉄や鉄鍋の底部など、近～現代の鉄製品も出土している。

2 第2次調査

(1) 遺構の検出状況

調査区
の位置

第2次調査区は遺跡の東半部、中央部を南北に分断するJR田沢湖線の南側、やや屈曲しながら南流する小諸葛川の西側に位置している。調査区は東西100m、南北40～60mの範囲で、南半部は水田として利用され、標高は130.2～130.6mをはかる。また線路寄りの北半部も現況は畑地として利用されており、南半部に比べ一段高く、標高は131.1mをはかる。

検出遺構

表土除去作業はかなりかたい水田床土があるため大型重機によって行われた。その結果、一段高い北半部の表土下からも水田床土のかたい酸化鉄層が確認され、畑作以前には水田耕作が行われていたことが窺われる。これら床土の除去作業に手間取りやや時間を費やしたが、精査の結果、縄文時代の陥し穴状遺構（Tピット）18基、円形土塚2基、古代末期以降と考えられる竪穴1棟、掘立柱建物跡17棟、柱列跡1条、溝跡5条、土塚10基および柱穴群約900口などを検出した。

確認された縄文時代および平安時代以降の遺構群はともに調査区のほぼ全域から検出されているが、南半部の低位面から検出された遺構については陥し穴状遺構・土塚・柱穴群などすべてにおいて開田時に深く削平され、遺構の残存状況は極めて不良と言える。

基本層序

本調査区では基本層序確認のため、グリッドによる深掘りを2箇所で行った。次の層位は調査区内で最も標高の低い東半部低位面からの基本層位である。

I層－耕作土（水田床土含む）

II層－やや粘質のシルト質暗褐色土を主体とし、塊状の褐色土を多く含む。層厚10cmほどで、上半部は削平されている。

III層－黒褐色～暗褐色土を主体とし、上部から炭化物・スコリア粒を含む暗褐色土のIII a層、スコリア粒を少量含みやグライ化した黒褐色土のIII b層、かたい暗褐色～褐色土のIII c層の3層に分けられる。全体の層厚は35～50cmをはかり、遺構検出面のほとんどがIII a層上面である。

IV層－かたい褐色土を主体とし、上部からスコリア粒を含む塊～層状の明褐色土のIV a層とスコリア粒を含む塊～層状の褐色～明黄褐色土のIV b層に分けられる。層厚は15～35cmをはかる。

V層－明褐色ないし暗オリーブ褐色土を主体とし、上部からかたい塊状の褐色土を含むV a層、粒～塊状のかたい暗褐色土および青砂層・スコリア粒を含むV b層に分けられ、層厚はV a層が15～25cm、V b層は5～8cmほどをはかる。

VI層－明褐色ないしにぶい黄褐色土を主体とした粘土層である。上部から粉～塊状のかたい褐色土を含むVI a層、粉～塊状の黄褐色土を含むVI b層に分けられ、層厚は30cmをはかる。

VII層－砂質の黄褐色土を主体とし、粒状の褐色土を微量含む。



第16図 稲荷町遺跡 第2・4・6・7次調査区（遺跡南東部）全体図

(2) 縄文時代の遺構と遺物

R D 001土坑 (第17図)

調査区西半部中央に位置する。東西方向 (N85° E) を長軸とする長楕円形を呈し、長さ3.2 規 模
5m、上端幅0.35~0.45m、底面幅0.1~0.25mをはかる。埋土は自然堆積で、上部から塊状の 埋 土
褐色土を含むかたい黒褐色土 (A層)、少量の褐色土を含む暗褐色土 (B層)、やや粘性を帯
びた塊状の暗褐色土 (C層)、暗褐色~褐色の粘性土 (D層)、粒~塊状の褐色土を含む黒褐
土 (E層) となっている。壁は上半部が外傾する断面V字形で、底面はほぼ平坦で、検出面か 断 面
らの深さは0.8mをはかる。出土遺物はないが、他の類例から縄文時代の遺構と推定される。

R D 002土坑 (第17図)

調査区西半部中央、R D 001と並列関係に位置する。プランは東西方向 (N85° E) を長軸と 規 模
する長楕円形を呈し、長さ3.2m、上端幅0.3~0.4m、底面幅0.08~0.1mをはかる。埋土は自然 埋 土
堆積で、上部から塊状の褐色土を含む暗褐色土 (A層)、粒~塊状暗褐色土を含む黒褐色土
(B層)、にぶい橙色~黄橙色の粘性土 (C層)、粒~塊状の褐色土を含む黒褐色土 (D層)
となっている。壁は横断面では上半部が外傾する断面V字形、縦断面では西端が袋状に壁内に 断 面
えぐり込む。底面は平坦で、検出面からの深さは0.7mをはかる。本遺構からの出土遺物はない。

R D 003土坑 (第17図)

R D 001・002と並列関係に位置する。ほぼ東西方向を長軸とする長楕円形で、長さ3.0m、 規 模
上端幅0.15~0.3m、底面幅0.08~0.15mをはかる。埋土は上部から褐色土を含む暗褐色土 埋 土
(A層)、塊状の暗褐色土を含む黒褐色土 (B層)、やや軟質の黒褐色土 (C層) の順となっ
ている。壁はほぼ垂直で検出面からの深さは0.5mをはかる。本遺構からの出土遺物はない。 断 面

R D 004土坑 (第17図)

調査区西半部中央、R D 003と直列関係に位置する。プランは東西方向 (N79° W) を長軸と 規 模
する長楕円形を呈し、長さ3.15m、上端幅0.25~0.3m、底面幅0.08~0.15mをはかる。プラ 埋 土
ンは暗褐色土上面で検出され、埋土は自然堆積で、上部から塊状の褐色土を含む黒褐色土 (A
層)、少量の粒~塊状暗褐色土を含む黒褐色土 (B層) の順となっている。壁はほぼ垂直、底 断 面
面はほぼ平坦で、検出面からの深さは0.45mをはかる。本遺構からの出土遺物はない。

R D 005土坑 (第17図)

調査区北端部西寄りに位置する。南北方向 (N3° W) を長軸とする長楕円形で、長さ2.8m、 規 模
上端幅0.35~0.5m、底面幅0.1~0.15mをはかる。埋土は自然堆積で、上部から黒褐色土を含 埋 土
む褐色~暗褐色土 (A~B層)、褐色土を含む黒褐色土 (C層)、黒褐色土を含む黄褐色土
(D層)、やわらかい黒褐色土 (E層) となっている。壁は横断面では上半部が外傾する断面 断 面
Y字形を呈す。底面はほぼ平坦で、深さは1.0mをはかる。本遺構からの出土遺物はない。

R D 006土坑 (第17図)

規模 調査区中央北寄りに位置する。北東-南西方向(N66°E)を長軸とする長楕円形を呈し、長さ3.9m、上端幅0.45~0.65m、底面幅0.08~0.15mをはかる。プランは暗褐色土層上面で検出され、埋土は自然堆積で、上部から粒状の褐色土を含む黒褐色土(A層)、塊状の褐色土を含む暗褐色土(B層)、塊状の黒褐色土を少量含む褐色土(C層)の順となっている。

断面 壁は底部から外傾する断面V字形で、底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは0.95mをはかる。なお、本遺構からの出土遺物はない。

R D 007土坑 (第18図)

規模 調査区中央南寄りに位置する。南北方向(N10°E)を長軸とする長楕円形を呈し、長さ3.3m、上端幅0.35~0.5m、底面幅0.1~0.15mをはかる。プランは暗褐色土層上面で検出され、埋土は自然堆積で、上部から塊状の褐色土を含む暗褐色土(A層)、粒~塊状暗褐色土を含む黒褐色土(B層)、粒状の褐色土を含む黒褐色土(C層)となっている。壁は横断面では上半部が外傾する断面V字形で、底面は平坦で、検出面からの深さは0.8mをはかる。本遺構からの出土遺物はない。

断面 部が外傾する断面V字形で、底面は平坦で、検出面からの深さは0.8mをはかる。本遺構からの出土遺物はない。

R D 008土坑 (第18図)

規模 調査区北端中央部に位置する。北西-南東方向(N47°W)を長軸とする長楕円形で、長さ3.05m、上端幅0.4~0.6m、底面幅0.08~0.3mをはかる。埋土は上部から黄褐色粘土(A層)、粒状の褐色土を含む暗褐色土(B層)、やや軟質の黒色土(C層)、黄褐色土と黒褐色土の塊状混合土(D層)、粒~塊状の黒褐色土を含む暗褐色土(E層)の順となっている。壁は底面から外傾しながら立ち上がり、断面V字形を呈する。検出面からの深さは0.75mをはかる。本遺構からの出土遺物はない。

断面 部が外傾しながら立ち上がり、断面V字形を呈する。検出面からの深さは0.75mをはかる。本遺構からの出土遺物はない。

R D 009土坑 (第18図)

規模 調査区北端中央部、R D 008と平行関係に位置する。プランは北西-南東方向(N42°W)を長軸とする長楕円形を呈し、長さ3.3m、上端幅0.3~0.45m、底面幅0.05~0.1mをはかる。

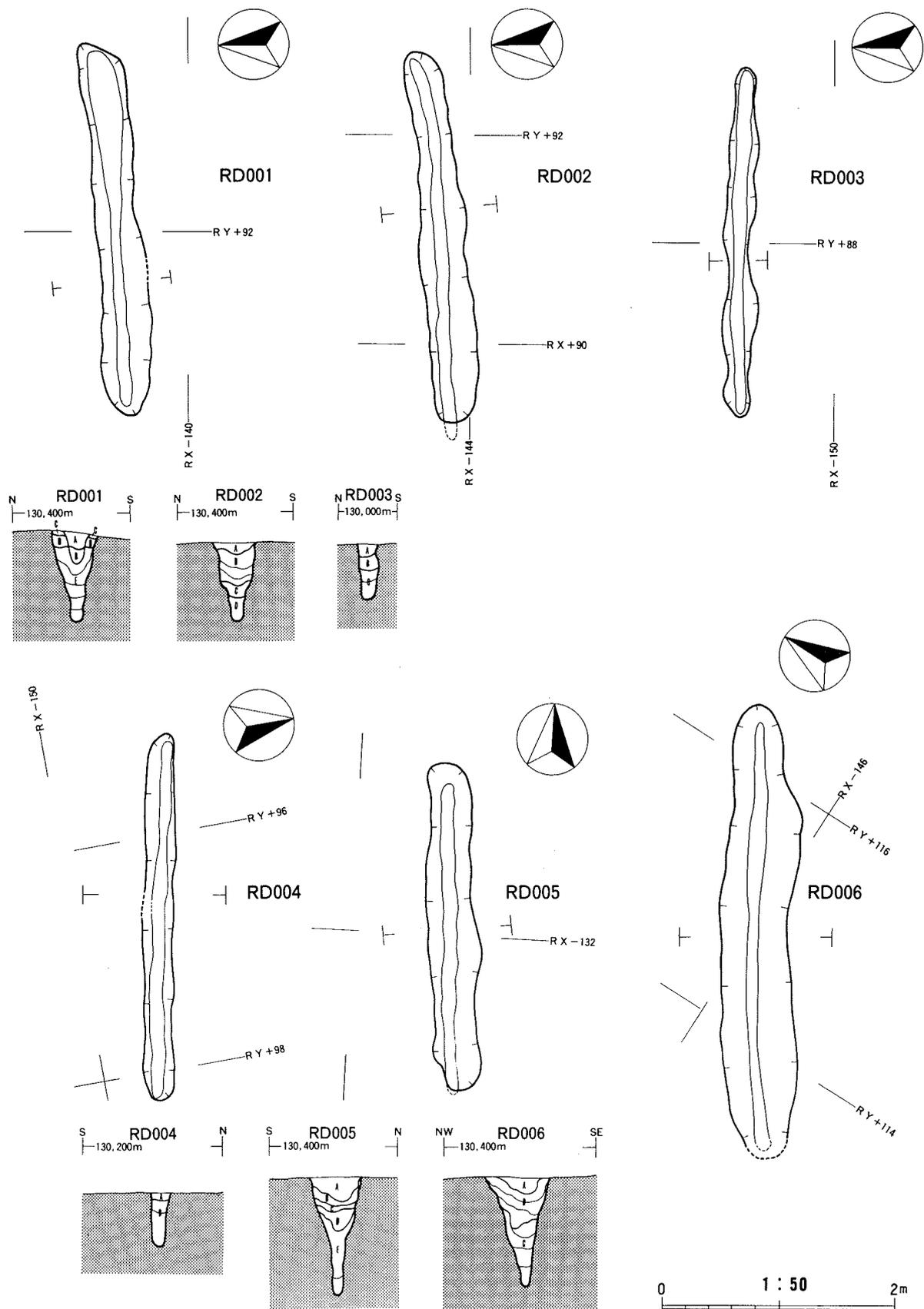
埋土 埋土は自然堆積で、上部から粒~塊状の褐色土を含む暗褐色土(A層)、塊状の暗褐色土を含む黒褐色土(B層)の順となっている。壁は底面から外傾しながら立ち上がり、断面V字形を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは0.55mをはかる。本遺構からの出土遺物はない。

断面 呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは0.55mをはかる。本遺構からの出土遺物はない。

R D 010土坑 (第18図)

規模 調査区中央部に位置し、東端部がR D 011に切られる。ほぼ東西方向を長軸とする長楕円形で、長さ3.2m、上端幅0.25~0.35m、底面幅0.07~0.1mをはかる。埋土は自然堆積で、上部から暗褐色土を含む黒褐色土(A層)、粒~塊状の黒褐色土を含む暗褐色土(B層)、やや軟質の黒褐色土(C層)の順となっている。壁は下半部がほぼ垂直、上半部がやや外傾する断面Y字形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは0.7mをはかる。本遺構からの出土遺物はない。

断面 質の黒褐色土(C層)の順となっている。壁は下半部がほぼ垂直、上半部がやや外傾する断面Y字形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは0.7mをはかる。本遺構からの出土遺物はない。



第17図 第2次調査R D001~006土塚

R D011土坑 (第18図)

規模 調査区中央部に位置し、北端部がR D010を切る。北西—南東方向(N29° W)を長軸とする長楕円形を呈し、長さ3.9m、上端幅0.3~0.55m、底面幅0.1~0.25mをはかる。プランは暗褐色土層上面で検出され、埋土は自然堆積で、上部から粘性のある褐色土を含む黒褐色土(A層)、塊状の褐色土を含む暗褐色土(B層)、塊状の黒褐色土を少量含む褐色土(C層)の順となっている。壁は底部から外傾する断面U字形で、底面はほぼ平坦、検出面からの深さは、0.45mをはかる。なお、本遺構からの出土遺物はない。

R D012土坑 (第18図)

規模 調査区中央東寄りに位置する。南北方向(N6° W)を長軸とする長楕円形を呈し、長さ3.75m、上端幅0.4~0.5m、底面幅0.05~0.08mをはかる。プランは暗褐色粘土層上面で検出され、埋土は自然堆積で、上部から粒~塊状の褐色土を含む暗褐色土(A層)、黄褐色土と黒褐色土の塊状混合土(B層)、塊状の黄褐色土を含む黒褐色土(C層)、粒~塊状の褐色土を含む黒褐色土(D層)の順となっている。壁は底面から外傾しながら立ち上がる断面V字形を呈し、底面は平坦で幅狭く、検出面からの深さは1.0mをはかる。本遺構からの出土遺物はない。

R D013土坑 (第18図)

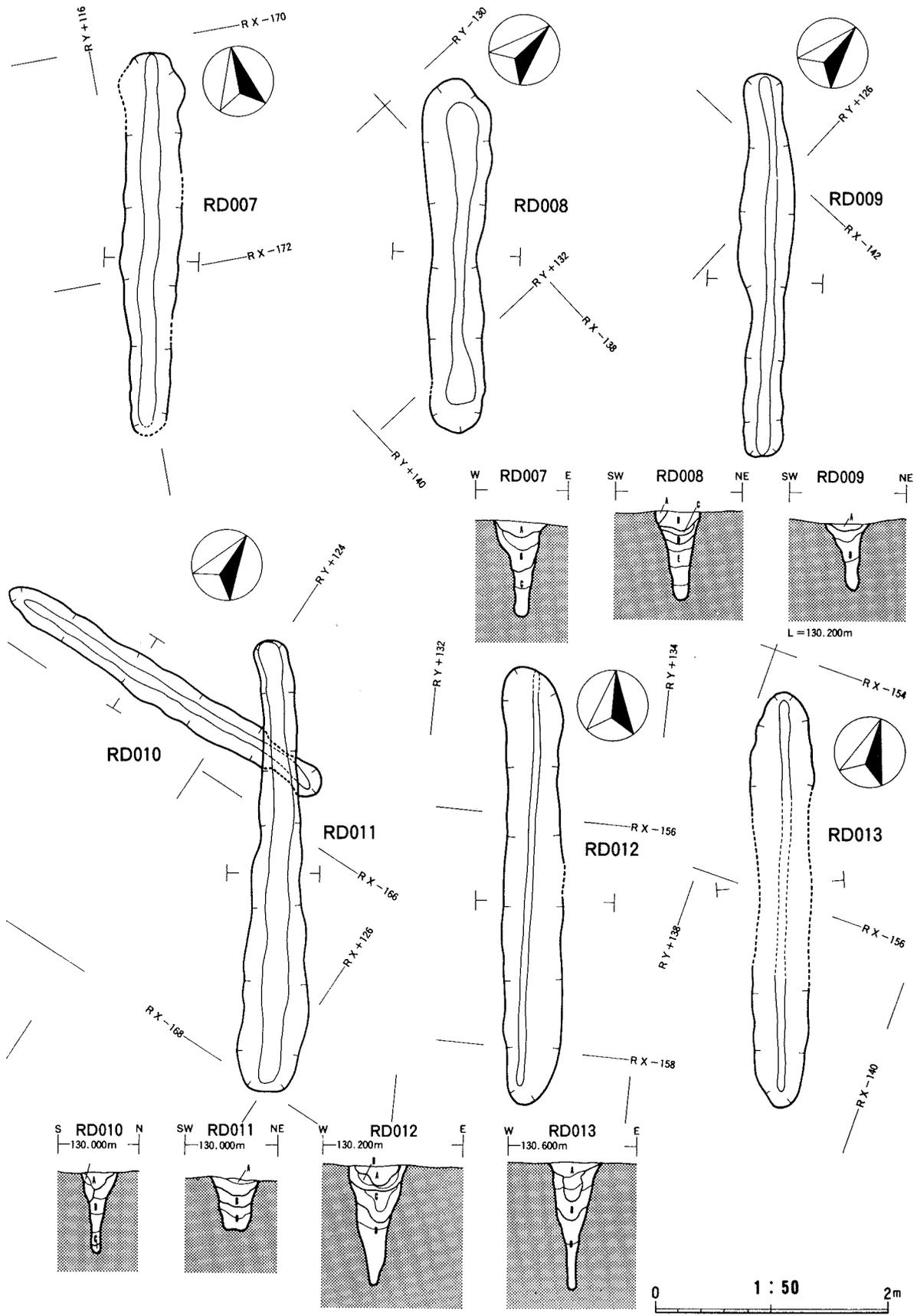
規模 調査区中央東寄りに位置する。R D012と並行の南北方向(N19° W)を長軸とする長楕円形を呈し、長さ3.55m、上端幅0.45~0.55m、底面幅0.05~0.1mをはかる。埋土は上部から粒~塊状の褐色土を含む黒褐色土(A層)、塊状の黒褐色土を含む褐色土(B層)、粒~塊状の褐色土を含む黒褐色土(C層)の順となっている。壁は下半部がほぼ垂直、上半部がやや外傾する断面Y字形を呈し、検出面からの深さは1.1mをはかる。本遺構からの出土遺物はない。

R D014土坑 (第19図)

規模 調査区北東部に位置する。プランは北東—南西方向(N51° E)を長軸とする長楕円形を呈し、長さ3.5m、上端幅0.4~0.55m、底面幅0.05~0.1mをはかる。埋土は自然堆積で、上部から粒状の褐色土を含む黒褐色土(A層)、塊状の黒色土を含む黄褐色土(B層)、塊状の褐色土を含む黒褐色土(C層)の順となっている。壁は下半部がほぼ垂直、上半部がやや外傾する断面Y字形を呈し、検出面からの深さは1.0mをはかる。本遺構からの出土遺物はない。

R D015土坑 (第19図)

規模 調査区北東部に位置する。プランは東—西方向(N87° E)を長軸とする長楕円形を呈し、長さ4.1m、上端幅0.4~0.75m、底面幅0.1~0.2mをはかる。埋土は自然堆積で、上部からやや粘性をもつ粒状の褐色土を含む黒褐色土(A層)、暗褐色土と粘性黄褐色土の塊状混合土(B層)、粒~塊状の褐色土を含む軟質の黒褐色土(C層)の順となっている。壁は幅広の底面から外傾しながら立ち上がる断面U字形を呈し、検出面からの深さは0.85mをはかる。本遺構からの出土遺物はない。



第18図 第2次調査R D007~013土塚

R D016土坑 (第19図)

規模 調査区北東部に位置し、並行に走る古代のR G402に切られる。北東-南西方向(N37° E)を長軸とする長楕円形を呈し、長さ3.85m、上端幅0.8~1.0m、底面幅0.25~0.35mをはかる。

埋土 埋土は自然堆積で、粒~塊状の褐色土を含む黒褐色土(A層)、黄褐色土と黒褐色土の塊状混合土(B層)、粒~塊状の褐色土を含む黒褐色土(C層)の順となっている。壁は下半部がほぼ垂直で幅広の底面から立ち上がり、断面は上半部が外傾するY字形を呈し、検出面からの深さは0.85mをはかる。また長軸両端部は角張って袋状に入り込む形状を呈している。

R D017土坑 (第19図)

規模 調査区東端部中央に位置する。北西-南東方向(N34° W)を長軸とする長楕円形を呈し、重複関係では、南東端でR D020を切る。長さ3.0m、上端幅0.5~0.55m、底面幅0.05~0.2mをはかり、やや長軸両端部が幅広となっている。埋土は自然堆積で、上部から粒~塊状の褐色土を含む黒褐色土(A層)、塊状の黄褐色土を含む黒褐色土(B層)、塊状の黄褐色土を含む暗褐色土(C層)、粒状の褐色土を含む黒褐色土(D層)の順となっている。壁は下半部がほぼ垂直、上半部が外傾する断面Y字形を呈し、検出面からの深さは0.65mをはかる。

R D018土坑 (第19図)

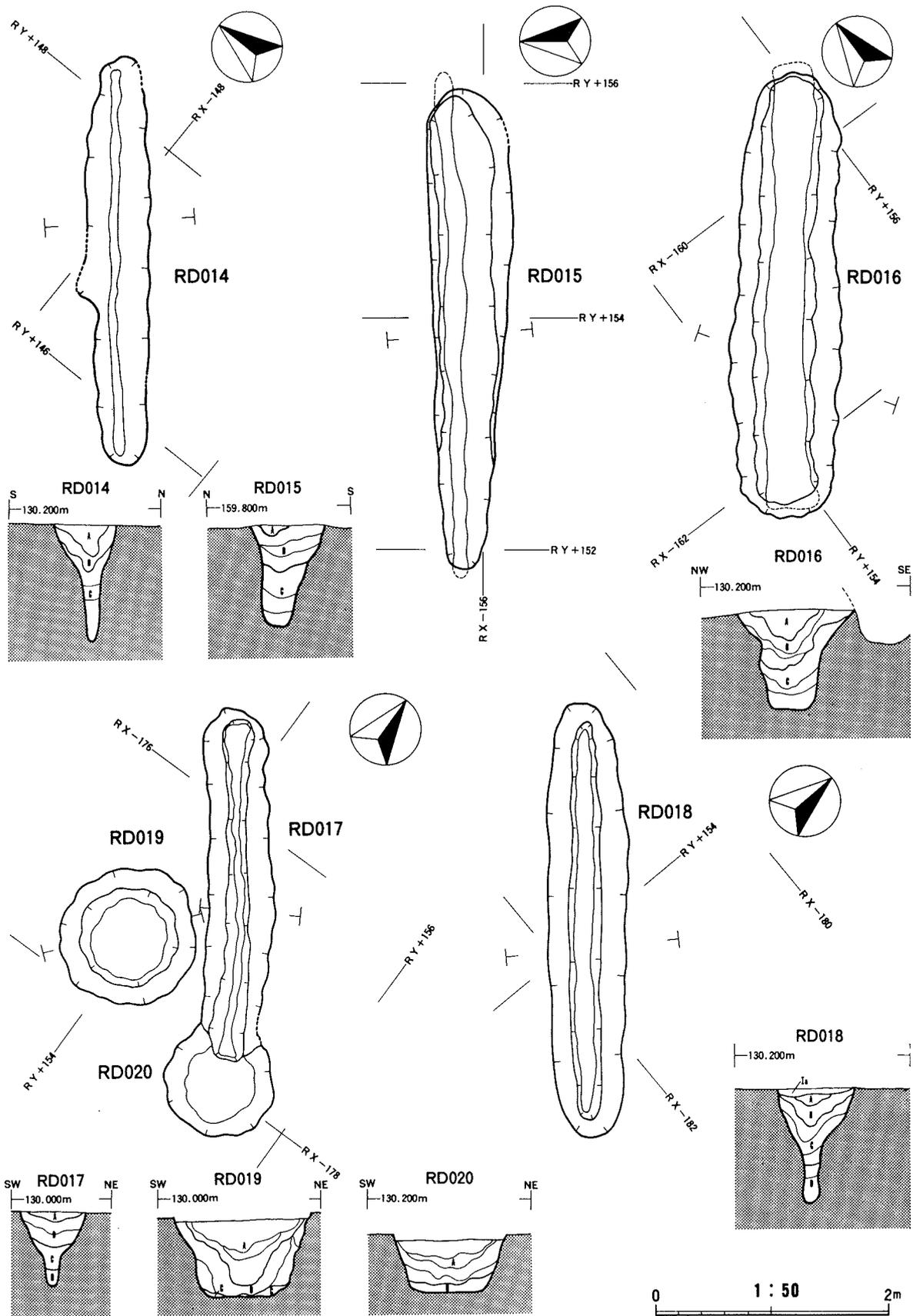
規模 調査区東端部南寄りに位置する。R D017とほぼ並行の北西-南東方向(N50° W)を長軸とする長楕円形を呈し、長さ3.7m、上端幅0.65~0.7m、底面幅0.1~0.15mをはかる。埋土は上部から粒~塊状の褐色土を含む黒褐色土(A層)、塊状の黄褐色土を含む黒褐色土(B層)、塊状の黄褐色土を含む暗褐色土(C層)、塊状の灰白色粘土を含む暗褐色土(D層)の順となっている。壁は下半部がほぼ垂直、上半部が外傾する断面Y字形を呈し、検出面からの深さは1.0mをはかる。なお本遺構からの出土遺物はない。

R D019土坑 (第19図)

規模 調査区東端部中央に位置し、R D0170・020に隣接する。プランは円形を呈し、上端直径1.15~1.2m、底面直径0.65mをはかる。埋土は自然堆積で、上部から粒状の褐色土を含むかたい黒褐色土(A層)、粒~塊状の黄褐色土および炭化粒を含む黒褐色土(B層)、粒状の褐色土を含む黒褐色土(C層)の順となっている。壁は底面から直線的に外傾する形状を呈し、検出面からの深さは0.65mをはかる。なお本遺構からの出土遺物はない。

R D020土坑 (第19図)

規模 調査区東端部中央に位置し、長楕円形を呈するR D020に切られる。プランは円形を呈し、上端直径0.95~1.0m、底面直径0.6mをはかる。埋土は自然堆積で、上部から粒状の褐色土を含むかたい黒褐色土(A層)、黒褐色土と褐色土の塊状混合土(B層)の順となっている。壁は底面から直線的に外傾する形状を呈し、検出面からの深さは0.5mをはかる。なお本遺構からの出土遺物はない。

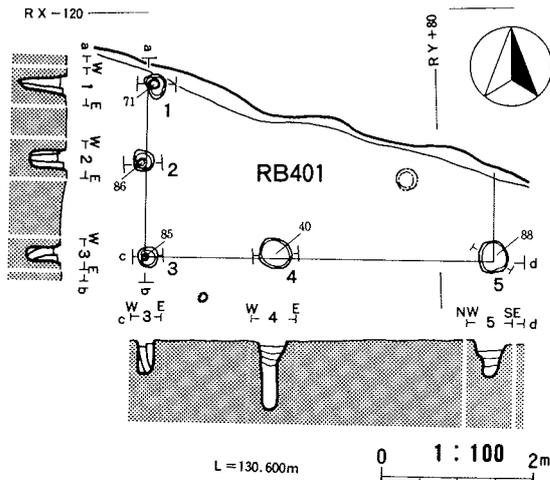


第19図 第2次調査RD014~020土塚

(3) 古代以降の遺構と遺物

R B 401掘立柱建物跡 (第20図)

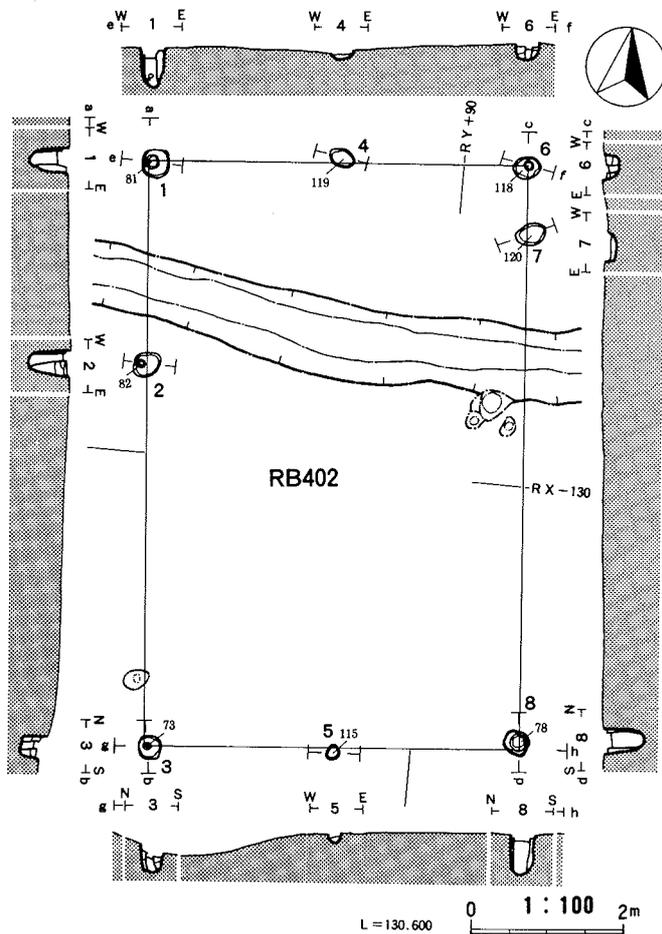
位置・規模 調査区北西端に位置し、南東側にR B 402が位置する。桁行2間以上(総長2.30m以上)、



間2間(4.6m)の規模で、棟方向はほぼ真北を示し、大半は調査区外になるがR B 402と同様の南北棟の可能性はある。柱間寸法は桁行の1・2間が1.04m(3尺4寸)、2・3間が1.26m(4尺2寸)、梁間の3・4間が1.74m(5尺7寸)、4・5間が2.86m(9尺4寸)でややばらつきがある。柱穴の直径は1~3が20~30cmで柱痕跡が確認でき、深さは40~60cm、4・5は直径40cmで4は深さ90cmをはかる。埋土は柱痕跡が黒褐色土主体、掘方は黒褐色~暗褐色土の混合土を埋土としている。

なお出土遺物はない。

第20図 第2次調査R B 401掘立柱建物跡



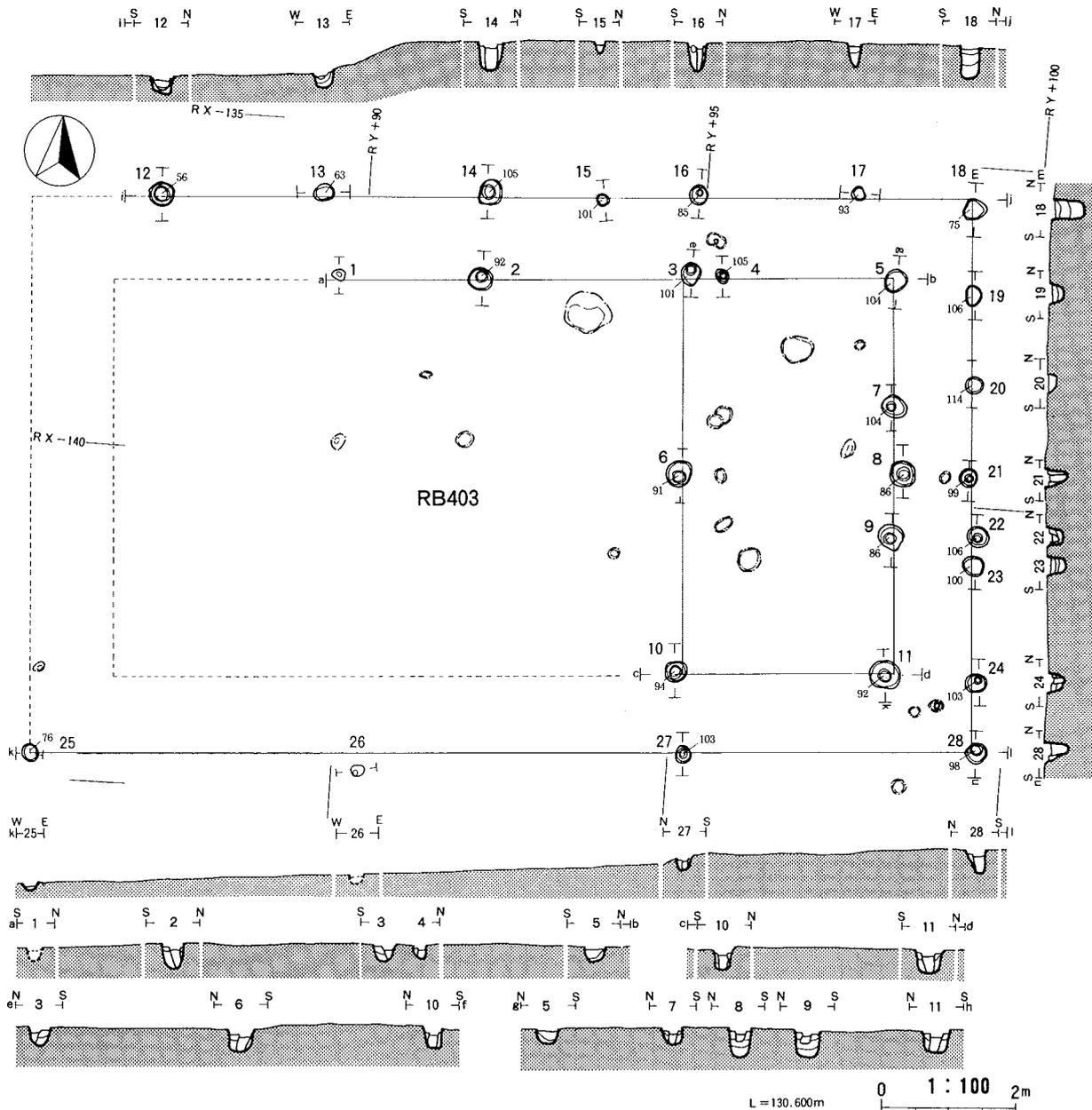
R B 402掘立柱建物跡 (第21図)

調査区の北西部、四面庇建物跡のR B 403の北側に位置し、R G 401と重複するが新旧関係は不明。桁行2間(総長7.72m)、梁間2間(4.96m)の規模で、棟方向はN 5° Wを示す南北棟の建物跡である。柱間寸法は西側柱筋の1・2間が2.64m(8尺7寸)、2・3間が5.02m(16尺6寸)、東側柱筋の6・7間が0.88m(2尺9寸)、7・8間が6.84m(22尺6寸)、南北妻では1・4間および3・5間が2.52~2.56m(8尺4寸)、4・6間および5・8間が2.4~2.44m(8尺)をはかる。掘方の平面形は円形ないし隅丸方形を呈し、直径は20~40cmで4・5・7以外は柱痕跡が確認でき、1・2・8の深さは50~60cmをはかる。埋土は柱痕跡が軟質の黒褐色土を主体とし、掘方はややかたい黒褐色~暗褐色土の混合土を埋土としている。なお本掘立柱建物跡を構成する柱穴からの出土遺物はない。

第21図 第2次調査R B 402掘立柱建物跡

R B 403掘立柱建物跡 (第22図)

調査区の北西部、南北棟のR B 402の南側に位置する四面庇建物跡である。縄文時代の土坑 位置・規模
 R D 002・003と重複し、建物跡南西部の柱穴群は開田時の削平により大半が欠失している。庇
 桁行6～7間(推定総長14.0m)、梁間3間ないし7間(8.0m)、母屋桁行4間(総長11.6m)、
 梁間2～4間(5.84m)の規模で、棟方向はS86°Wを示す東西棟の建物跡である。柱間寸法 柱間寸法
 は母屋の北側柱筋の1・2間が2.10m(6尺9寸)、2・3間が3.14m(10尺4寸)、小柱穴の4を
 通して3・5間が3.00m(10尺)、南側柱筋の10・11間が3.1m(10尺)、妻側では西妻が不明だ
 が、東妻側で5・8間が2.90m(9尺6寸)、8・11間が2.94m(9尺7寸)をはかる。また柱穴
 8寄りには7・9の柱穴も位置し、7・8間が1.0m(3尺3寸)、8・9間が0.92m(3尺)をはかる。
 なお3・10間には間仕切りと考えられる区画をもち、3・6間および6・10間ともに2.92m(9尺6寸)



第22図 第2次調査R B 403掘立柱建物跡

をはかる。

庇の柱間寸法は残存している北側柱筋の12・13間、13・14間および16・17間が2.40～2.44m（8尺）、小柱穴15を通して14・16間が3.14m（10尺4寸）、17・18間がやや狭く1.62m（5尺3寸）、東妻側では間隔が狭く、18・19間、19・20間および20・21間が1.30～1.36m（4尺3寸～4尺5寸）で、21・22間は0.88m（2尺9寸）、22・23間は0.42m（1尺4寸）、23・24間は1.70m（5尺6寸）、24・25間は1.04m（3尺4寸）で、また母屋と庇の幅は四方ともに1.20m（4尺）をはかる。

柱 穴 掘方の平面形は母屋・庇ともに円形を呈し、母屋では直径30～50cm、深さ20～40cmをはかり柱穴5を除き柱痕跡が確認されている。庇は直径20～40cmで深さはやや浅く、柱穴18を除くと15～30cmをはかる。埋土は柱痕跡がやや軟質の黒褐色土、掘方はややかたく黒褐色～暗褐色土の混合土を埋土としている。なお本建物跡からの出土遺物はない。

R B 404掘立柱建物跡（第23図）

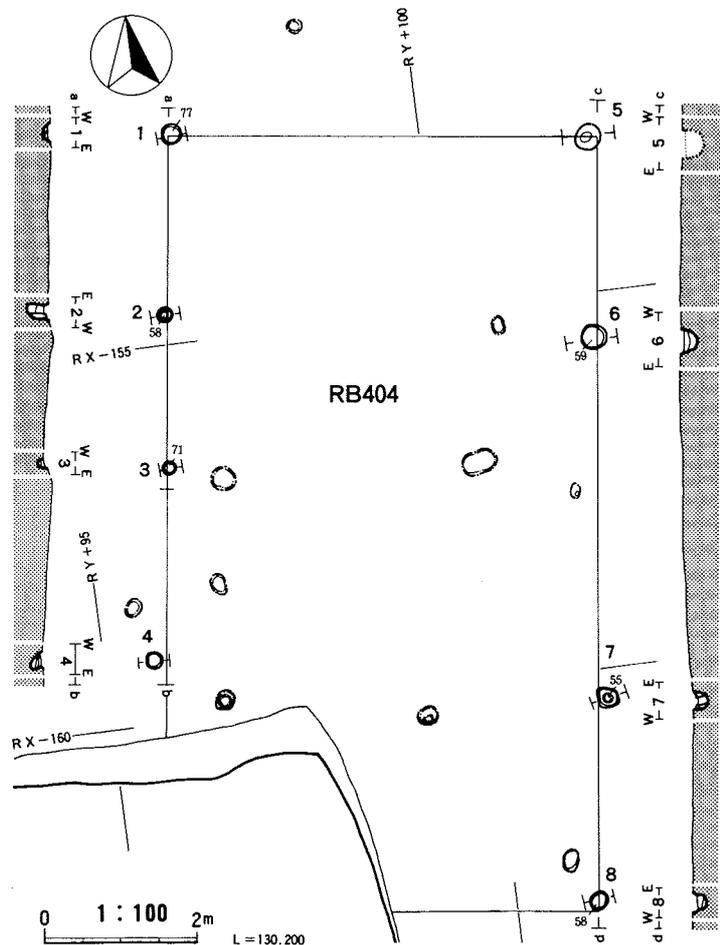
位置・規模 調査区の西半中央部、四面庇建物跡のR B 403の南側に位置する。桁行3ないし4間（総長10.13m）、梁間1間（5.64m）の規模で、棟方向はN7° Eを示す南北棟の建物跡である。柱間寸法は西側柱筋の1・2間が2.34m（7尺7寸）、2・3間が2.0m（6尺6寸）、3・4間が2.56m（8尺4寸）、東側柱筋

の5・6間が2.63m（8尺7寸）、6・7間が4.80m（15尺8寸）、7・8間が2.70m（8尺9寸）、北妻の1・5間では5.64m（18尺6寸）をはかる。掘方の平面形は円形で、直径は20～35cmで柱穴2・7では柱痕跡を確認。いずれも深さは浅く、10～30cmをはかる。

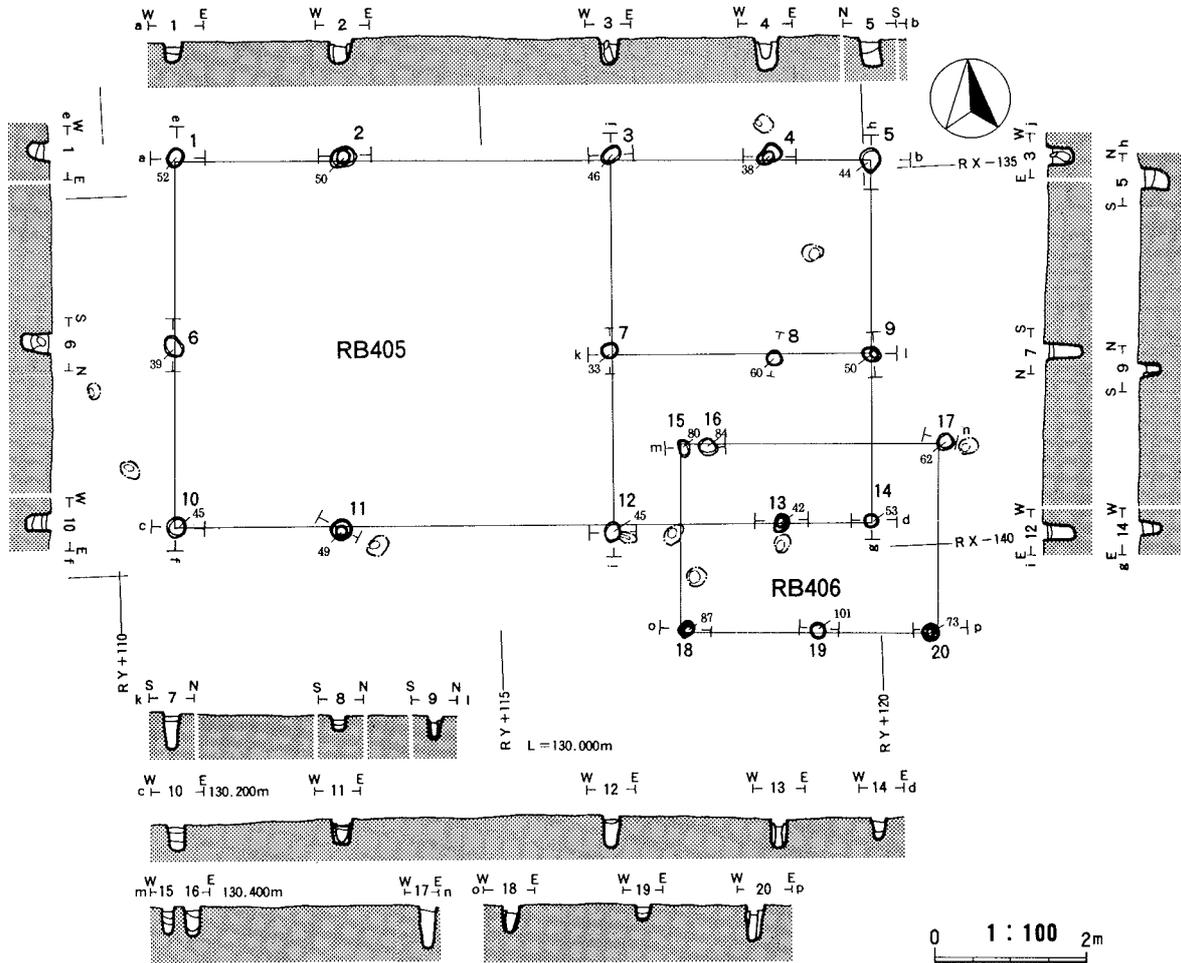
埋土は柱痕跡が黒褐色土、掘方はややかたい黒褐色～暗褐色土の混合土、その他も黒褐色土を主体としている。なお本建物跡からの出土遺物はない。

R B 405掘立柱建物跡（第24図）

位置・規模 調査区の北半中央部、



第23図 第2次調査R B 404掘立柱建物跡

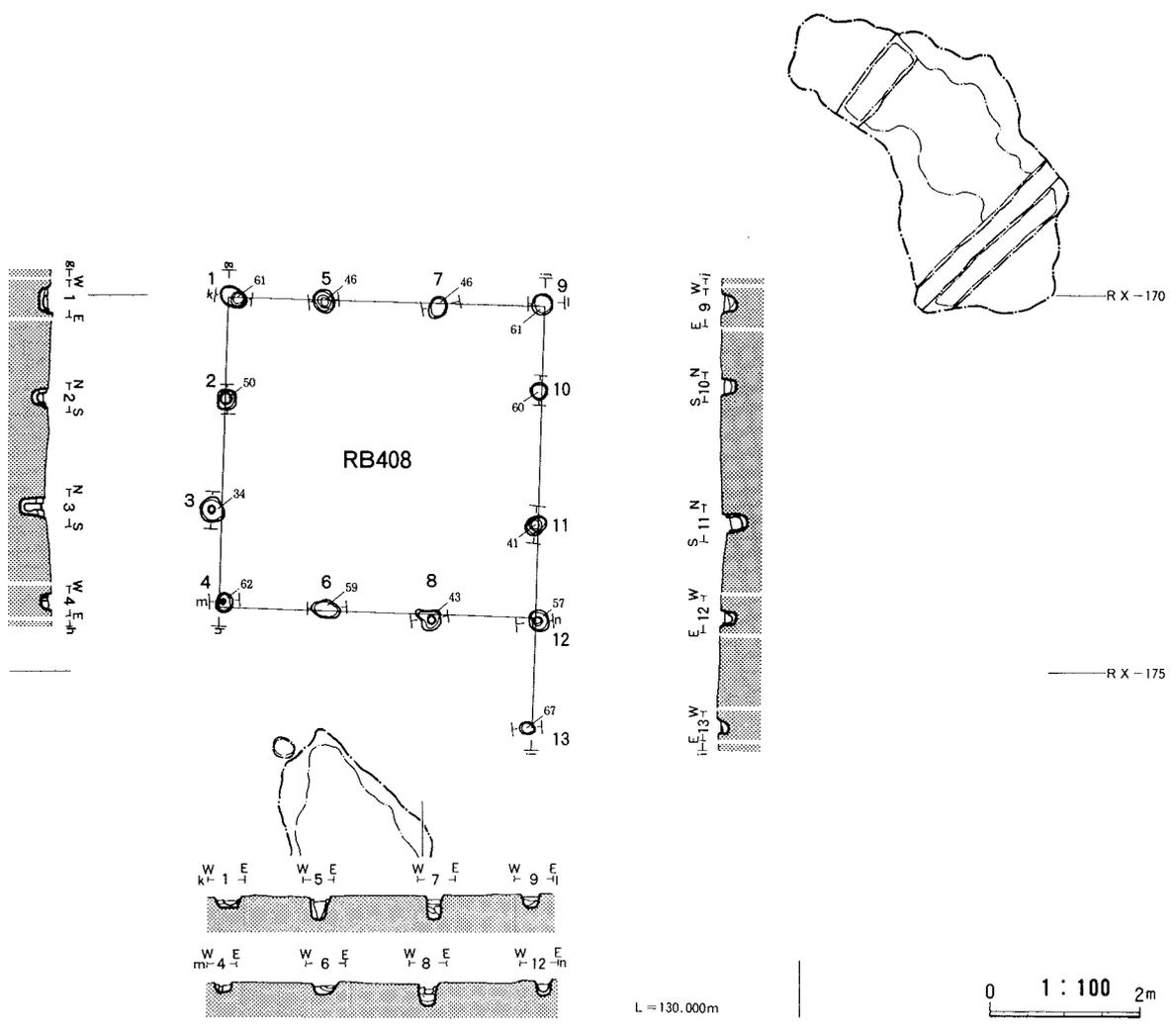
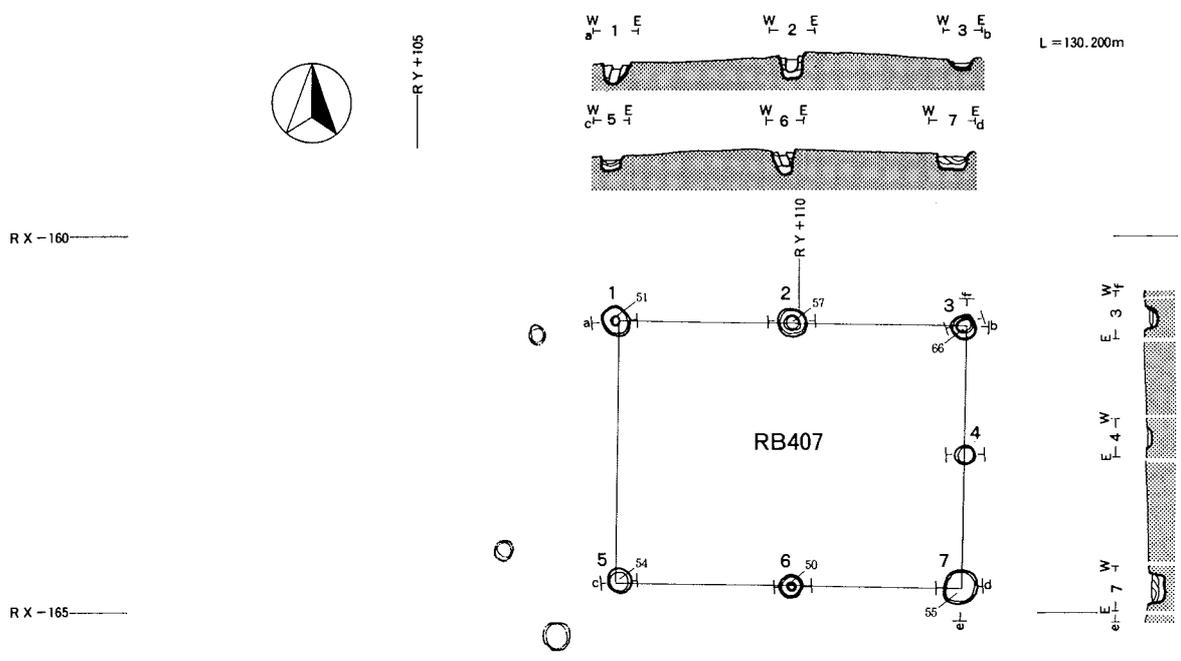


第24図 第2次調査 R B 405・406掘立柱建物跡

R B 406と重複する建物跡で、桁行4間（総長9.20m）、梁間2間（総長4.80m）の規模で、棟方向はS88° Eを示す東西棟の建物跡である。柱間寸法は北側および南側柱筋の柱穴がほぼ柱間寸法に対応する位置関係にあり、平均値では1・2間・10・11間が2.22m（7尺3寸）、2・3間・11・12間が3.57m（11尺8寸）、3・4間・12・13間および間仕切となる7・8間が2.14m（7尺1寸）、4・5間・8・9間・13・14間が1.28m（4尺2寸）をはかる。西妻側では1・6間が2.46m（8尺1寸）、6・10間が2.34m（7尺7寸）、東妻側の5・9間および間仕切の3・7間が2.56m（8尺4寸）、9・14間および7・12間が2.24m（7尺4寸）をはかる。掘方の平面形は円～不整形で直径20～40cmを柱穴はかり、柱穴3・6・11からは根石となる拳大の自然石が検出されている。深さはおよそ30～50cmで、埋土は柱痕跡が黒褐色土、掘方はややかたい混合土を主体としている。建物跡出土の遺物はない。

R B 406掘立柱建物跡（第24図）

調査区の北半中央部、R B 405と重複する建物跡で、桁行2間（総長3.40m）、梁間1間（総長2.50m）の規模で、棟方向はS87° Eを示す東西棟の建物跡である。柱間寸法は北側柱筋の15・16間が0.36m（1尺9寸）、16・17間が3.04m（10尺）、南側柱筋の18・19間が1.80m（5尺9寸）、19・20間が1.60m（5尺3寸）をはかる。また西妻側の15・18間および東妻側の



第25図 第2次調査RB407・408掘立柱建物跡

17・20間は2.50m（8尺3寸）をはかる。掘方の平面形は円～楕円形で、直径は15～25cmをはかり、深さはおよそ20～55cmで、埋土は柱痕跡および掘方ともに黒褐色土を主体としている。建物跡出土の遺物はない。

R B 407掘立柱建物跡（第25図）

調査区中央部西寄り、R E 401竪穴状遺構の南西部に位置する建物跡で、桁行2間（総長4.58m）、梁間1～2間（総長3.48m）の規模で、棟方向はほぼ東西方向を示す東西棟の建物跡である。

柱間寸法は北側柱筋および相対する南側柱筋もおおよそ2.28～2.30m（約7尺5寸）等間で、西妻側は1間で1・5間が3.48m（11尺5寸）、東妻側は2間で3・4間および4・7間ともに1.74m（5尺7寸）等間をはかる。掘方の平面形は円形で、直径は30～50cmをはかり、深さはいずれも浅く10～30cm程度である。柱穴埋土は柱痕跡および掘方ともに黒褐色土を主体としている。なお本建物跡出土の遺物はない。

R B 408掘立柱建物跡（第25図）

調査区南半部西寄り、R G 405溝跡の北部に位置する建物跡で、桁行は柱穴13を含めると3ないし4間（総長4.14～5.62m）、梁間3間（総長4.22m）の規模で、棟方向はN2° Eを示す南北棟の建物跡と考えられる。柱間寸法は西側柱筋の1・2間が1.34m（4尺4寸）、2・3間が1.48m（4尺9寸）、3・4間が1.32m（4尺4寸）、東側柱筋の9・10間が1.12m（3尺7寸）、10・11間が1.80m（5尺9寸）、11・12間が1.22m（4尺）さらに柱穴13を含めると12・13間が1.48m（4尺9寸）をはかる。また北妻では1・5間が1.30m（4尺3寸）、5・7間が1.50m（5尺）、7・9間が1.42m（4尺7寸）、南妻側ないし間仕切と考えられる4・6間が1.46m（4尺8寸）、6・8間が1.40m（4尺6寸）、8・12間が1.36m（4尺5寸）をはかる。掘方の平面形は円形ないし不整楕円形を呈し、直径は20～35cm、深さは20～35cmで柱痕跡が確認できるものが多く、柱穴7では根石も見られる。埋土は柱痕跡がやわらかい黒褐色土、掘方は黒褐色土と暗褐色土のやしまりのある混合土を主体としている。なお本建物跡からの出土遺物はない。

R B 409掘立柱建物跡（第26図）

調査区北東部の一角で、柱穴群が密集する地区に位置する建物跡で、小規模な柱穴群で構成されている。桁行2ないし5間（総長4.70m）、梁間2間（総長4.10m）の規模で、棟方向はS86° Wを示す東西棟の建物跡である。柱間寸法は北側柱筋の1・2間が1.16m（3尺8寸）、2・3間が1.10m（3尺6寸）、3・4間が0.59m（1尺9寸）、4・5間が0.54m（1尺8寸）、5・6間が1.31m（4尺3寸）、南側柱筋の9・10間が3.26m（10尺8寸）、10・11間が1.44m（4尺7寸）、また西妻および東妻側では相対する1・7間・6・8間が1.92m（6尺3寸）、7・9間・8・11間が2.18m（7尺2寸）をはかる。掘方の平面形は円形ないし不整楕円形を呈し、直径は20～50cm、深さは30～50cmで柱痕跡が確認できるものが多く、埋土は全体的に黒褐色土を主体とし、やわらかい。なお本建物跡からの出土遺物はない。

R B 410掘立柱建物跡 (第26図)

位置・規模 調査区北東部、南北方向のR C 401柱列跡の南西北部に位置する建物跡で、桁行3間（総長5.66m）、梁間2間（総長4.32m）の規模で、棟方向はS80° Wを示す東西棟の建物跡である。

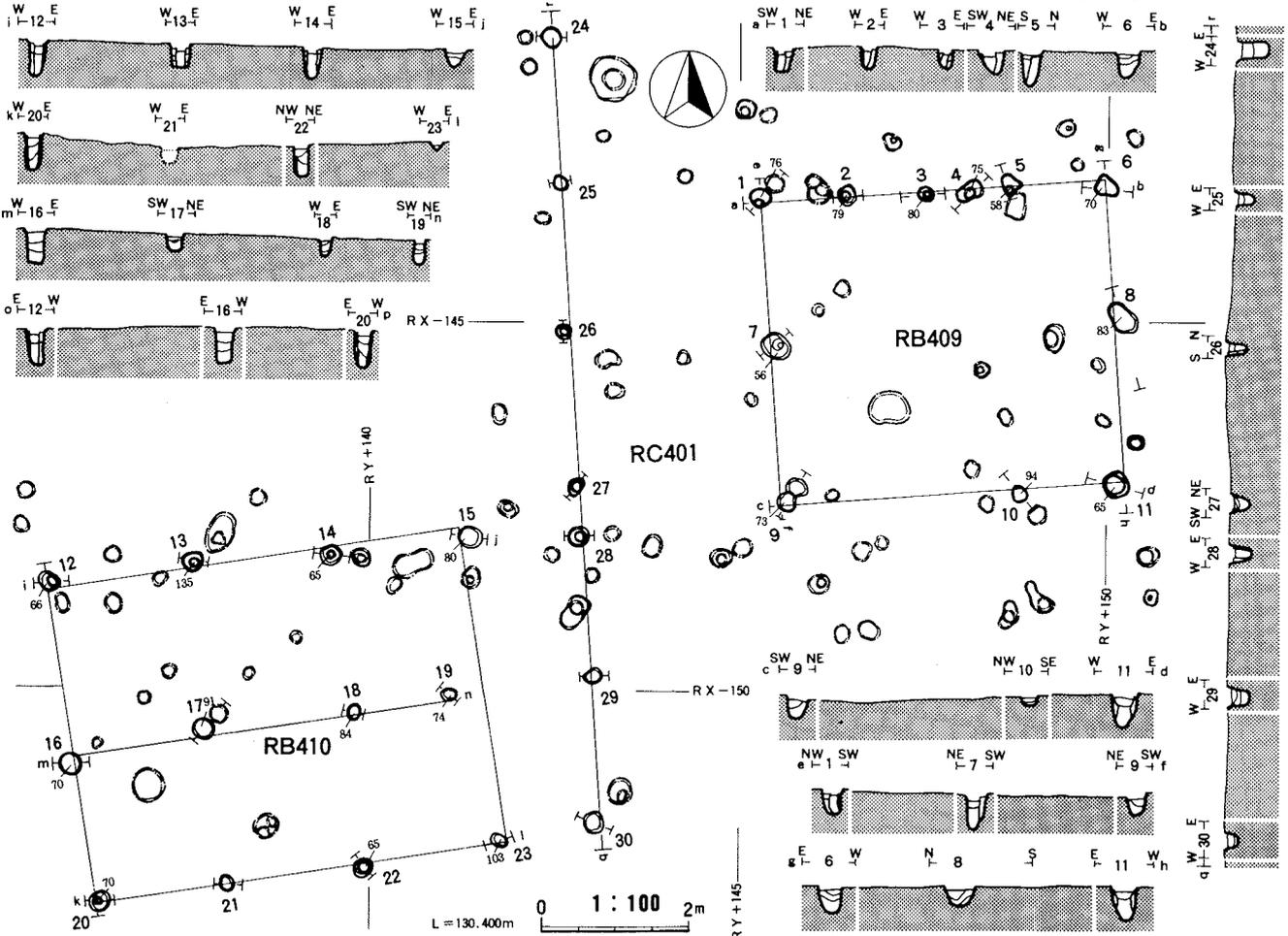
柱間寸法 柱間寸法は北側柱筋の12・13間が2.04m（6尺7寸）、13・14間が1.84m（6尺1寸）、14・15間が1.78m（5尺9寸）、南側柱筋の20・21間が1.80m（5尺9寸）、21・22間が1.90m（6尺3寸）、22・23間が1.96m（6尺5寸）、西妻側では12・16間が2.30m（7尺6寸）、16・20間が2.02m（6尺7寸）をはかり、東妻側は1間となっている。また桁方向と平行に間仕切の柱穴17～19が確認されており、16・17間が1.82m（6尺）、17・18間が2.06m（6尺8寸）、18・19間が1.34m（4尺4寸）をはかる。

柱 穴 また掘方の平面形は円形を基調としており、直径は20～30cm、深さは25～50cmで柱痕跡が確認できるものが多く、埋土は黒褐色土を主体とし、掘方は黒褐色土と暗褐色土の混合土となっている。なお本建物跡からの出土遺物はない。

R C 401掘立柱列跡 (第26図)

位置・規模 調査区北東部、R B 409とR B 410との間に介在する南北方向の柱列で、R B 409の西妻と平行のN4° Wを示す。さらに北へ延びる可能性も考えられるが、確認された総長は10.7m（35

柱間寸法 尺3寸）で、柱間寸法は24・25間・25・26間および29・30間が2.00m（6尺6寸）等間で、26・27



第26図 第2次調査R B 409・410掘立柱建物跡・R C 401掘立柱列跡

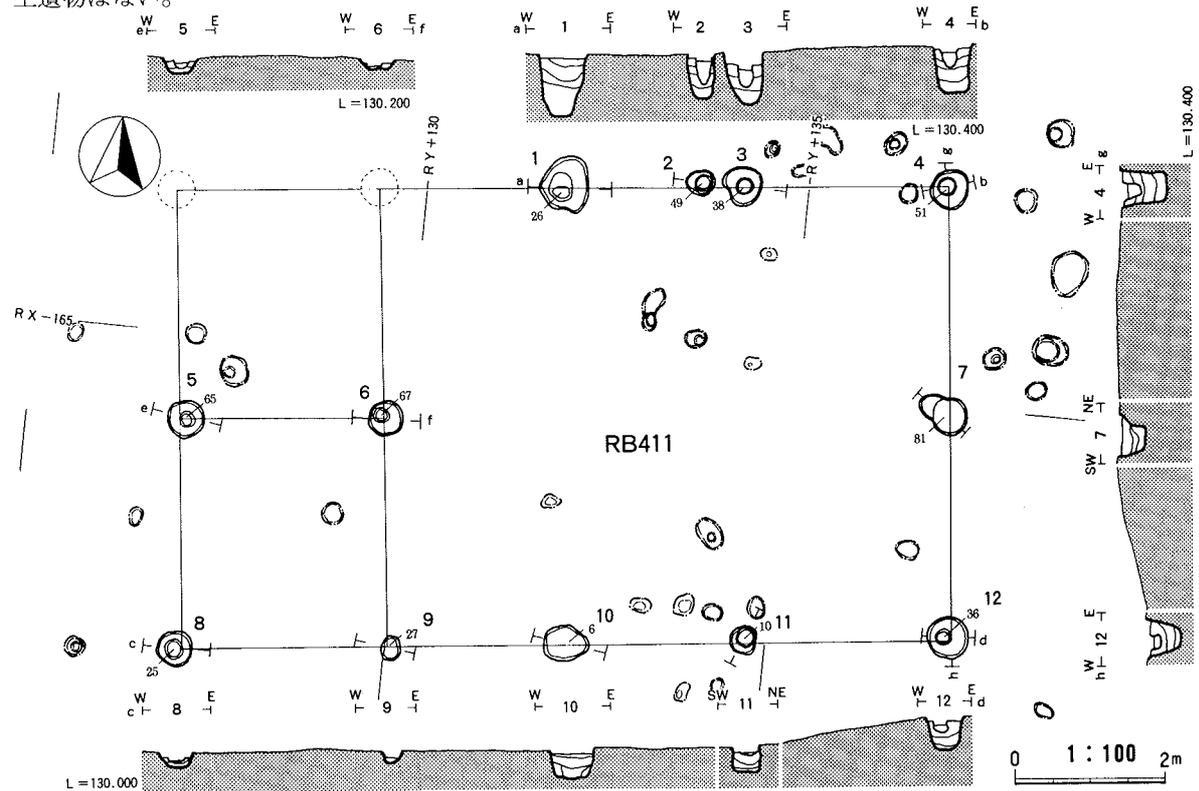
間が2.10m（6尺9寸）でやや広く、27・28間は0.68m（2尺2寸）でかなり狭くなっている。掘方の平面形は円形を基調としており、直径は20～30cm、深さは30～40cmで建物跡よりやや柱穴規模が小さく、埋土は黒褐色土を主体としている。なお本柱列跡からの出土遺物はない。

R B411掘立柱建物跡（第27図）

調査区のほぼ中央部、南北棟のR B412の西部に位置し、やや大形の掘方で構成された建物跡である。西半部の柱穴6口は開田時の削平を受け、北西部の2口は欠失しており、他の柱穴5・6・8・9も掘方下半部を残すのみである。重複および建替え等は認められないが、建物跡北東部からは同様のやや大形の掘方も多数検出されている。

桁行は4間（総長10.20m）、梁間2間（総長6.00m）の規模で、棟方向はS84° Wを示す柱間寸法東西棟の建物跡で、柱間寸法は北側柱筋の現存する1・3間が2.42m（8尺）、3・4間が2.70m（8尺9寸）をはかるが、柱穴3に近接して柱穴2も存在し、1・2間は1.84m（6尺1寸）をはかる。南側柱筋の8・9間が2.70m（8尺9寸）、9・10間が2.36m（7尺8寸）、10・11間が2.42m（8尺）、11・12間が2.72m（9尺）をはかる。また西妻側では5・8間が3.02m（10尺）、間仕切りと考えられる5・6間が2.72m（9尺）、東妻側では4・7間が3.06m（10尺1寸）、7・12間が2.96m（9尺8寸）をはかる。

掘方の平面形は円形～楕円形を呈し、直径は40～80cm、保存状態の良い東半部で深さは35～90cmをはかる。また断ち割りの観察では柱痕跡が掘方底面まで達していないものが多く見受けられ、掘方下半部には黒褐色土と暗褐色土のややしまりのある混合土を詰め、その上に柱を埋設しており、柱痕跡埋土はやわらかい黒褐色土を主体としている。なお本建物跡からの出土遺物はない。



第27図 第2次調査R B411掘立柱建物跡

R B412掘立柱建物跡 (第28図)

位置・規模 調査区中央部、東西棟のR B411建物跡の東妻とほぼ並行の南北棟建物跡で、R D405土壇に切られる。桁行2～3間(総長5.16m)、梁間1～2間(総長2.34m)の規模で、棟方向はN7° Wを示す。柱間寸法は西側柱筋の1・3間が2.78m(9尺2寸)、3・4間が2.38m(7尺9寸)、東側柱筋の6・8間が2.52m(8尺3寸)、8・9間が2.64m(8尺7寸)をはかる。妻側では1・6間および4・9間が2.34m(7尺7寸)、南妻側の5・9間は1.96m(6尺5寸)をはかる。

なお1・3間には柱穴2、6・8間には柱穴7、4・9間には柱穴5が位置しているが、それぞれ柱間寸法は不均等で、本建物跡に属するものか不明である。

柱 穴 掘方の平面形は円形を基調としており、直径は30～60cm、検出面からの深さは25～75cmで柱痕跡が確認できるものは少なく、柱穴1・6・8では根石と考えられる自然石も検出されている。埋土は黒褐色土を主体とし、掘方は黒褐色土と暗褐色土の混合土となっている。なお本建物跡からの出土遺物はない。

R B413掘立柱建物跡 (第29図)

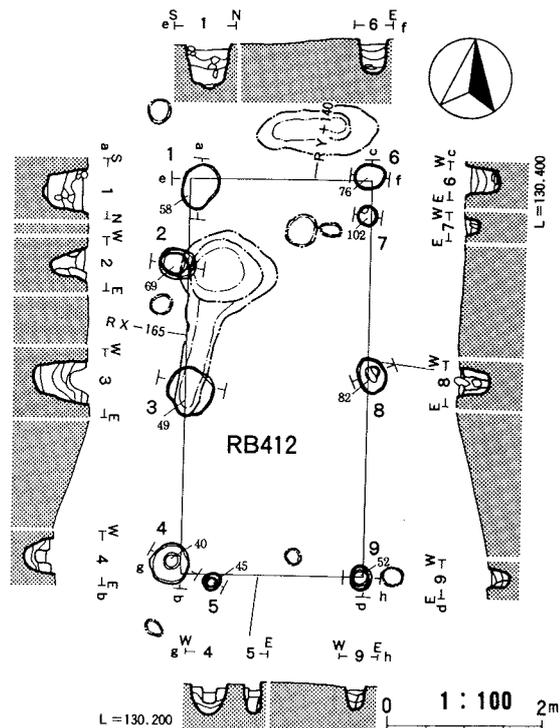
位置・規模 調査区中央部南寄り、東西棟のR B411建物跡の西妻に隣接する建物跡で、桁行3～4間(総長7.04m)、梁間1～3間(総長5.24m)の規模で、棟方向はN7° Eを示す南北棟建物跡である。

柱間寸法 柱間寸法は西側柱筋の1・2間が1.66m(5尺5寸)、2・3間が1.74m(5尺7寸)、3・4間が1.98m(6尺5寸)、4・5間が1.66m(5尺5寸)、東側柱筋の8・9間が3.26m(10尺8寸)、9・10間が1.82m(6尺)、10・11間が1.96m(6尺5寸)をはかる。北妻側では1間のみの検出で、1・8間が5.24m(17尺3寸)、南妻側の5・6間、6・7間および7・11間が1.75m(5尺8寸)等間となっている。

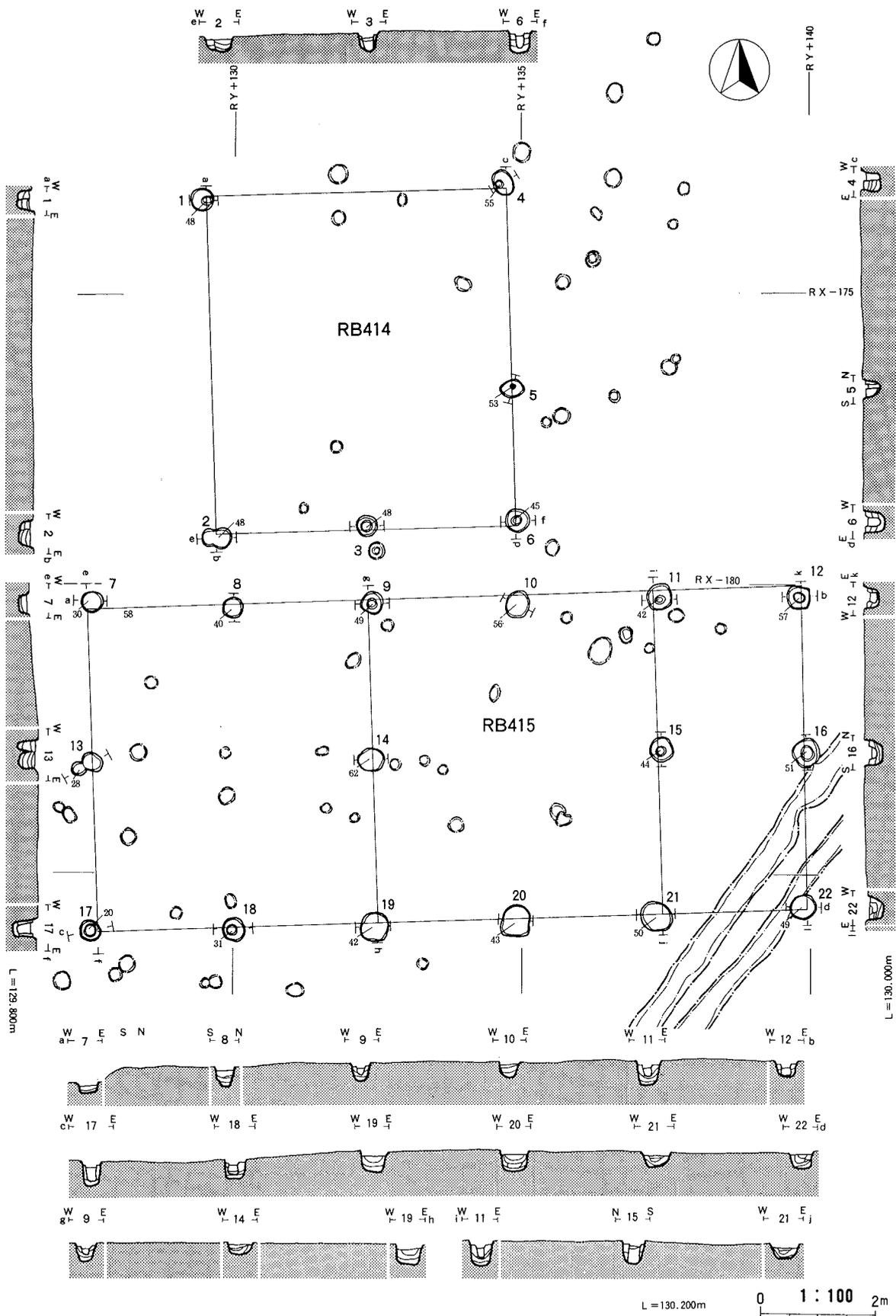
柱 穴 掘方の平面形は円形で規模は小さく、直径は25～35cm、検出面からの深さも20～30cmで浅い。柱痕跡が確認された柱穴のうち、柱穴5・8からは15～20cm程の根石と考えられる自然石も検出されている。埋土は黒褐色土を主体とし、掘方は黒褐色土と暗褐色土の混合土となっている。なお本建物跡からの出土遺物はない。

R B414掘立柱建物跡 (第30図)

位置・規模 調査区中央部南寄り、主屋的なR B411およびRB415建物跡の間に位



第28図 第2次調査 R B412掘立柱建物跡



第30図 第2次調査R B414・415掘立柱建物跡

跡である。

柱間寸法は北側柱筋の1・2間が4.72m（15尺6寸）、南側柱筋の3・4間が3.96m（13尺1寸）、4・5間が0.76m（2尺5寸）をはかる。西妻および東妻の1・3間・2・5間が2.52m（8尺3寸）をはかる。

掘方の平面形は円形～不整形円形で規模は小さく、直径は25～35cm、検出面からの深さも20～25cmで浅い。埋土は黒褐色土を主体とし、掘方は黒褐色土と暗褐色土の混合土となっている。なお本建物跡からの出土遺物はない。

R B 417掘立柱建物跡（第32図）

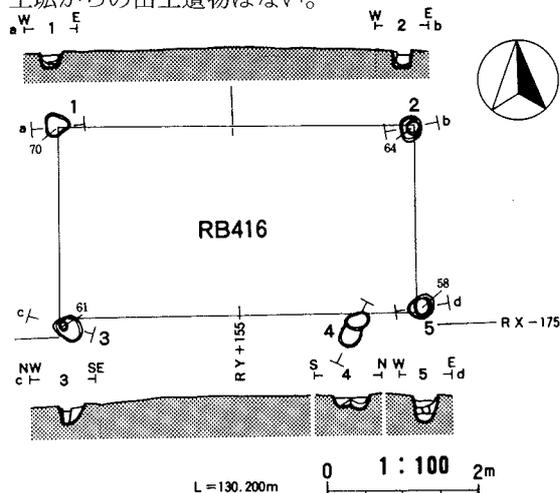
調査区南東部に位置する小規模なもので、桁行1～2間（総長3.48m）、梁間1間（総長2.28m）の規模で、棟方向がN7° Eを示す南北棟建物跡である。柱間寸法は西側柱筋の1・2間が1.78m（5尺9寸）、2・3間が1.70m（5尺6寸）、東側柱筋の4・5間は1間で3.48m（11尺5寸）、西妻および東妻の1・4間・3・5間が2.28m（7尺5寸）をはかる。掘方の平面形は円形で規模は小さく、直径は25～35cm、検出面からの深さも15～30cmで浅い。埋土は黒褐色土を主体とし、掘方は黒褐色土と暗褐色土の混合土となっている。なお本建物跡からの出土遺物はない。

R D 401土塚（第33図）

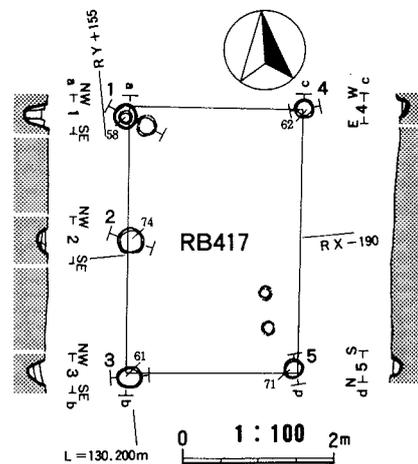
調査区南西部に位置する小規模な円形のプランで、上端直径0.8～0.85m、底面直径0.5～0.55mをはかる。埋土は自然堆積で、中央に攪乱（A層）、さらに上部から酸化鉄を含む黒褐色土（B層）、炭化粒を含む黒褐色土（C層）、小礫を含む暗褐色土と黒褐色土の混合土（D層）、グライ化した黒褐色土（E層）となっている。壁は平坦な底面からゆるやかに外反しながら立ち上がり、検出面からの深さは40cmをはかる。なお本土塚からの出土遺物はない。

R D 402土塚（第33図）

調査区南西部、R D 401の南東4 mに位置する。プランは楕円形を呈し、上端長軸1.0m、上端短軸0.85m、底面長軸0.8m、底面短軸0.55mをはかる。埋土はやわらかい黒褐色土で、壁はゆるやかに立ち上がる断面皿状を呈し、検出面からの深さは10cmをはかる。なお本土塚からの出土遺物はない。



第31図 第2次調査 R B 416掘立柱建物跡



第32図 第2次調査 R B 417掘立柱建物跡

R D 403土坑 (第33図)

規模 調査区南端中央部、R B 415建物跡の南西部に位置する。プランはほぼ円形で、上端直径1.0～1.15m、底面直径0.5～0.55mをはかる。埋土は自然堆積で、上部から粒状の褐色土を含むかたい暗褐色土（A層）、塊状の褐色土を含む黄褐色土（B層）、やわらかい黒褐色土を含む暗褐色土（C層）、やわらかい黒褐色土（D層）、黒褐色土を含む暗褐色土（E層）、粒状の褐色土を含む黒褐色土（F層）、黒褐色土と黄褐色土の塊状混合土（G層）、やわらかい黒色土（H層）の順となっている。壁は中位に段をもちながら、ゆるやかに外傾する断面を呈し、底面はほぼ平坦で検出面からの深さは0.95mをはかる。上部のA層から自然石が出土したが、その他に遺物は見られない。

R D 404土坑 (第33図)

規模 調査区中央部、R B 413建物跡の北妻側に隣接した位置にある。プランはほぼ円形で、上端直径0.95m、底面直径0.8～0.9mをはかる。埋土は黒褐色土を主体としたA層が自然堆積で、下部のB層からは人為堆積の黒褐色土を含む灰白色粘土が検出されている。壁は中央が低い挿鉢状の断面を呈し、検出面からの深さは0.35mをはかる。なお本土坑からの出土遺物はない。

R D 405土坑 (第33図)

規模 調査区中央部、小規模なR B 412建物跡と重複して検出されたもので、プランは楕円形のやや深い掘り込み部と舌状の突出部からなり、新旧関係では舌状の突出部がR B 412の柱穴3を切る。

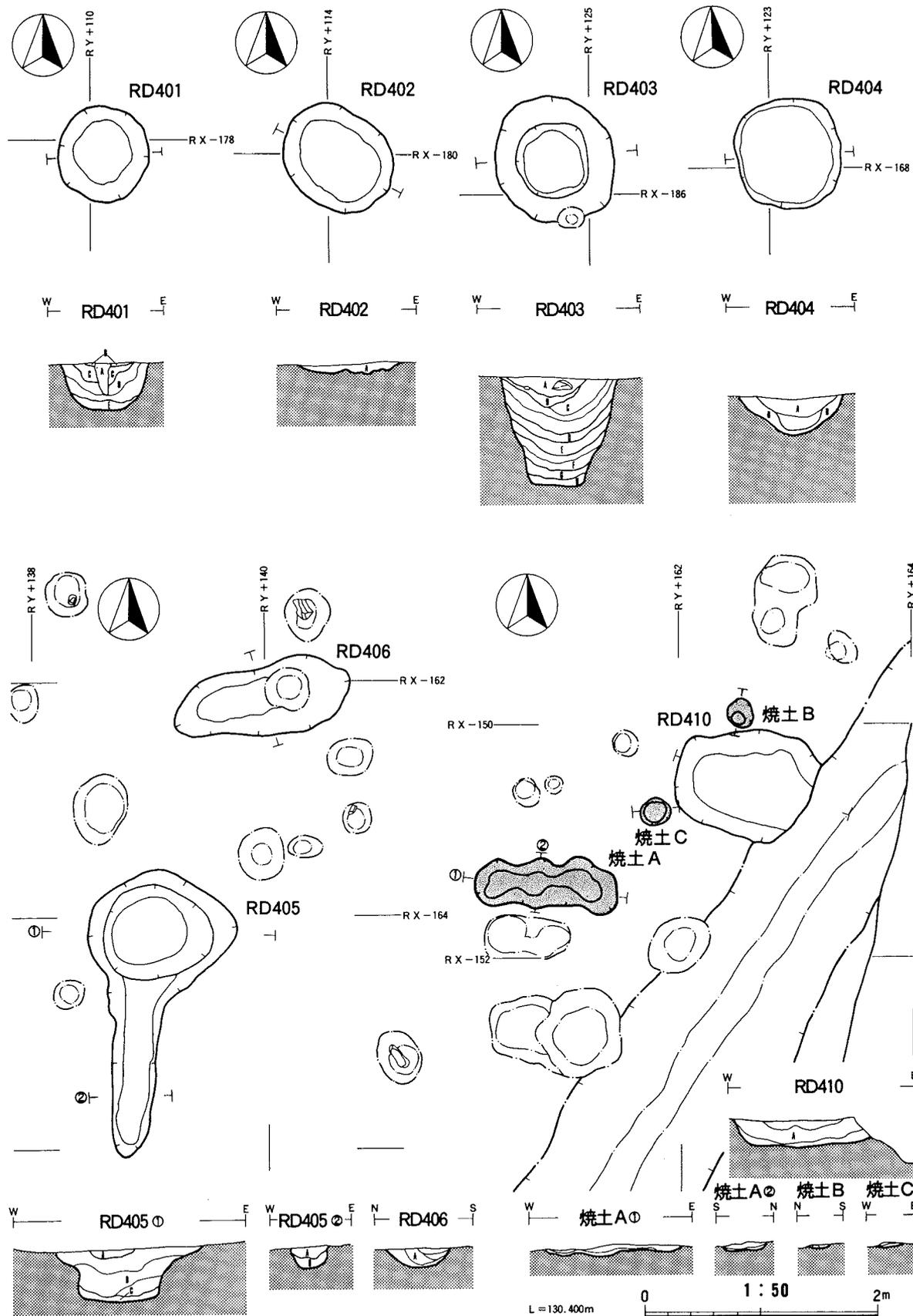
埋土 楕円形の掘り込み部は上端長軸1.3m、上端短軸1.0m、底面直径0.55～0.65m、突出部は長さ1.5m、幅0.3～0.45mをはかる。埋土は自然堆積で、上部から白色粒を含む黒褐色土（A層）、粒～塊状の褐色土を含む黒色土（B層）、酸化鉄を含むややかたい黒褐色土（C層）の順となっている。掘り込み部の壁は下半部が垂直で、上半部が大きく外反する形状で、底面はほぼ平坦でかたい。検出面からの深さは0.45mをはかる。また突出部の断面は半円状で、深さは全体的に0.2m程である。なお本土坑からの出土遺物はない。

R D 406土坑 (第33図)

規模 調査区中央部、R B 412建物跡の北妻と並行な位置関係にある長楕円形の土坑で、重複関係では直径0.35m程の柱穴を切る。上端長軸1.55m、底面長軸1.0m、上端短軸0.5～0.6m、底面短軸0.25mをはかる。埋土は粒状の褐色土を含む黒褐色土（A層）を主体としている。壁はなだらかに立ち上がる断面皿状を呈しており、検出面からの深さは0.15mをはかる。なお本土坑からの出土遺物はない。

R D 407土坑 (第34・39図)

規模 調査区中央部、R B 410とR B 411建物跡のほぼ中間に位置する土坑で、北東部にはR D 408・409が隣接している。プランはほぼ円形を呈し、上端直径1.5～1.65m、底面直径0.7～0.8mをはかる。埋土は自然堆積で、上部から塊状の褐色土および角礫を含む黒色土（A層）、粒～塊



第33図 第2次調査RD401~406・410土壇、焼土遺構A~C

断面 状の褐色土を少量および焼土粒・炭化物を多量に含むやわらかい黒褐色土（B層）、塊状の褐色土を含む暗褐色土（C層）の順となっている。壁は外傾しながら立ち上がる断面形状を呈しており、底面はほぼ平坦でかたく、検出面からの深さは0.8mをはかる。

出土遺物 なお本土塚からは須恵器壺、白磁碗、火熱を受けた自然石および木炭片等が出土している。第39図7は中国産陶磁器の白磁碗で、口縁部の形状は屈折口縁で内面上部に1条の沈線を有するもので、11世紀～12世紀中頃のものと考えられる。8は土塚底面から出土した渥美系の壺の器形に近似した須恵器壺の口縁部～頸部で、口縁部は外反し端部が上方に挽き出される形状を呈し、頸部に隆線状の突帯を巡らしたものである。口径17.5cm、頸部直径11.5cmをはかるもので、外面頸部直下に平行タキ痕が認められるほかは内面はナデ調整のみが施されている。胎土中には砂粒を多く含み、焼成不良でひび割れも多く、外面は青灰白色、内面～断面は褐色を呈するものである。

R D408土塚（第34図）

規模 調査区中央部、R B410とR B411建物跡の間、R D409土塚と関連した施設と考えられるもので、プランは円形で、上端直径1.0m、底面直径0.7～0.8mをはかる。埋土は自然堆積で、上部から粒～塊状の褐色土を含むややかたい暗褐色土（A層）、粒～塊状の褐色土を少量および炭化物を多量に含むやわらかい黒褐色土（B層）となっている。壁は下位に段を有し、外傾しながら立ち上がる断面形状を呈しており、底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは0.4mをはかる。なお本土塚からの出土遺物はない。

R D409土塚（第34・39図）

規模 調査区中央部、R B410とR B411建物跡の間、R D408土塚と関連した施設と考えられるもので、プランは楕円形の深い土塚部と不整形の浅い掘り込み部および溝状の部分からなる。埋土から見てこれらには新旧関係はなく、同時期に使用されたものと思われる。

埋土 土塚部は上端長軸1.95m、上端短軸1.8m、底面直径1.0～1.2m、深さは0.85m、不整形の掘り込み部は東西1.4～2.0m、南北1.0～1.8m、深さは0.85m、さらに西端部に接続する溝部は中間にR D408を介在させて東西長さ3.0m、上端幅0.3～0.45m、深さは0.1～0.15m程をはかる。埋土は自然堆積で、上部から粒～塊状の褐色土を含むややかたい黒褐色土（A層）、粒～塊状の褐色土を少量および炭化物を多量に含むやわらかい黒褐色土（B層）、粒～塊状の褐色土を少量含むややかたい黒褐色土（C層）の順となっており、東壁側B₂層中からは流れ込みの状態で拳大～人頭大の自然礫も検出されている。壁は土塚部がほぼ平坦な底面から直線的に外傾しながら立ち上がる断面形状を呈しており、溝部等はややイレギュラーでやわらかい。出土遺物では土塚部のB₁層から多量の炭化物および小鍛冶鉄滓が3点出土したほか、縄文時代の所産と考えられる磨石（第39図5）が出土したのみである。

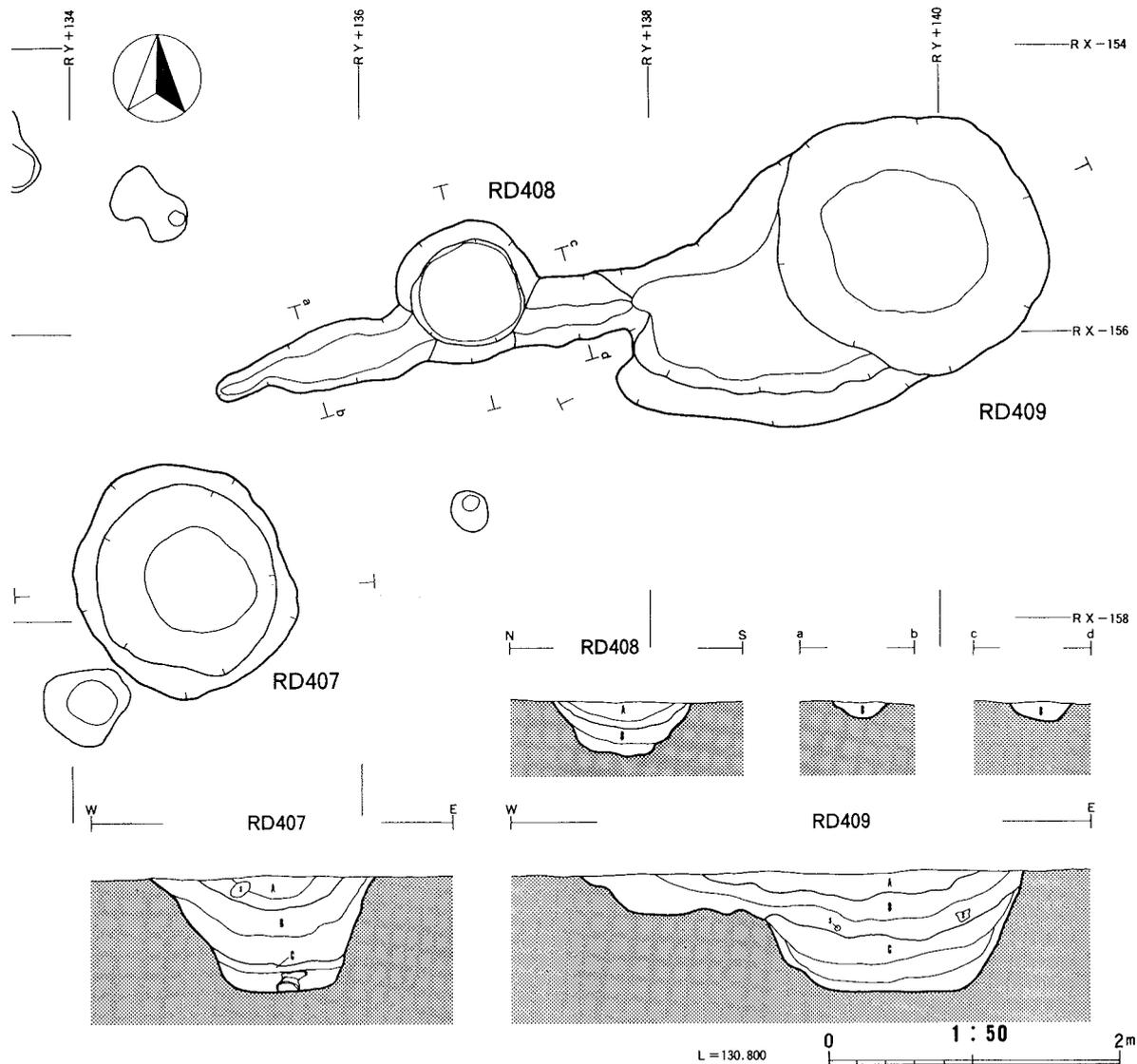
R D410土塚（第33図）

規模 調査区北東端、北東－南西方向に走るR G402溝跡の西岸に位置し、同溝跡に切られる。プランは楕円形を呈し、現存する上端長軸1.2m、上端短軸0.95m、底面長軸直径1.0m以上、底

面短軸0.6mをはかる。埋土は自然堆積で、粒～塊状の褐色土を少量、焼土粒・炭化物を多量、埋土白色粘土塊を微量含む暗褐色土～黒褐色土（A層）を主体としている。壁はなだらかに立ち上がり、底面はほぼ平坦でかたく、検出面からの深さは0.2mをはかる。なお本土塚からの出土断

焼土遺構A～C（第33図）

調査区北東端、RD410土塚周辺で焼土範囲が確認されている。焼土Aは東西1.25m、幅35規 模
～45cmで3口の浅い柱穴を連ねた形状のもので、明赤褐色のかたい焼土が堆積しており、層厚堆 積 土
は5～8cm、さらに地山面には2～3cmの焼土浸透層が確認される。焼土Bは小ピット状で
直径25cm、深さは5～10cmと浅く、焼土Cは直径25cm、深さは20cmとやや深く、両者ともに
上面のみにかたい焼土層が見られる。



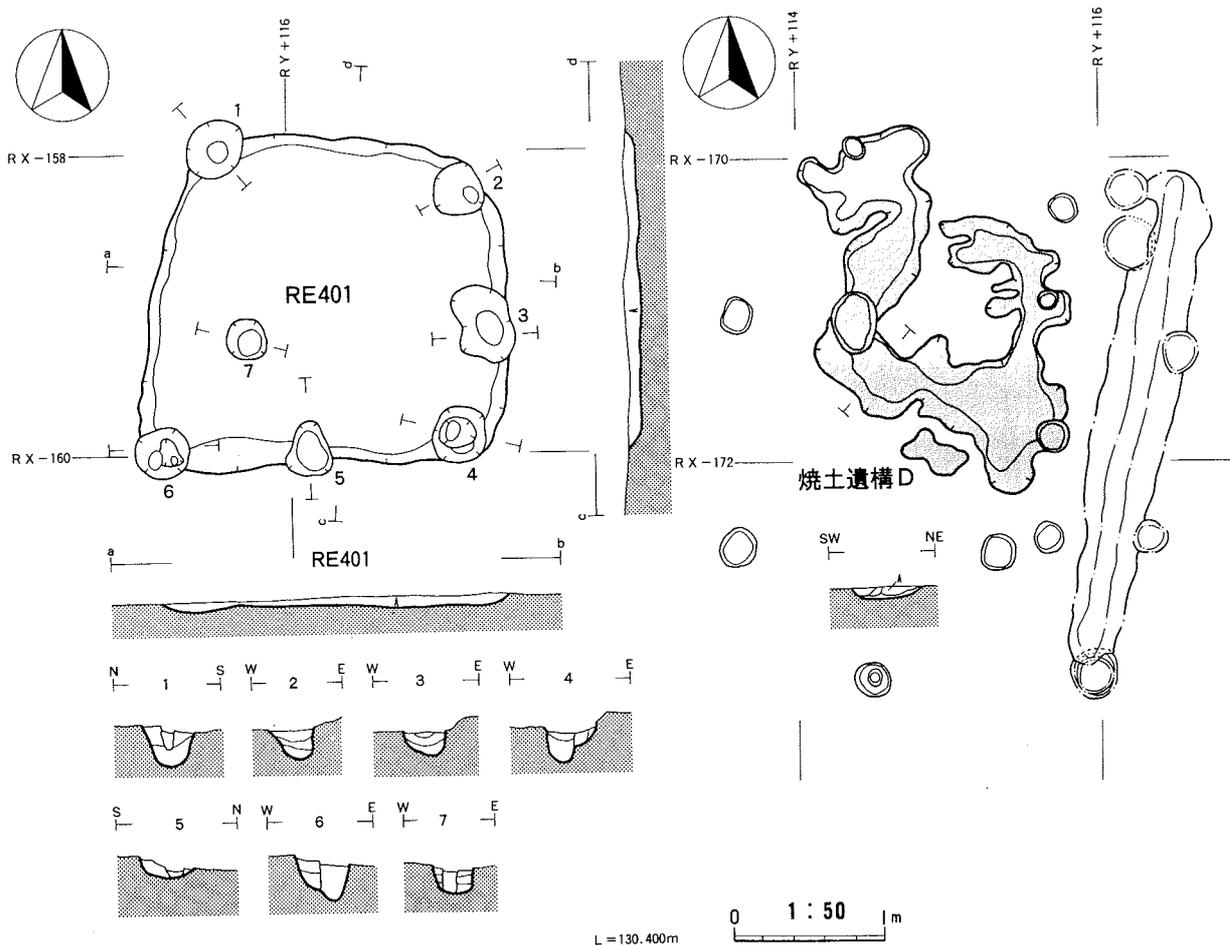
第34図 第2次調査RD407～409土塚

RE401 竪穴 (第35図)

規模 調査区中央部、RB407建物跡の北東部、RG404溝跡の西部に位置する。プランは隅丸台形を呈し、南北幅は西壁で2.25m、東壁で1.8m、東西幅は北壁で1.8m、南壁で2.3mをはかり、埋土 ほぼ東西方向を主軸としている。遺構検出面は耕作土直下で、埋土のほとんどは削平され、粒～塊状の褐色土を含む黒褐色土を主体としたA層のみが残存している。壁はゆるやかに立ち上壁・床の状態 がり、底面はやや凹凸をもち、壁高は5cm程をはかる。また床面には貼床・周溝等は認められず、柱穴 柱穴1～7のみが検出されている。柱穴は竪穴の四隅および東壁・南壁の中央部および東西中軸線上の西半部に位置しており、直径0.25～0.55m、深さ0.15～0.25mで柱痕跡は0.1～0.2mをはかる。埋土は掘方が黒褐色土と暗褐色土の塊状混合土、柱痕跡はやわらかい黒褐色土を主体としている。なお竪穴出土遺物は、床面より自然石3点が検出されたのみである。

焼土遺構D (第35図)

規模 調査区中央部南寄り、RB413建物跡の西方5mの位置に不整形に広がる焼土範囲が確認されている。焼土範囲は北西-南東方向に長く広がり、長さ2.6m、幅0.8～1.8mをはかる。堆積土は炭化物を含む明赤褐色土のかたい焼土および灰白色の灰層などで、層厚は4～6cm、さら



第35図 第2次調査RE401竪穴、焼土遺構D

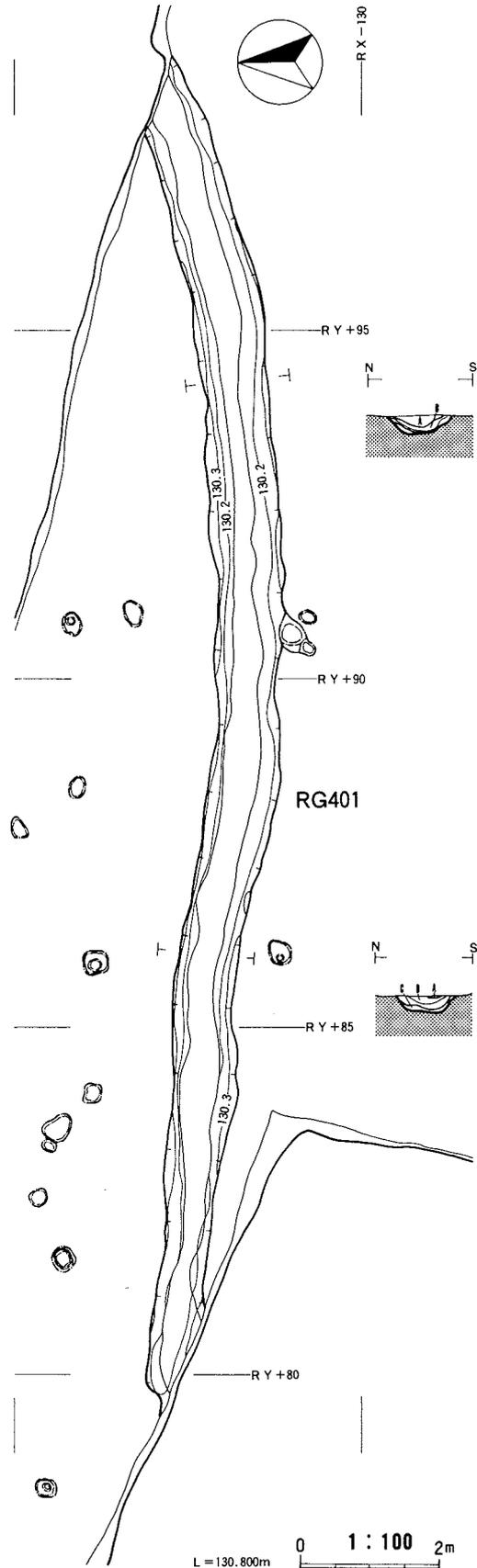
に地山面には3~4cmの焼土浸透層が確認されている。また焼土内外からは小ピットが多数確認されており、直径20~40cm、深さは5~10cmをはかり、範囲内では焼土が覆い被って検出されている。

R G401溝跡 (第36図)

調査区北西部、R B402建物跡と重複する溝跡で、走向はほぼ東西方向で、やや北東方向に弧状に走る。検出された総延長は19.5mで、両端部ともに調査区外へ延びる。規模は、上端幅0.7~1.0m、下端幅0.3~0.6m、深さは0.2~0.3mをはかり、埋土は自然堆積で、上部から粒状の褐色土を含む黒色土(A層)、粒~塊状の褐色土を含むかたい黒褐色土(B層)、暗褐色土と褐色土のかたい塊状混合土(C層)となっている。また底面には酸化鉄分が沈着して赤褐色でかたく、断面形は底面が平坦に近い舟底状を呈する。なお本溝跡からの出土遺物はない。

R G402溝跡 (第37図)

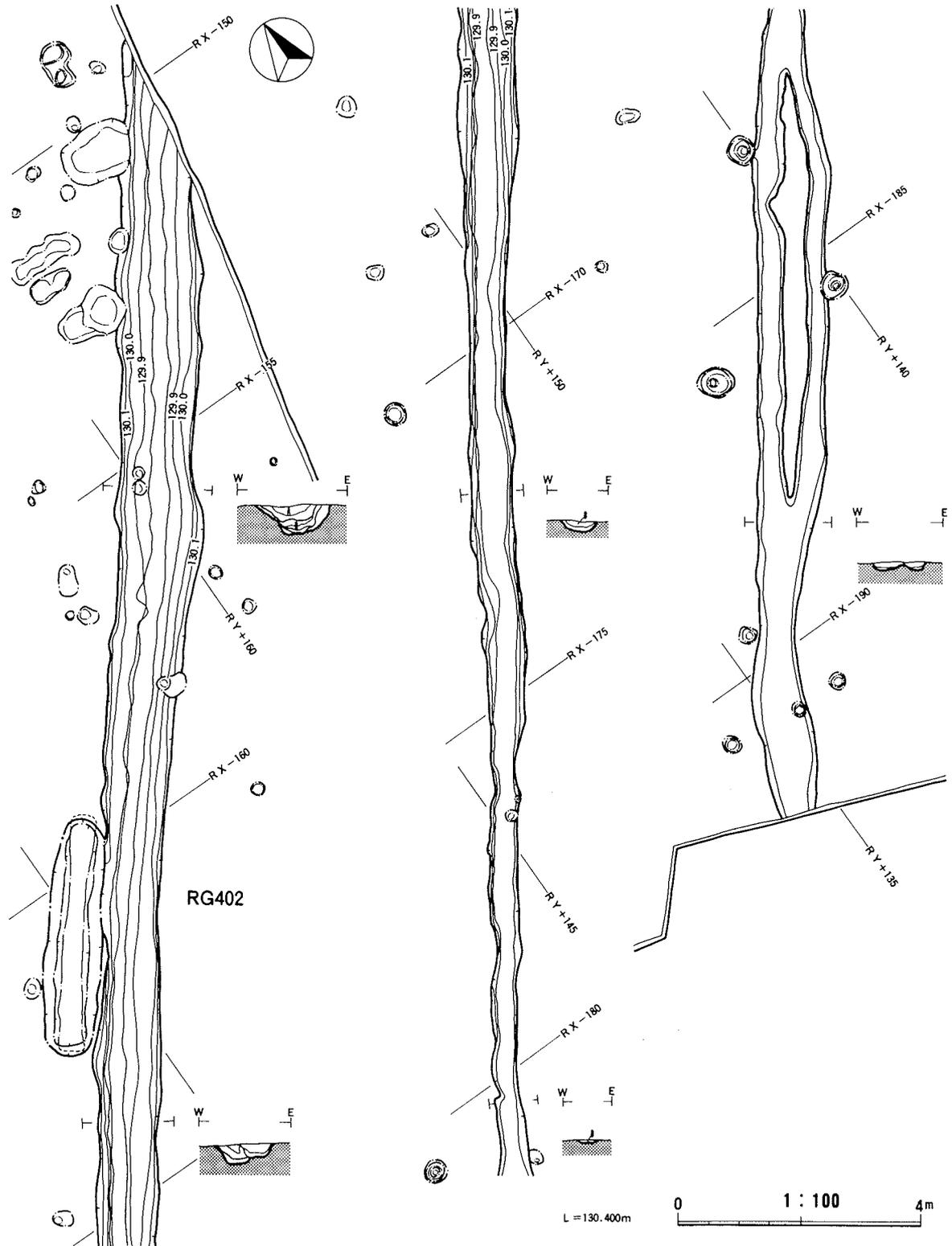
調査区の東半部で検出された北東-南西方向にほぼ直線的に走る溝跡で、走向はN36° Eをはかり、新旧関係では縄文時代のRD016土塚、古代以降のR B415掘立柱建物跡、R D410土塚を切る。検出された総延長は52mで、さらに両端部とも調査区外へ延び、規模は北半~中央部で上端幅1.0~1.4m、下端幅0.2~0.4mをはかり、深さは0.3~0.45mで、断面は西壁が直線的に外傾、東壁が弧状に立ち上がる形状を呈し、中央部は上端幅0.5~0.7m、下端幅0.2~0.4mで断面は皿状、中央~南半部のRB415掘立柱建物跡周辺では二股に分岐しており、西溝跡が上端幅0.4~0.5m、下端幅0.2~0.3m、東溝跡が上端幅0.3~0.4m、下端幅0.2~0.3m、深さはともに0.1~0.15mをはかる。埋土は自然堆積で、深い北半部では上部から粒状の褐色土を微量、赤褐色の酸化鉄粒および炭化物を含む黒褐色土(A層)、粒~塊状の褐色土を含む黒褐色土(B層)、粒状の褐色土を含むやわらかい黒色土(C層)、塊状の褐色土を含む暗褐色土(D層)の順となっている。なお埋土中からは縄文時代の土器破片および土師器甕の口縁部破片が出土している。



第36図 第2次調査R G401溝跡

R G403溝跡 (第38図)

規模 調査区西半部、RB403建物跡の南西部に位置する溝跡で、走向は北西-南東方向で $N22^{\circ}W$ をはかる。検出された総延長は10.4mで、上端最大幅2.4m、上端最小幅0.2m、深さは0.1~



第37図 第2次調査R G402溝跡

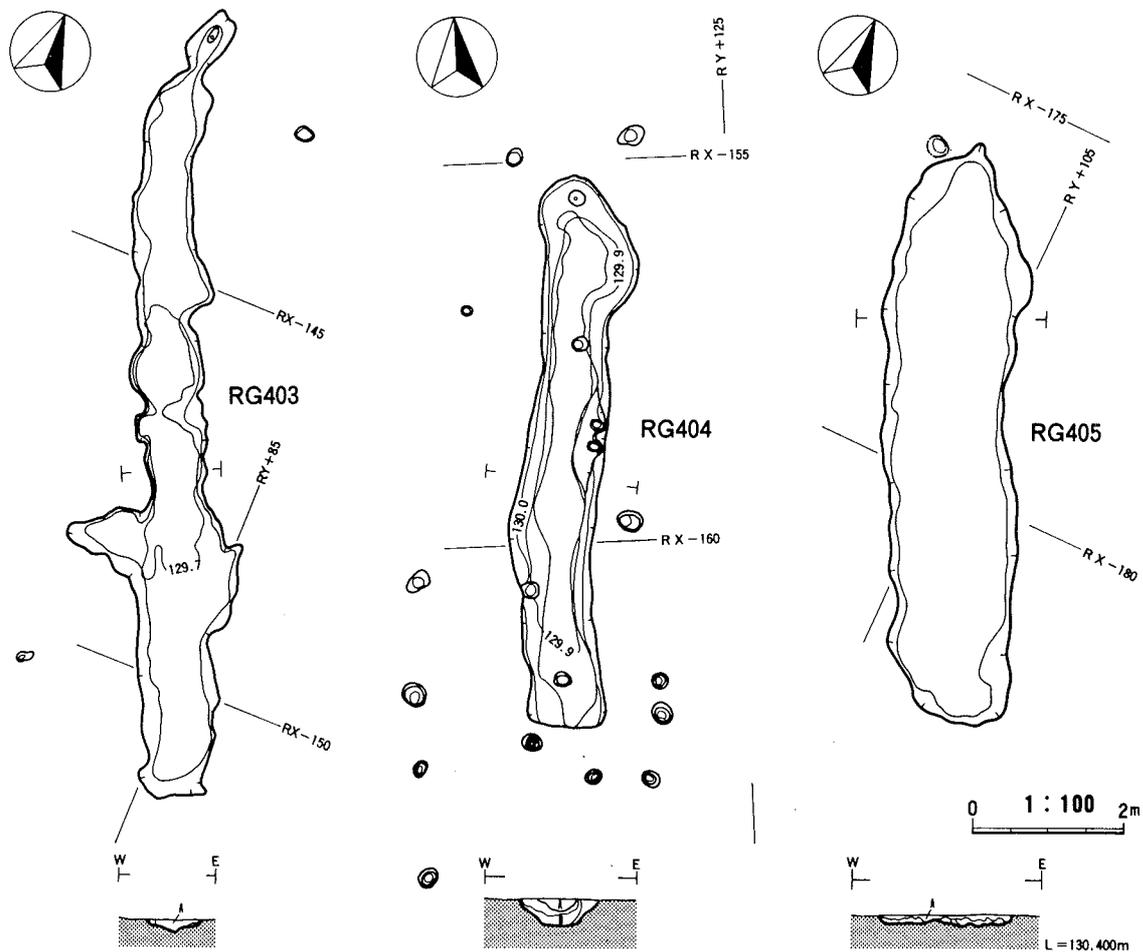
0.15mで、かなりイレギュラーなプランを呈する。埋土は塊状の黒褐色土と暗褐色土の混合土
 埋 土
 で、出土遺物はない。

R G 404溝跡 (第38図)

調査区中央部、R E 401堅穴の東方に位置する溝跡で、走向は南北方向でN4° Eをはかる。規 模
 検出された総延長は7.2mで、上端幅0.9~1.3m、下端幅0.3~0.7m、深さは0.1~0.3mで、
 底面はほぼ平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は粒~塊状の褐色土および焼土粒・炭 埋 土
 化物を含む黒褐色土 (A層)、塊状の褐色土およびスコリア粒を含む暗褐色土 (B層) で、埋
 土中からの出土遺物はない。

R G 405溝跡 (第38図)

調査区中央部南半、R B 408掘立柱建物跡の南方に位置する溝跡で、走向は北西-南東方向 規 模
 でN25° Wをはかる。検出された総延長は7.7mで、上端幅1.55~1.9m、下端幅1.3~1.5m、
 深さは0.05~0.15mで、底面はやや凹凸をもち、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は粒~塊状 埋 土
 の褐色土を含む黒褐色土 (A層)、塊状の褐色土を含む暗褐色土 (B層) で、埋土中からは須
 恵器甕小片、底部系切り無調整の土師器坏小片およびかわらけの体部小片が出土している。

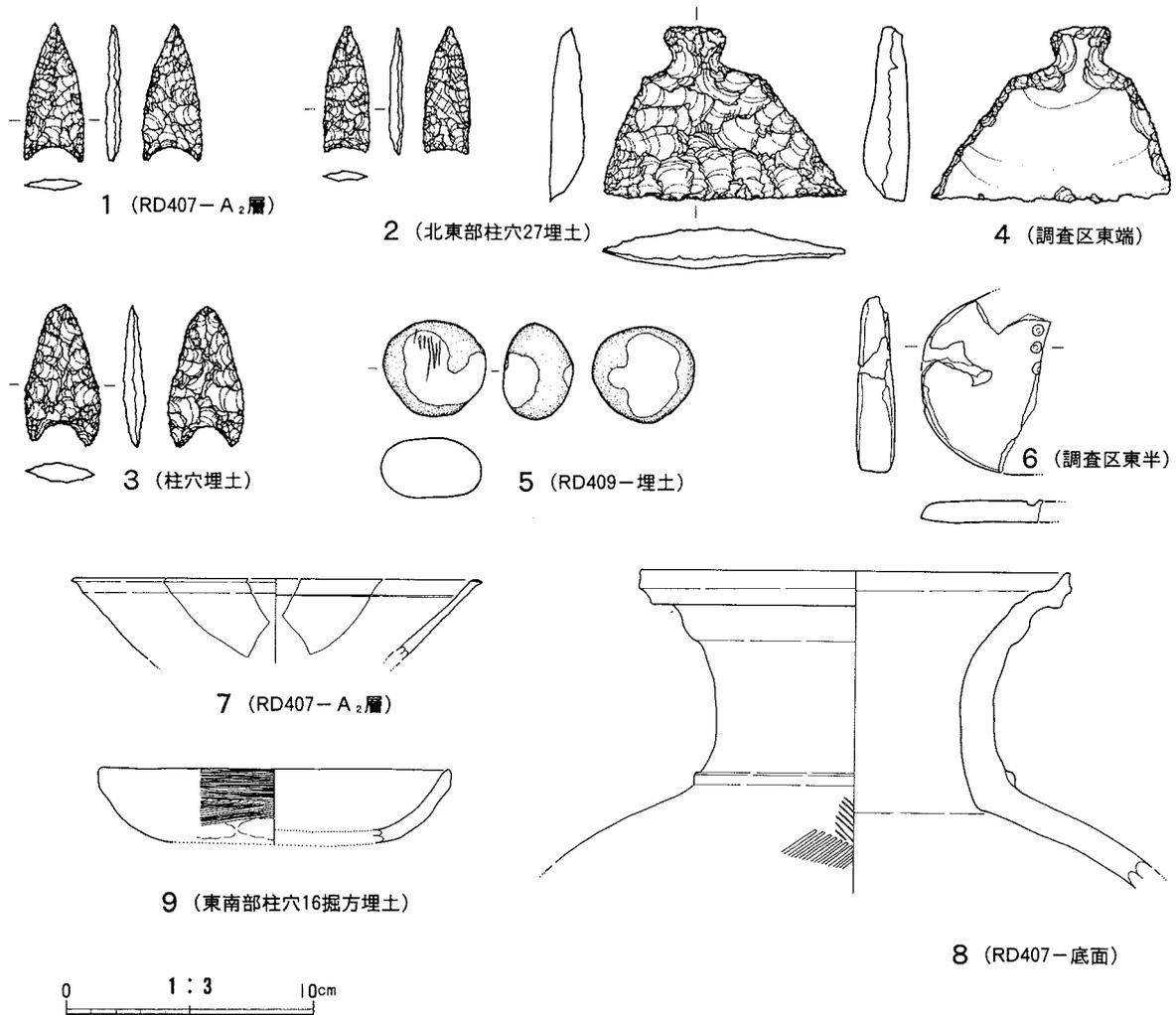


第38図 第2次調査R G 403~ R G 405溝跡

(4) 遺構外遺物

第2次調査では遺構外から各期の遺物が出土している。第39図9は柱穴掘方から出土した手
 かわらけ づくねのかわらけ小片で、外面上半にナデ調整を施し、推定口径14.2cm、器高3.0cmで、内
 外面ともに灰白～浅黄橙色を呈するものである。そのほか国産陶磁器では、表土から11～12世
 陶磁器 紀の渥美系の大甕破片、14～15世紀の瀬戸美濃系の灰釉盤破片、18～19世紀の磁器染付碗破片
 等が出土している。また調査区南半部、焼土遺構D周辺からは製鉄関係の遺物が出土している。
 製鉄関係 小片のため図示できないが、ふいご羽口破片、鍛冶炉内部で溶解された粘土片、炉体に埋め込
 まれた石材片等が検出されている。

石器 縄文時代の遺物では中期～後期の土器破片のほか、無柄凹基の石鏃（第39図1～3）、横形石
 匙（第39図4）、平坦面に刺突列をもつ円盤状石製品（第39図6）等が出土している。



第39図 第2次調査出土遺物

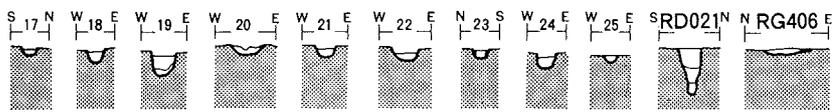
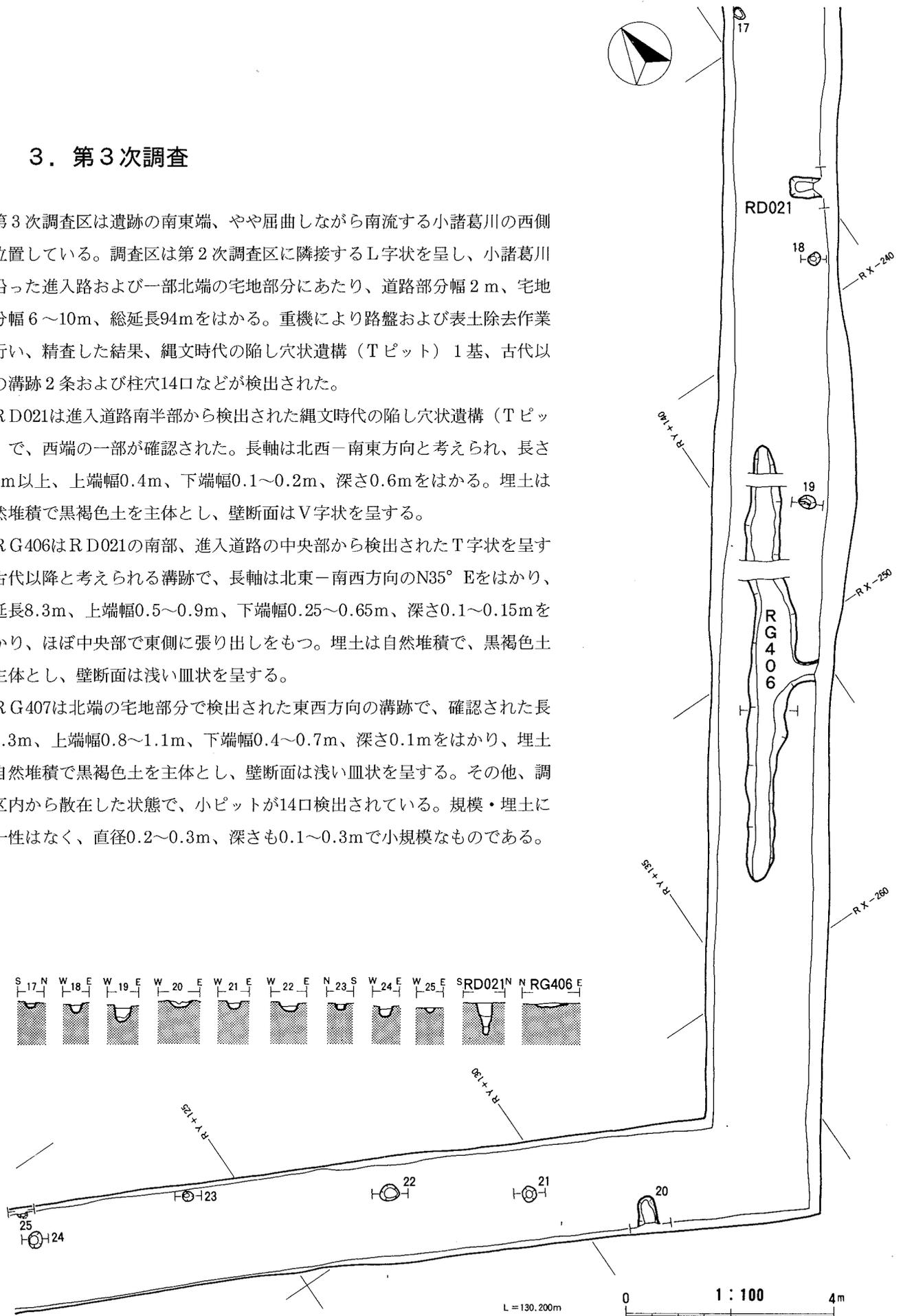
3. 第3次調査

第3次調査区は遺跡の南東端、やや屈曲しながら南流する小諸葛川の西側に位置している。調査区は第2次調査区に隣接するL字状を呈し、小諸葛川に沿った進入路および一部北端の宅地部分にあたり、道路部分幅2m、宅地部分幅6~10m、総延長94mをはかる。重機により路盤および表土除去作業を行い、精査した結果、縄文時代の陥し穴状遺構（Tピット）1基、古代以降の溝跡2条および柱穴14口などが検出された。

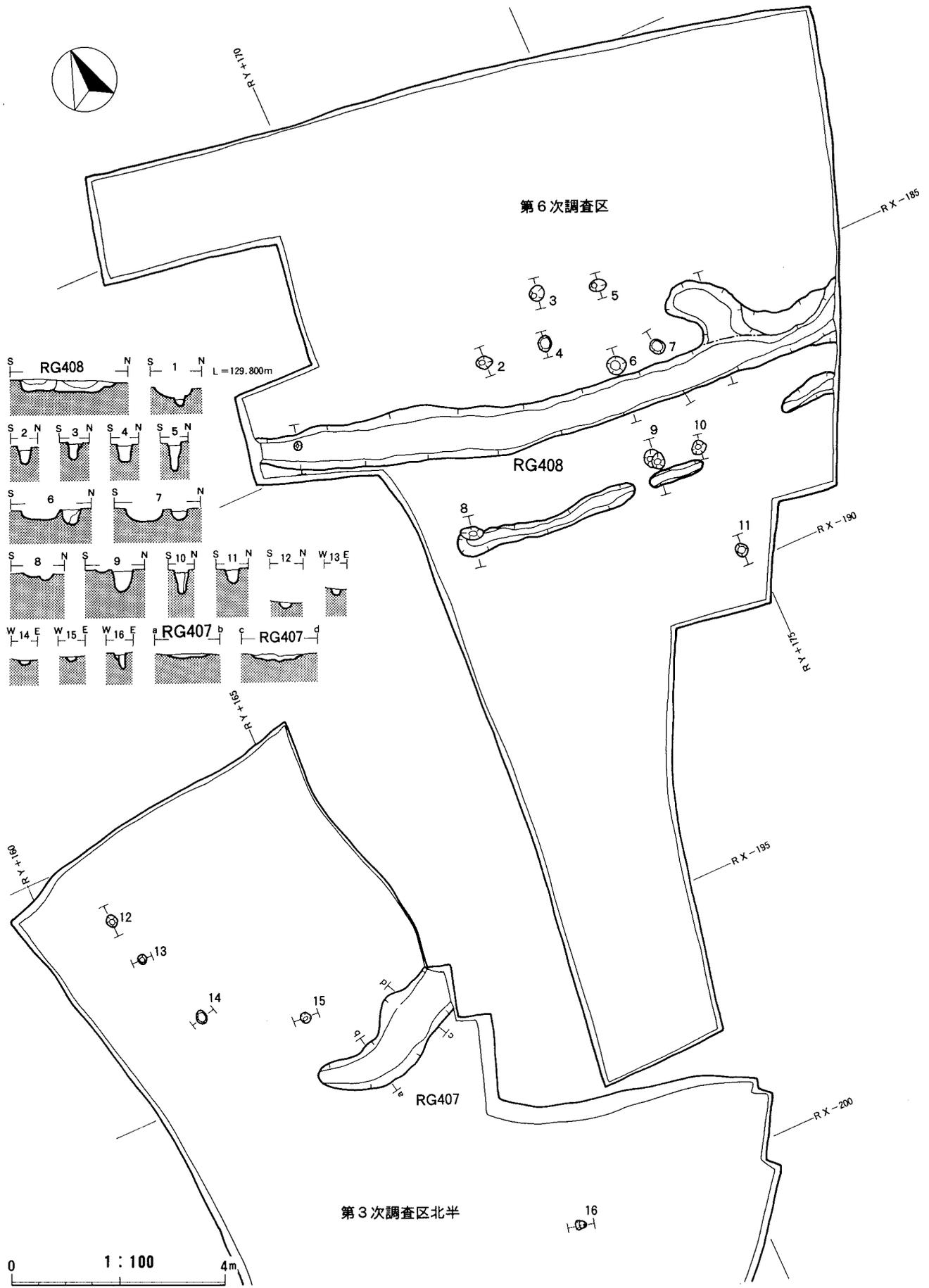
RD021は進入道路南半部から検出された縄文時代の陥し穴状遺構（Tピット）で、西端の一部が確認された。長軸は北西-南東方向と考えられ、長さ0.6m以上、上端幅0.4m、下端幅0.1~0.2m、深さ0.6mをはかる。埋土は自然堆積で黒褐色土を主体とし、壁断面はV字状を呈する。

RG406はRD021の南部、進入道路の中央部から検出されたT字状を呈する古代以降と考えられる溝跡で、長軸は北東-南西方向のN35°Eをはかり、総延長8.3m、上端幅0.5~0.9m、下端幅0.25~0.65m、深さ0.1~0.15mをはかり、ほぼ中央部で東側に張り出しをもつ。埋土は自然堆積で、黒褐色土を主体とし、壁断面は浅い皿状を呈する。

RG407は北端の宅地部分で検出された東西方向の溝跡で、確認された長さ3.3m、上端幅0.8~1.1m、下端幅0.4~0.7m、深さ0.1mをはかり、埋土は自然堆積で黒褐色土を主体とし、壁断面は浅い皿状を呈する。その他、調査区内から散在した状態で、小ピットが14口検出されている。規模・埋土に統一性はなく、直径0.2~0.3m、深さも0.1~0.3mで小規模なものである。



第40図 第3次調査区 南半部



第41図 第3次調査区 北半部、第6次調査区

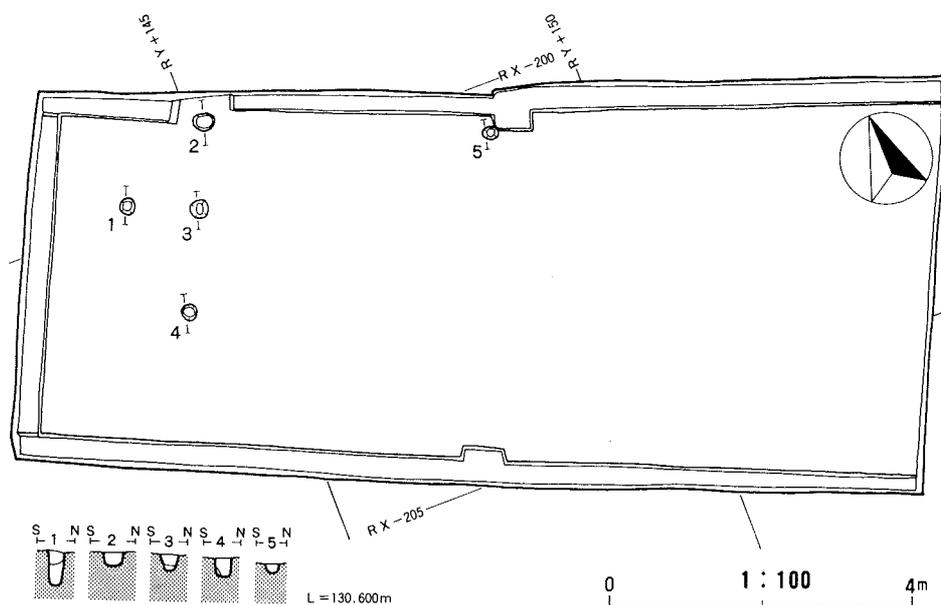
4. 第4次調査

第4次調査区は遺跡の南東部、南流する小諸葛川の西側に位置し、第2次調査区の南東部に隣接する。現況は宅地で、東西12m、南北5～5.5mの範囲で調査を実施し、精査の結果、シルト質明褐色土層（Ⅲ層）上面で、古代以降と考えられる柱穴5口を検出した。

柱穴は中央北半部に1口、西半部に4口検出され、いずれも小規模なもので、直径0.2～0.25m、深さは柱穴1が0.5mでやや深いほかは0.1～0.2mと浅い。埋土は粒～塊状の褐色土を少量含む黒褐色土を主体としており、柱痕跡は観察されない。

5. 第6次調査

第6次調査区は遺跡の南東部、南流する小諸葛川の西側に位置し、第2次調査区の南東部、第3次調査区の北東部に位置し、現況は宅地である。当初東西方向に幅2m、長さ11.5～14mのトレンチ5本を設定後試掘調査を実施し、遺構が確認された部分についてのみ拡張をおこなった。精査の結果、黒褐色土を含むシルト質明褐色土層（Ⅲ層）上面で時期不詳の溝跡1条、小柱穴11口などを検出した。R G 408は東西方向に走る溝跡で、総延長11.2m、上端幅0.7～1.1m、下端幅0.25～0.6m、深さ0.2mをはかり、東側北壁に長さ1.2m、幅0.8m程の張り出しをもつ。埋土は自然堆積で、粉～粒状の褐色土を含む黒褐色土を主体とし、壁断面は浅い皿状を呈する。さらに同溝跡に並行して南側1.5mの地点に長さ8m、幅0.3mの規模で断続的に浅い溝跡も検出されている。また柱穴は調査区中央部ないし溝跡内部から検出されており、規模は直径0.2～0.35m、深さはまちまちで0.3～0.55mをはかる。



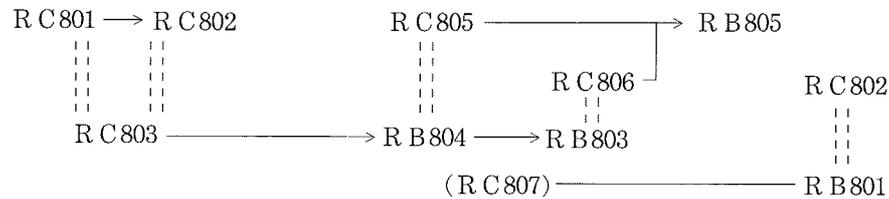
第42図 第4次調査区

Ⅳ ま と め

1 第1次調査

遺構変遷

この調査では、中近世の掘立柱建物跡5棟、柱列跡7条、堅穴1基、土壇12基が確認された。このうち建物跡と柱列跡はほとんどが重複しているが、柱穴相互の重複が少なく、確実に新旧関係が判明したものは6例である。しかし建物跡や柱列跡のなかには、比較的近い場所で平行関係にあるものなど、建物同志の共存、建物の柱列との共存の可能性のあるものも存在する。建物跡や柱列跡のうちR C 504のように新旧関係の全く判明しないものをのぞくと、一応次のような建物の変遷が考えられる。



このうちR C 807柱列はR B 801建物より古い、他の遺構との関係は不明、またR B 805建物は構造的に不明な部分が多く、建物なのか柱列なのか問題を残している。こうした不明確な遺構を除外した場合、次の4期の変遷が推定される。

遺構変遷 第I期は重複するR C 801・802を包括し、このどちらかにR C 801柱列が伴う。R C 801柱列は中央2間が広く、東西棟2面庇建物の東妻と考えられるので、柵もしくは塀のようなもので区画された屋敷跡の一部であろう。

第II期はR B 804建物にR C 805柱列が伴う時期である。R B 804建物は部屋割された主屋と考えられ、R C 805柱列は屋敷の区画か。

第III期はR B 803建物とR C 806柱列から成る。R B 803は細長い倉庫風の建物であるが西、北の2面を柱列に囲まれている。このR C 806柱列からは柱穴掘方から永楽通寶の鏝銭、無銘銭が、柱痕跡内からは古寛永通寶が出土している。

第IV期はR B 801・802建物で構成される。R B 801建物はR C 807柱列を切るほかは新旧関係は確認されないが、建物の柱が半間毎に立つことや、曲り屋構造であることなど、他の建物に見られない新しい要素があることから最も新しい時期と考えた。北側のR B 802建物は位置方向から、R B 801建物の付属屋と考えるのが妥当であろう。この時期には第I期～III期のような柱列による区画は認められない。

このほか堅穴と12基の土壇がある。堅穴と建物との関係は不明であるが、土壇のなかには建物を切るもの(R D 811・812)、建物に切られるもの(R D 802)があり、出土遺物から比較的新しい時期の建物と共存あるいは前後する時期のものが多いと考えられる。

陶磁器

陶磁器類は16世紀代のものから近代のものまで141点の破片が出土している。この陶磁器は次の5段階に整理される。

第1段階	(16世紀前半)	瀬戸美濃鉄釉天目茶碗
第2段階	(16世紀後半～17世紀前葉)	瀬戸美濃灰釉皿、唐津灰釉皿、備前系播鉢
第3段階	(17世紀後葉～18世紀中葉)	肥前染付皿、碗、色絵碗、備前系播鉢
第4段階	(18世紀後葉～19世紀中葉)	相馬大掘系灰釉碗、肥前京風鉄絵碗、同白濁釉碗、志野鉄絵碗、肥前系染付磁器碗、皿、蓋、国産染付磁器碗、皿、鉢他、瓦質土器手焙り
第5段階	(19世紀後葉以降)	型紙、銅版プリントの染付磁器碗、皿

陶磁器のほとんどは遺構外からの出土であり、遺構との関係は不明なものが多い。R D803・811土塚から出土した陶磁器は、第3～4段階のもので、比較的新しい時代のものである。また、全段階を通して国産品のみであり、輸入陶磁器の出土は全く認められなかった。

陶磁器の器種は、第1段階の遺物は天目茶碗1点のみの出土であり、この段階の内容は解らない。第2段階では皿・播鉢の類、第3・第4段階では陶器・磁器ともに碗、皿が主体で、第3段階では若干の播鉢、第4段階では仏飯器・瓦質手焙りが伴う。第5段階では碗・皿が出土した。このように第2段階以降、日常的な供膳具がその主体を占めている。

建物群の年代

建物跡・柱列跡のうち、第Ⅲ期に属するR C806柱列跡より永楽通寶・無銘銭・古寛永通寶が出土している。永楽通寶・無銘銭は掘方埋土から、古寛永通寶は柱痕跡内から出土している。古寛永通寶が後の流れこみと考えれば、柱列の上限は17世紀前葉まで遡る可能性がある。しかし柱列と棟方向を同じくするR B803建物跡は、柱間寸法が6尺5寸と6尺3寸の混用で、柱間寸法からは18世紀代にまで降る可能性もある(註)。しかし柱列跡と建物跡との配置から、両者の間に大きな時間差があったとは考えにくく、ある程度併存した可能性がある。このため、ここではⅢ期の時期をおよそ17世紀代中葉から18世紀前葉と考えておきたい。陶磁器の第3段階がおおむね対応するようである。これより古いⅠ・Ⅱ期には、陶磁器の第1・第2段階が対応すると考えられる。R B804建物跡は西半部が未検出であり、全体構造は不明である。柱間寸法は7尺5寸が主体で、8尺7寸も見られ、16世紀より古い段階の建物も考えられる。これより古いⅠ期については上限の確定はできない。一方Ⅳ期としたR B801・802の建物跡は、特にR B801が曲屋であり、半間毎の柱配置が認められることから、近世後半期のものであることが確実である。R B802は、R B801の付属屋であろう。R B801建物に隣接するR D803土塚の陶磁器は第4段階のものであり、遺構外から出土した陶磁器もこの段階のものが多い。これらのことからⅣ期は陶磁器の第4段階に対応し、18世紀の中葉以降の年代となろう。その下限については明確でないが、遺構外から銅版あるいは型紙によるプリントの染付が出土しているので、下限が明治期以降に降る可能性もある。

(註) 高橋与右衛門 「掘立柱建物跡の間尺とその時代性」『紀要Ⅸ』 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

2. 第2・4・6次調査

昭和61年度に実施された第2次調査では、縄文時代の陥し穴状遺構（Tピット）18基、円形土塚2基、古代末期以降と考えられる掘立柱建物跡17棟、竪穴1棟、掘立柱列跡1条、溝跡5条、土塚10基および柱穴群約900口などが検出され、その翌年の昭和62年度に実施された第3次調査では、縄文時代の陥し穴状遺構（Tピット）1基、古代以降と考えられる溝跡2条および柱穴14口など、第4次調査では古代以降と考えられる柱穴5口、昭和63年度の第6次調査では時期不詳の溝跡1条、小柱穴11口などが検出された。

縄文時代の遺構

縄文時代の遺構としては貯蔵穴様の円形土塚が2基、Tピットと考えられる長楕円形の陥し穴状遺構は第2次調査区と第3次調査区で19基検出されている。しかし、これらの遺構の大半は開田造成時ないし耕作等により著しい削平を受け、底面の一部を残すだけのものも見受けられる。遺構配置については、やや北半部に集中している傾向が認められ、かつRD001～003、RD008・009、RD012・013およびRD017・018のように並行関係の数本一組で設定・配置されたものが多い。

なお、これらの遺構の所属時期については共伴遺物がなく不明だが、周辺域の表土中からは縄文中期～晩期の土器が出土している。

古代以降の遺構

第2次調査区からは約900口の柱穴群が確認されており、特にRG402溝跡以西の北から南にかけての調査区中央部に多く集中して検出されており、精査の結果、大小17棟の建物跡および1列の掘立柱列跡を検出することができた。

掘立柱建物跡 これらの掘立柱建物跡群は配置や棟方向および柱間寸法により、主屋と付属屋との組み合わせ、または単独配置の小規模な建物跡などに区分され、次のようなグループにまとめることができる。

Aグループ

柱間寸法が桁行8尺以上（8.7～10.4尺）、梁間8～9.7尺の規模をもつもので、調査区北西部に位置する四面庇で東西棟のRB403と南北棟のRB402の組み合わせは、それぞれ直角関係で約2m（7尺）の間隔をもって配置されている。同等の棟方向および柱間寸法をもつものに調査区南半部で検出された東西棟のRB415がある。同建物跡は南東部をRG402溝跡に切られるもので、大形の円形の掘方もち、間仕切りの柱穴も存在する主屋的な性格をもつものと考えられる。

Bグループ

柱間寸法が桁行8尺平均（7.8～8尺）、梁間7.7～10尺をはかる規模をもつもので、調査区中央部東寄りに位置する3棟の建物群が該当する。西側に間仕切りをもつ主屋的な東西棟のRB411と、その東側に隣接する小規模な付属屋の南北棟のRB412、RB411から南側4.4mに位

置するR B414からなり、AグループのR B415との関係については、棟方向はR B411とは約7°の差があり、またR B414とは1.2m（約4尺）の至近距離にある。

Cグループ

柱間寸法の桁行が7.5尺に近く（7.1～7.5尺）、梁間5.7～8.4尺の規模をもつもので、調査区中央北側の東西棟の4間×2間のRB405とほぼ中央部に位置する付属屋的な2間×1～2間の東西棟のRB407が該当する。これらはA・Bグループの棟方向とは異なり、約5°～12°の差をもつ。

Dグループ

柱間寸法の桁行が5.5～6.6尺平均で、梁間5.8～18.6尺の規模をもつもので、調査区南西部の3～4間×1間のR B404、ほぼ中央部に位置する3～4間×1～3間のR B413、南東部に位置する1～2間×1間のR B417が該当し、いずれも棟方向は南北棟のN7°Eをはかるが、これらの位置関係は北西－南東の斜め方向に20～30m間隔で配置されている。

Eグループ

その他の小規模な建物群で、梁間8.3尺の東西棟のRB406・416、桁行が4～6.7尺、梁間4.3～7.6尺の規模をもつもので、R B408～410などが該当する。R B409・410は同規模の建物跡で、南北方向のR C401柱列跡を介して東西に位置する。R B408は調査区南西部に位置し、桁・梁ともに4～5尺の柱間寸法をもつものであるが、他のグループに所属する可能性もある。

総括的には、建物跡の棟方向の大半は東西ないし南北方向を基準とし、大幅に棟方向を変えているものは見受けられず、さらに主要な掘立柱建物跡については基本的には建替えはないものと思われるが、上記のように柱間寸法についてはかなりの幅をもった建物跡が存在するのが窺える。

竪穴は調査区中央部で1棟のみ検出されている。床面・壁に炉ないしかまどを持たないもので、かつ張り出し部も認められないものである。出土遺物もなく、時期については特定できないが、配置および主軸方向および張り出し部をもたない構造であることなどから、やや古い時期の掘立柱建物跡のグループに所属する可能性が考えられる。

土壇は10基確認されているが、いずれも掘立柱建物跡が集中する調査区東半部に位置する。R D407・408については、R B411・412掘立柱建物跡の北側に位置する直径1.5～1.8mの円形土壇で、当初井戸跡の可能性も考えられたが、深さが0.8～0.85mと浅く、埋土出土の大量の炭化物等の存在から推察して、鍛冶に関連する施設と考えられる。

溝跡は5条確認されており、北西部のR G401、東半部のR G402がさらに調査区外に延びるが、他はいずれも小規模で浅い形状を呈している。調査区東半部を北東－南西方向に走るR G402は第7次調査区でも延長が確認されており、その方向はさらに40m東側を南流する小諸葛川（一部旧河道と重複）と並行関係にあり、遺跡の区画施設の可能性もある。

最後にこれらの掘立柱建物跡を中心とした遺構群の時期については、直接的に柱穴等から年代を決定付ける遺物の出土はなく特定はできないが、R B411・415などのやや大形の掘方をもつ桁行8尺前後の古代の間尺に近い建物跡の存在、またR D207土壇底面出土の渥美系壺の器形を呈する11世紀後半～12世紀前半に属すると思われる須恵器壺や11～12世紀中頃の白磁碗および平泉期に相当する手づくねのかわらけの存在からみて、おおむね12世紀代を中心とする時期が考えられ、この時期の集落跡あるいは居館跡と推定される。

表2 稻荷町遺跡、第1・2次調査 検出掘立柱建物跡一覧

次数	遺構名	規		模	棟方向	主軸方向
		桁行	梁間	庇(下屋)		
第1次調査	RB801 母屋	5間 (9.52m)	3間 (5.73m)	(1.0×1.91m)	S87° E	東西棟
	RB801 角屋	2.5間 (4.80m)	2間 (3.84~4.00m)	(1.8~2.0×4.05m)	N2.5° E	南北棟
	RB802	3間 (4.80m)	1間 (2.84m)	—	S87° E	東西棟
	RB803	5間 (9.50m)	2間 (3.92m)	—	S82.5° E	東西棟
	RB804	3間 (7.20m)	3間 (6.80m)	—	S84.5° E	東西棟
	RB805	4間 (11.30m)	3間 (8.53m)	—	S83° E	東西棟
第2次調査	RB401	2間以上 (2.30m)	2間 (4.60m)	—	ほぼ真北	南北棟?
	RB402	2間 (7.72m)	2間 (4.96m)	—	N5° W	南北棟
	RB403	4間 (11.60m)	2~4間 (5.84m)	四面庇 庇桁行6~7間 (14.00m) 庇梁間3~7間 (8.00m)	S86° W	東西棟
	RB404	3~4間 (10.13m)	1間 (5.64m)	—	N7° E	南北棟
	RB405	4間 (9.20m)	2間 (4.80m)	—	S88° E	東西棟
	RB406	2間 (3.40m)	1間 (2.50m)	—	S87° E	東西棟
	RB407	2間 (4.58m)	1~2間 (3.48m)	—	ほぼ東西	東西棟
	RB408	3~4間 (4.14~5.62m)	3間 (4.22m)	—	N2° E	南北棟
	RB409	2~5間 (4.70m)	2間 (4.10m)	—	S86° W	東西棟
	RB410	3間 (5.66m)	2間 (4.32m)	—	S80° W	東西棟
	RB411	4間 (10.20m)	2間 (6.00m)	—	S80° W	東西棟
	RB412	2間 (5.16m)	1間 (2.34m)	—	N7° W	南北棟
	RB413	3~4間 (7.04m)	1~3間 (5.24m)	—	N7° E	南北棟
	RB414	1~2間 (5.88m)	3~4間 (7.04m)	—	N2° W	南北棟
	RB415	5間 (12.42m)	2間 (5.58m)	—	S87° W	東西棟
	RB416	1間 (4.72m)	1間 (2.52m)	—	S88° E	東西棟
	RB417	1~2間 (3.48m)	1間 (2.28m)	—	N7° E	南北棟

柱 間 寸 法		柱 穴 規 模	時 期	備 考	
桁 行	梁 間				
6.3尺(1.91m) (北・南側半間)	6.3尺(1.91m) (東妻半間)	径20~80cm 深20~66cm	18C中葉 以降	曲屋 座敷(2間×3間) 常居(1.5間×3間) 土間(1.5間×3間)	
西6.3尺(1.92m) 東7.6尺~8.2尺 (2.31~2.49m)	2.9尺~4尺 (0.88~1.20m)	径20~75cm 深20~60cm			
5.3尺等間 (1.60m)	9.4尺 (2.84m)	径25~30cm 深10~40cm	18C中葉 以降		RB801の付属屋
6.3尺等間 (1.90m)	6.5尺等間 (1.96m)	径30~40cm 深30~60cm	17C中~ 18C前葉		
7.5尺~8.7尺 (2.28~2.64m)	7.5尺 (2.26m)	径40~60cm 深18~60cm	16C以前?		東2間総柱
8.3尺~12.3尺 (2.52~3.74m)	9.4尺 (2.84m)	径15~40cm 深20~40cm	?		
3.4尺~4.2尺 (1.04~1.26m)	5.7尺~9.4尺 (1.74~2.86m)	径20~40cm 深40~90cm	?	RB403の付属屋 庇柱間 桁行8尺 (2.40~2.44m) 梁間4.3尺~4.5尺 (1.30~1.36m)	
8.7尺前後 (2.64m)	8尺~8.4尺 (2.40~2.56m)	径20~40cm 深50~60cm	12C代		
10尺~10.4尺 (3.10~3.14m)	9.6尺~9.7尺 (2.90~2.94m)	母屋 径30~50cm 深20~40cm 庇 径20~40cm 深15~30cm	12C代		
6.6尺~8.7尺 (2.0~2.63m)	18.6尺 (5.64m)	径20~35cm 深10~30cm	?		
7.1尺~11.8尺 (2.14~3.57m)	7.4尺~8.4尺 (2.24~2.56m)	径20~40cm 深30~50cm	?		
5.3尺~5.9尺 (1.60~1.80m)	8.3尺 (2.50m)	径15~25cm 深20~55cm	?		
7.5尺等間 (2.28~2.30m)	5.7尺 (1.74m)	径30~50cm 深10~30cm	12C代		
4尺~4.9尺 (1.22~1.48m)	4.3尺~5尺 (1.30~1.50m)	径20~35cm 深20~35cm	?		
3.6尺~4.7尺 (1.10~1.44m)	6.3尺~7.2尺 (1.92~2.18m)	径20~50cm 深30~50cm	?		
5.9尺~6.7尺 (1.78~2.04m)	6.7尺~7.6尺 (2.02~2.30m)	径20~30cm 深25~50cm	?		
7.8尺~9尺 (2.36~2.72m)	9.8尺~10尺 (2.96~3.02m)	径40~80cm 深35~90cm	12C代		
7.9尺~9.2尺 (2.38~2.78m)	7.7尺 (2.34m)	径30~60cm 深25~75cm	12C代		RB411の付属屋
5.5尺~6.5尺 (1.66~1.96m)	5.8尺 (1.75m)	径25~35cm 深20~30cm	?		
8尺? (2.44m)	8.6尺 (2.61m)	径25~40cm 深30~40cm	12C代		RB411の付属屋
7.7尺~8.6尺 (2.34~2.62m)	8.7尺~9.7尺 (2.64~2.94m)	径30~60cm 深20~40cm	12C代		間仕切り9.2尺 (2.78~2.80m)
15.6尺 (4.72m)	8.3尺 (2.52m)	径25~35cm 深20~25cm	?		
5.6尺~5.9尺 (1.70~1.78m)	7.5尺 (2.28m)	径25~35cm 深15~30cm	?		

表3 報告書抄録

ふりがな	いなりちょういせき							
書名	稲荷町遺跡							
副書名	第1～4・6次発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	千田 和文・室野 秀文							
編集機関	盛岡市教委員会							
所在地	〒岩手県盛岡市津志田14-37-2 TEL 0196-51-4111							
発行年月日	西暦 1994年 3月 31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いなりちょう 稲荷町	いわてけん もりおかし 岩手県盛岡市 おおだてちょう 大館町・ いなりちょう 稲荷町	03201	—	39度 42分 26秒	141度 6分 49秒	第1次 19800819～ 19800920	1,135	宅地造成に伴う事前調査
						第2次 19860701～ 19860731	5,206	宅地造成に伴う事前調査
						第3次 19870413～ 19870417	316	私道整備に伴う事前調査
						第4次 19870508～ 19870513	60	個人住宅建築に伴う事前調査
						第6次 19880411～ 19880413	215	個人住宅建築に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な構造	主な遺物	特記事項			
稲荷町	集落	縄文時代後期	土塚 (おとし穴含む) 18基	縄文時代 石鏃・石匙・磨石・ 円盤状石製品他	河川および旧河道で画された東西300m、南北350mの半円状の中世の集落跡または居館跡			
		中世 12世紀	竪穴 1棟 掘立柱建物跡 17棟 掘立柱列跡 1列 溝跡 5条 土塚 10基 柱穴群 900口	古代 土師器甕・須恵器甕 他				
		中世 16世紀以前	掘立柱建物跡 1棟	中世 中国産白磁碗・かわらけ・小鍛冶鉄滓・ ふいご羽口他				
		近世 17世紀～ 18世紀	竪穴 1棟 掘立柱建物跡 4棟 掘立柱列跡 7列 土塚 12基	近世 瀬戸美濃鉄釉天目茶碗・灰釉皿・唐津灰釉皿・備前系搦鉢・ 備前染付皿・碗・相馬大堀系灰釉碗・志野鉄絵碗・瓦質土器 手焙り他 砥石・搗臼・煙管雁首・永楽通寶・古寛永通寶他				
					近世後半期の曲家			



稲荷町遺跡垂直写真（1948年：極東米軍撮影 約1:4,500）



最近の垂直写真（1986年撮影 約1:8,000）



北辺部堀跡

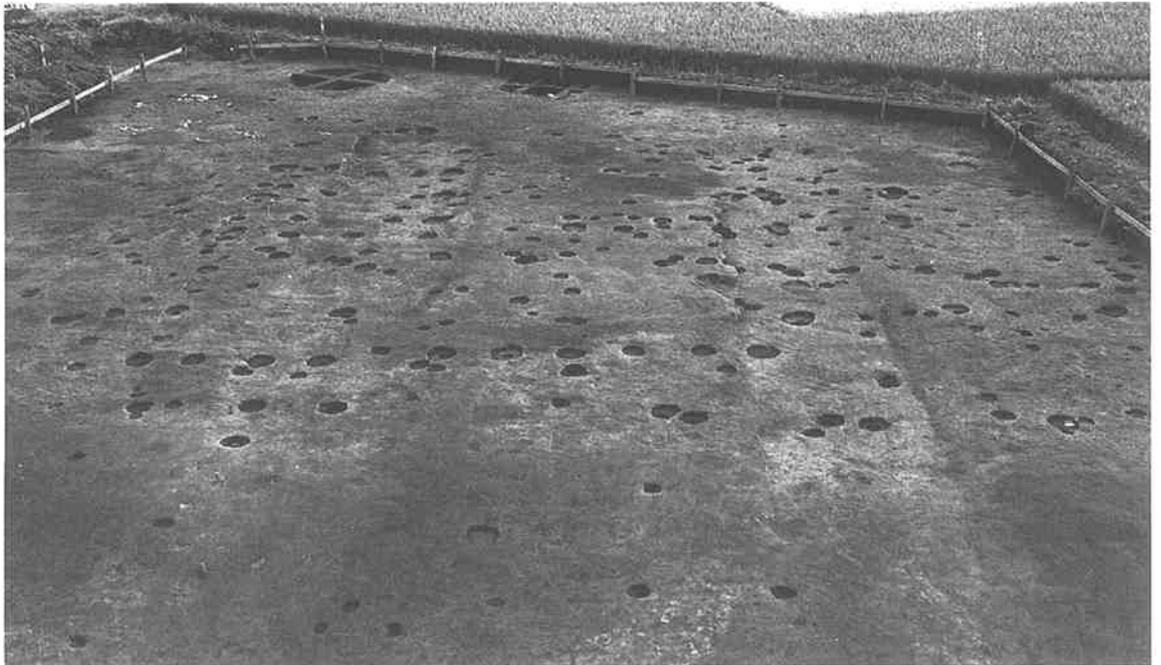


南東部堀跡



西側段丘崖

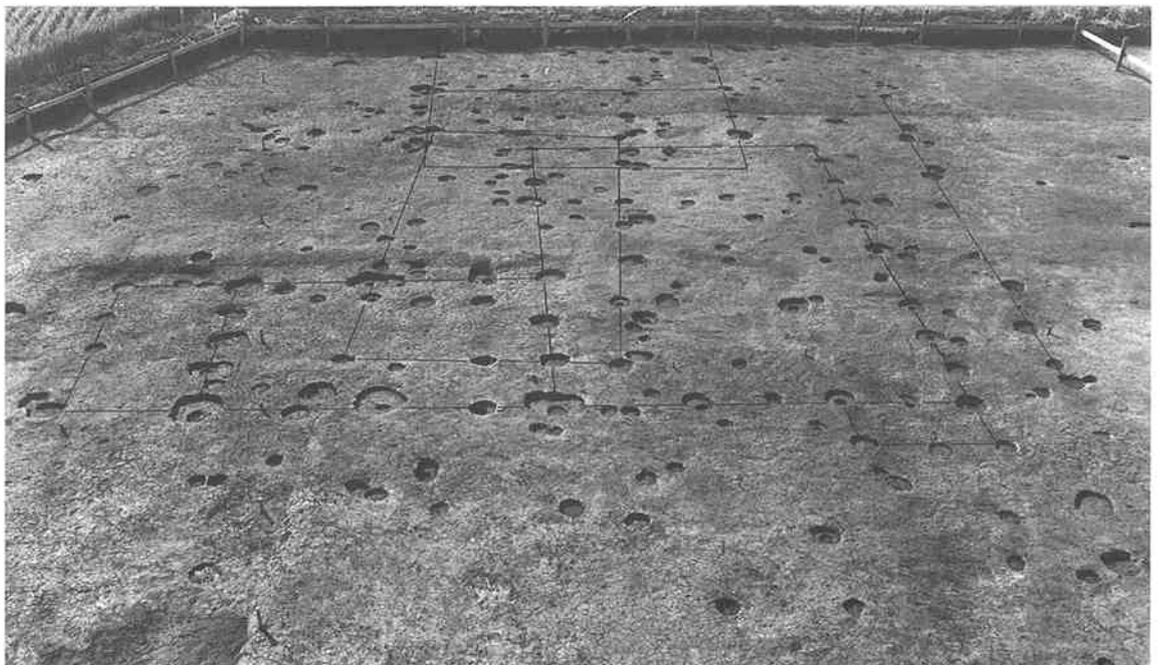
第1次調査



検出遺構全景
(北から)



検出遺構全景
(南東から)



掘立柱建物跡

- RB801
- 803
- 804
- RC805



RB801
No5柱穴
土層断面



RB801
No41柱穴
土層断面

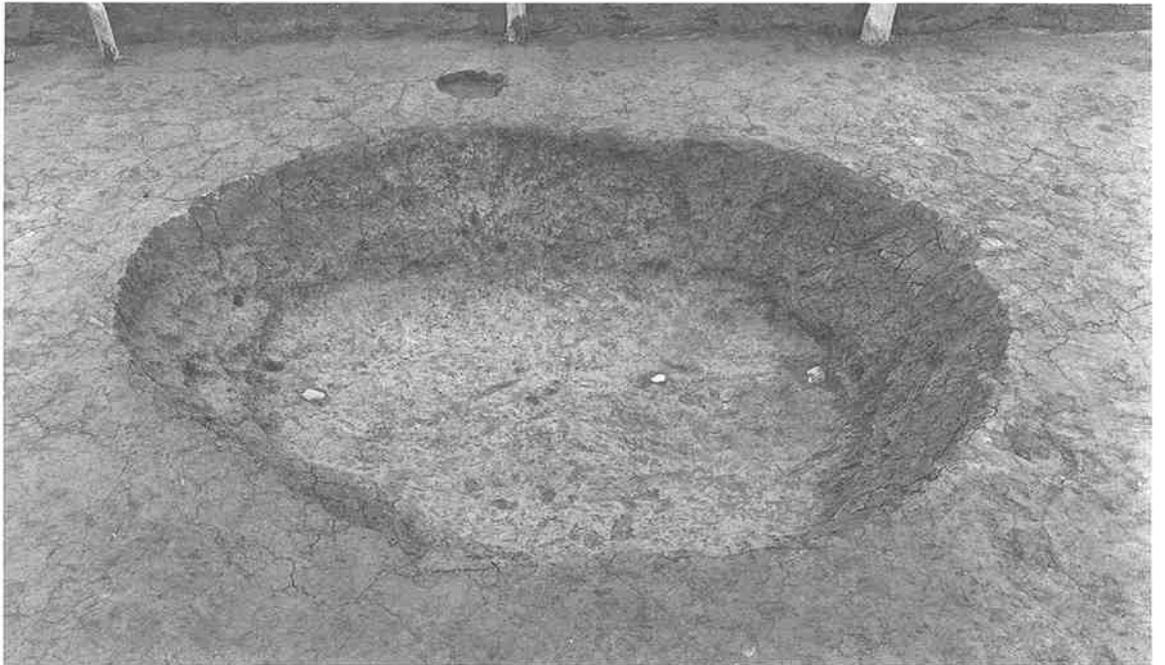


RB801
No41柱穴
底部

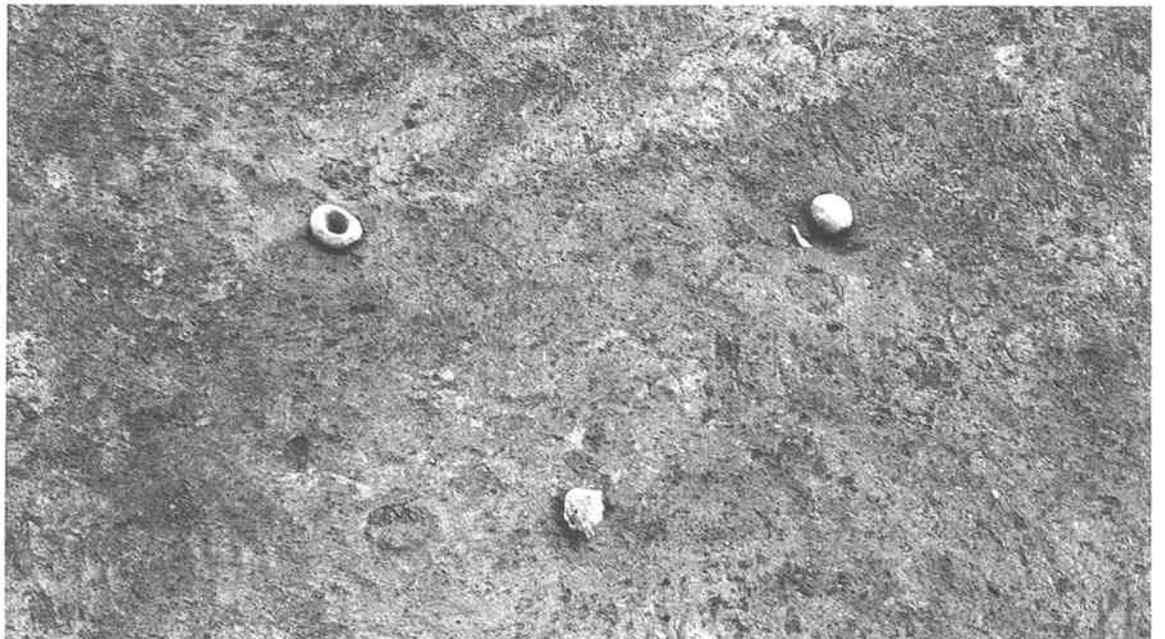
第1次調査



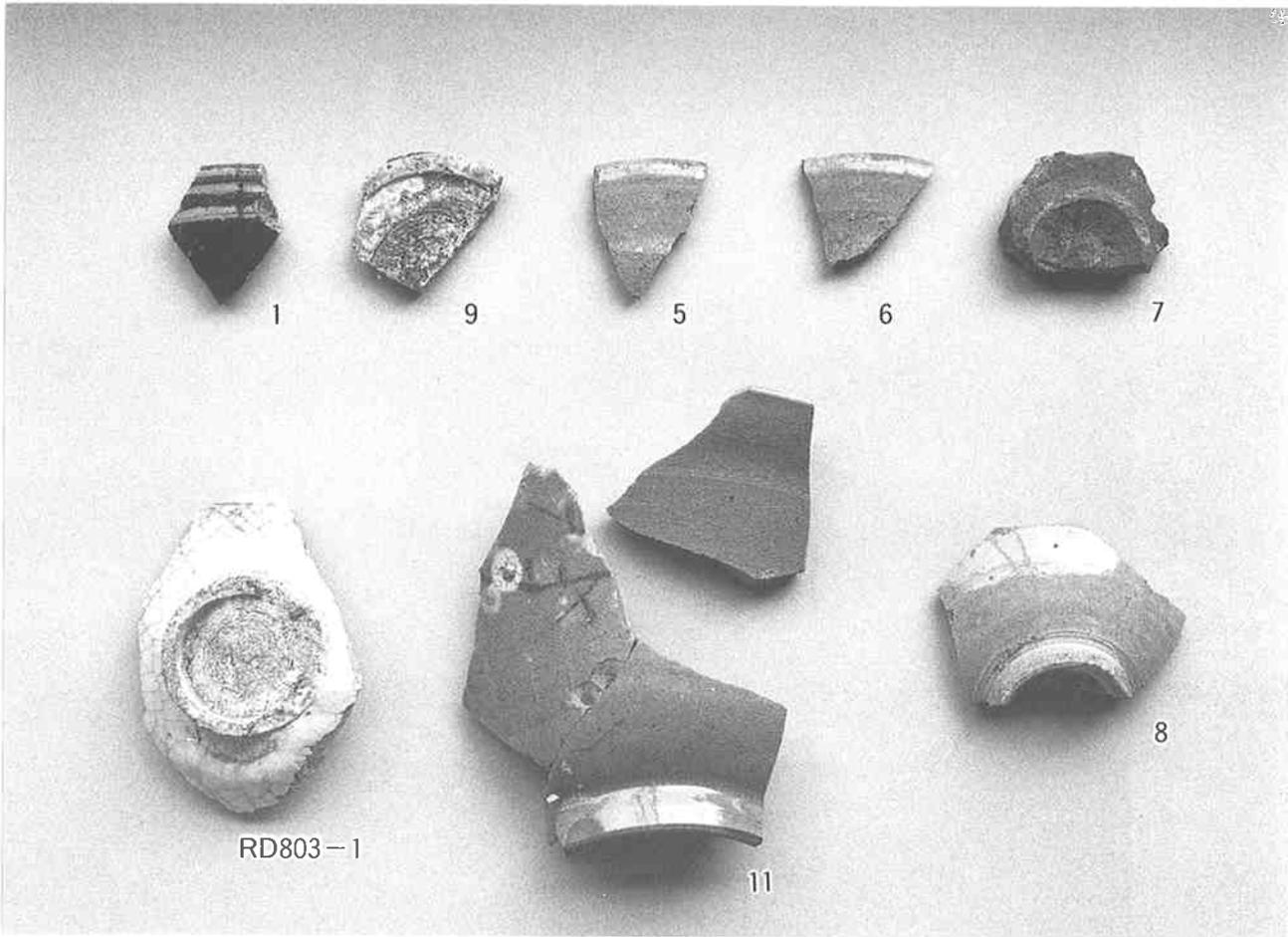
RE 801 竪穴



RD 801 土坑

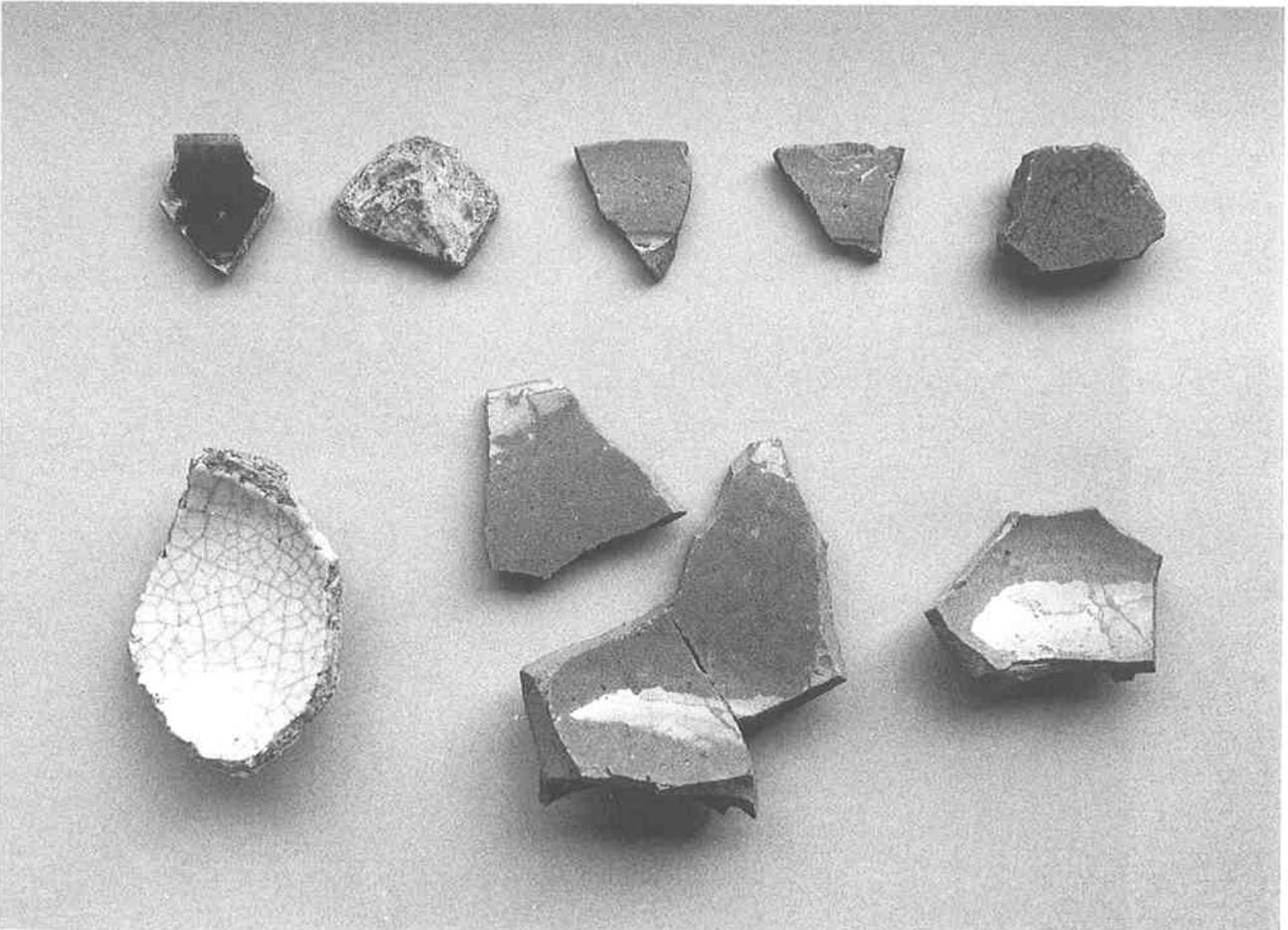


RD811, 812土坑
搗臼出土状況



国産陶器（表）

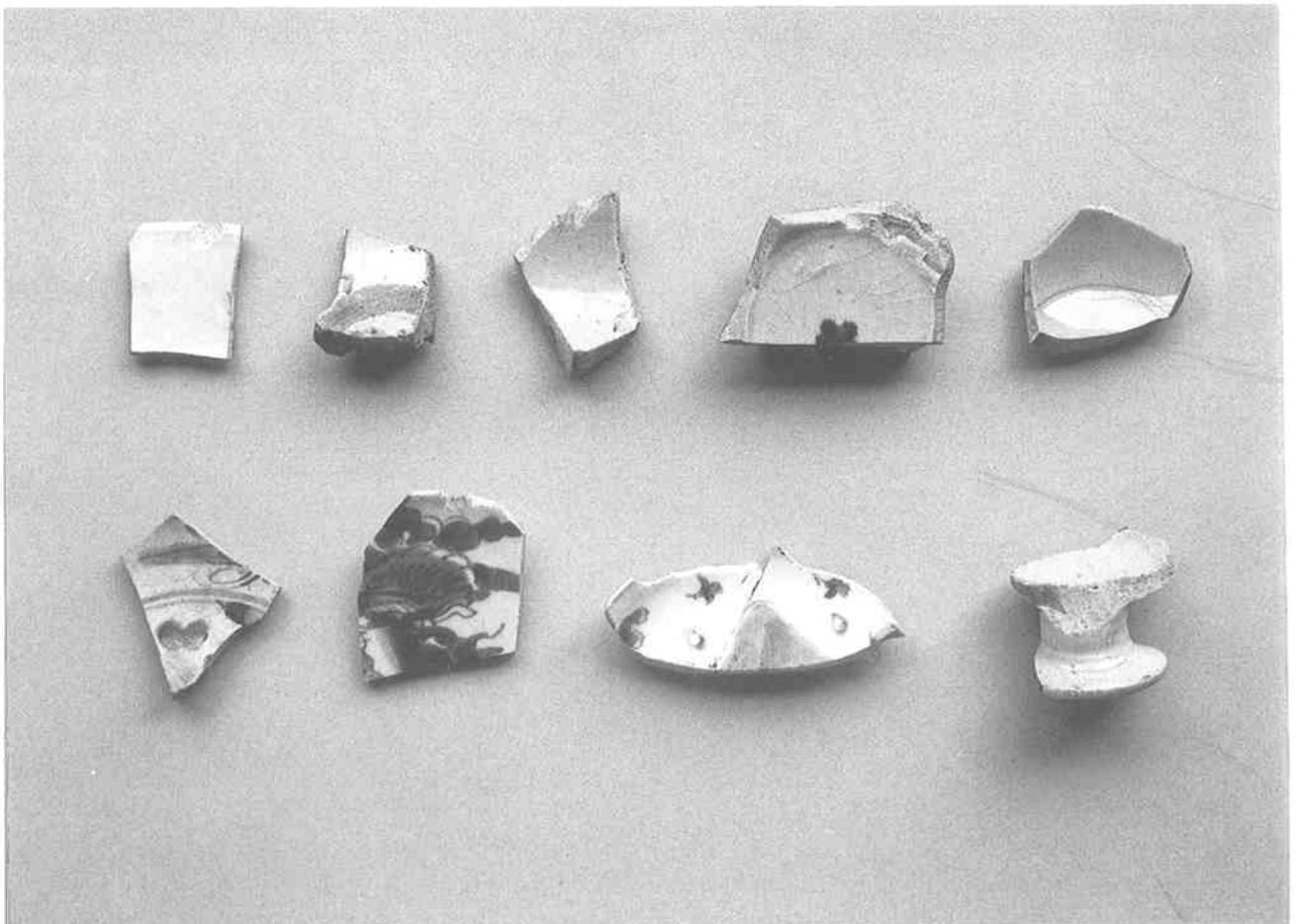
国産陶器（裏）





国産磁器（表）

国産磁器（裏）





稲荷町遺跡 第2次調査区 垂直写真
調査区北西部全景（南東から）



第2次調査

調査区
北東部
全景
(南西から)

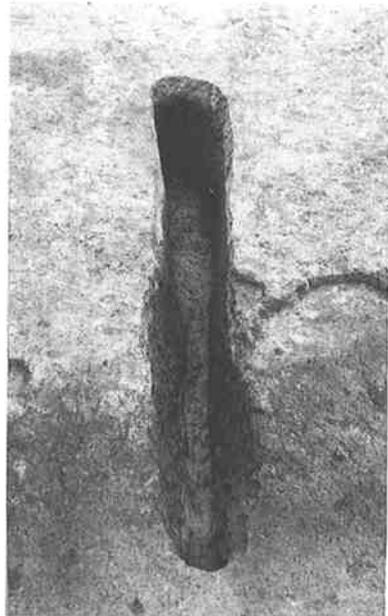


調査区
南東部
全景
(東から)

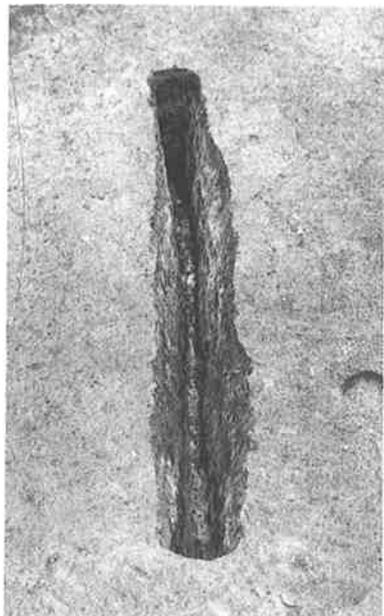


調査区
南東部
全景
(西から)

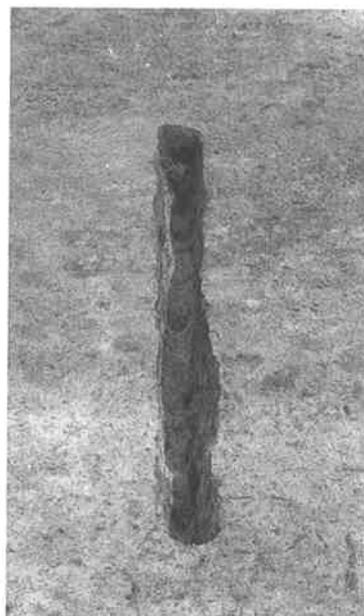




RD001土塚



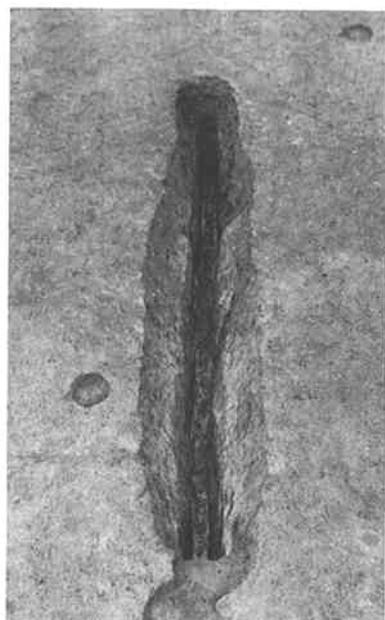
RD002土塚



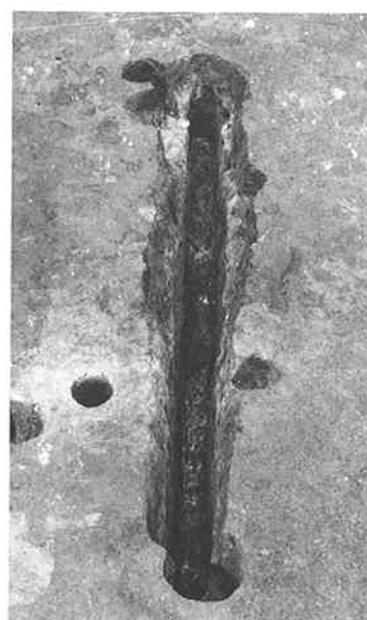
RD004土塚



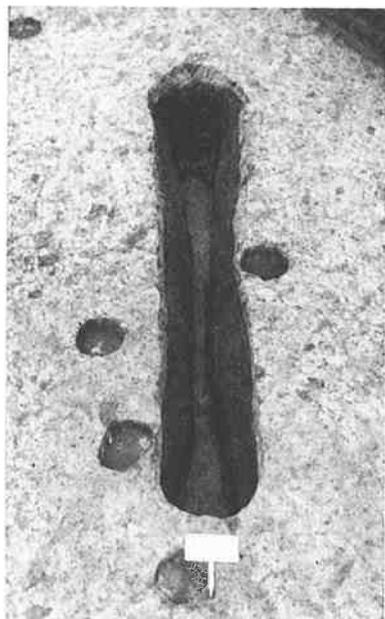
RD005土塚



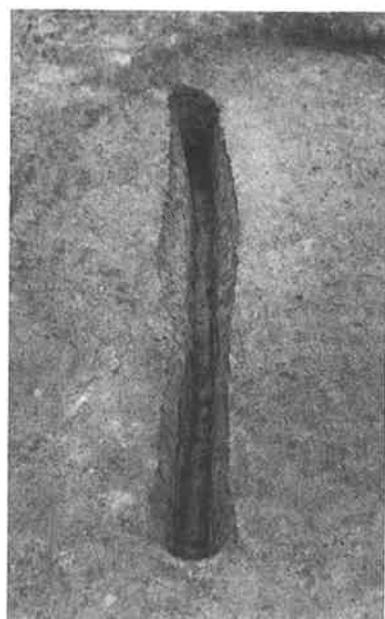
RD006土塚



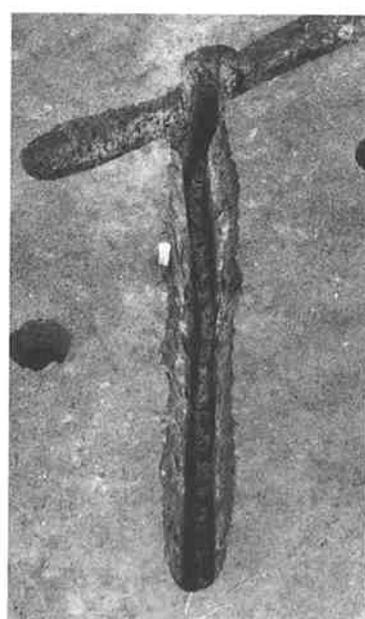
RD007土塚



RD008土塚



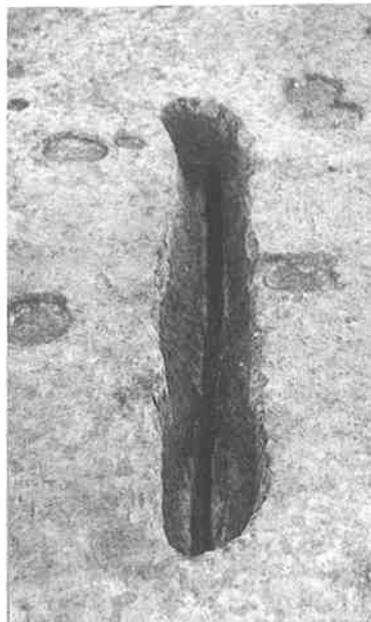
RD009土塚



RD010土塚



RD011土坑



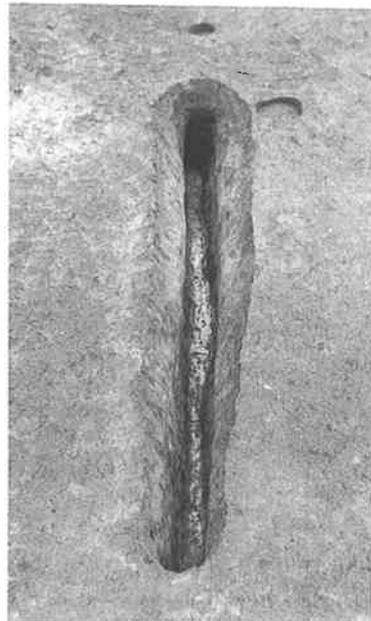
RD012土坑



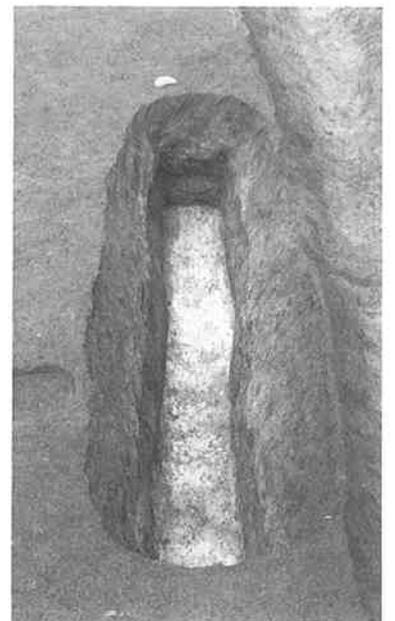
RD013土坑



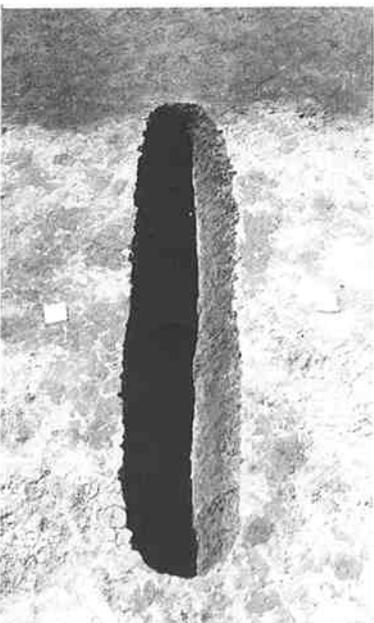
RD014土坑



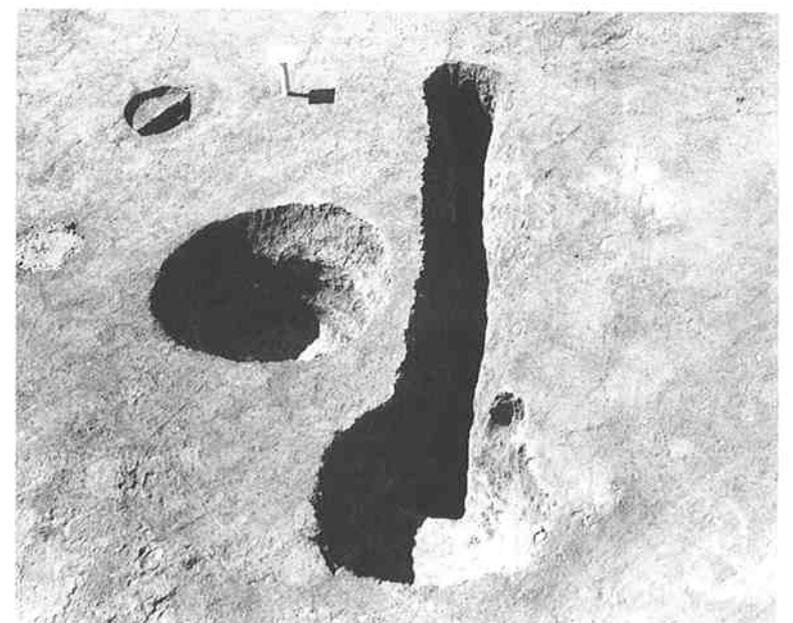
RD015土坑



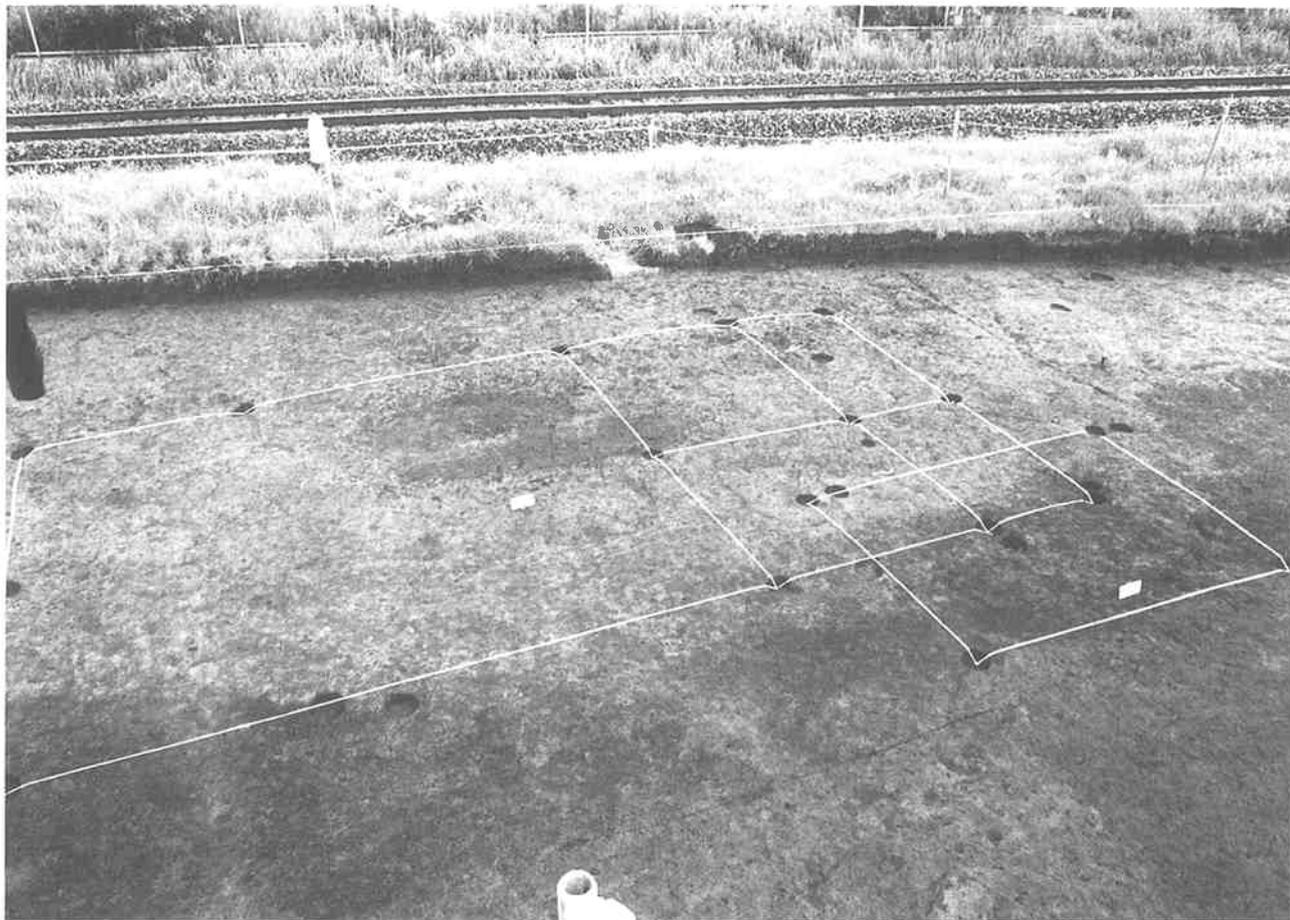
RD016土坑



RD018土坑



RD017・019・020土坑



R B 405・406掘立柱建物跡（南西から）

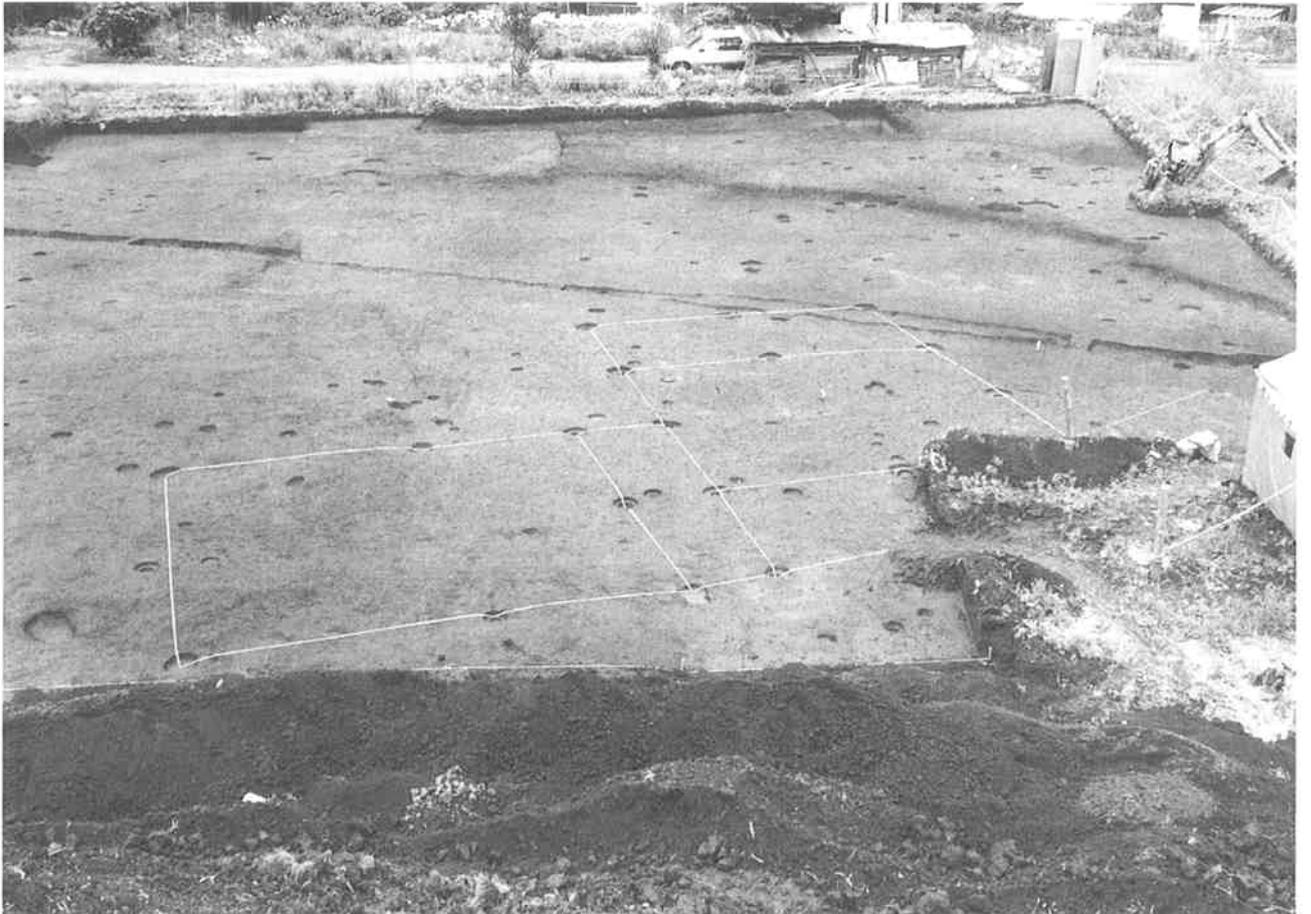
R B 4 0 7 掘立柱建物跡（南から）





R B 4 1 3 掘立柱建物跡 (西から)

R B 414・415 掘立柱建物跡 (北西から)

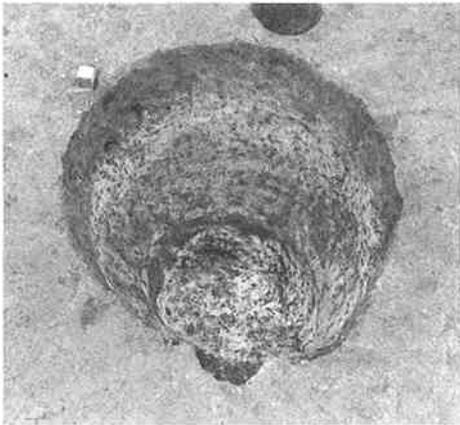




RD 4 0 1 土坑



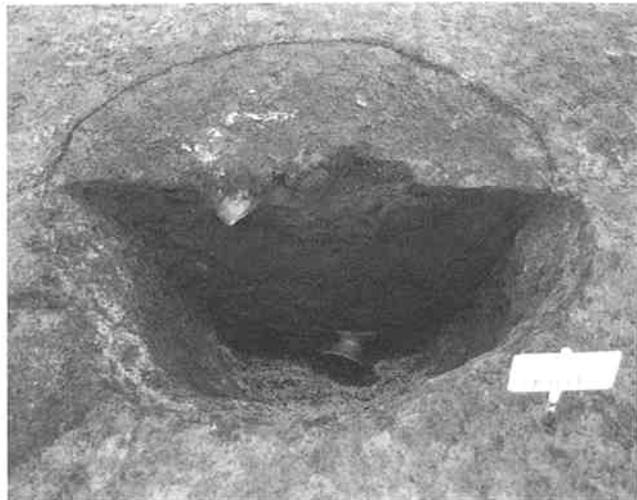
RD 4 0 2 土坑



RD 4 0 3 土坑



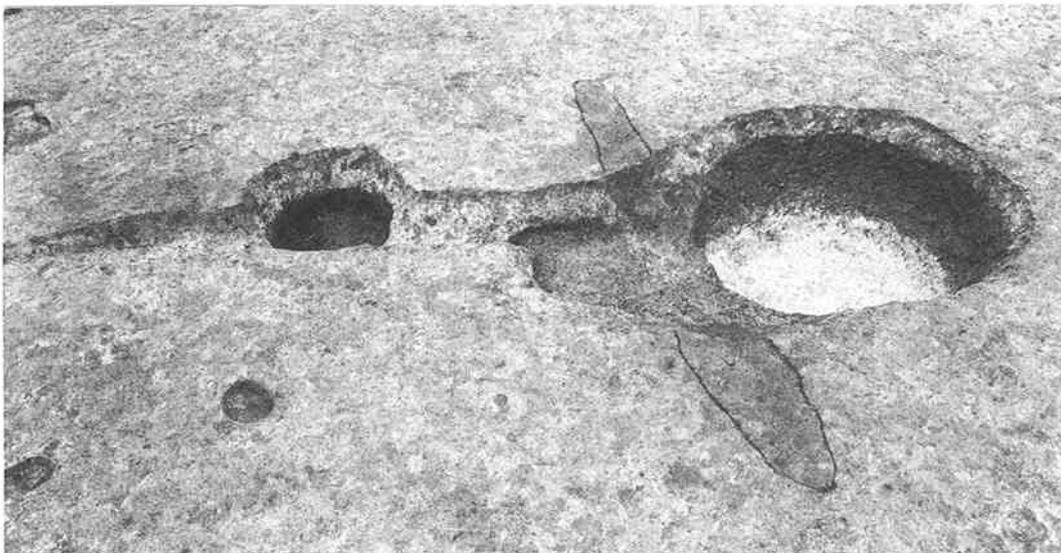
RD 4 0 5 土坑



RD 4 0 7 土坑遺物出土状況

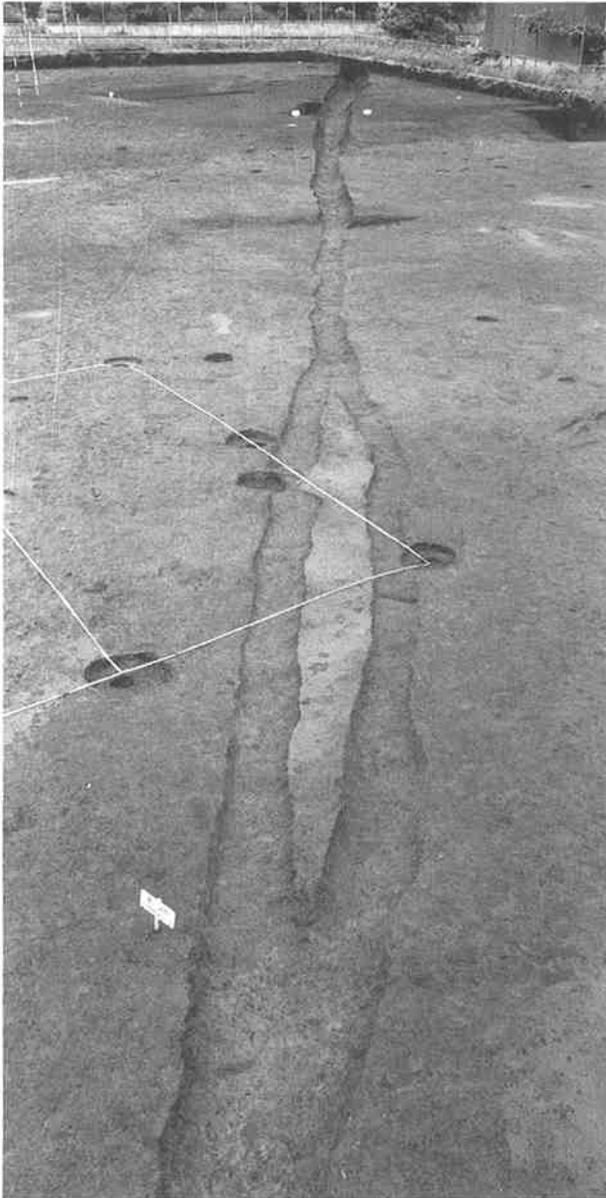


RD 4 0 7 土坑

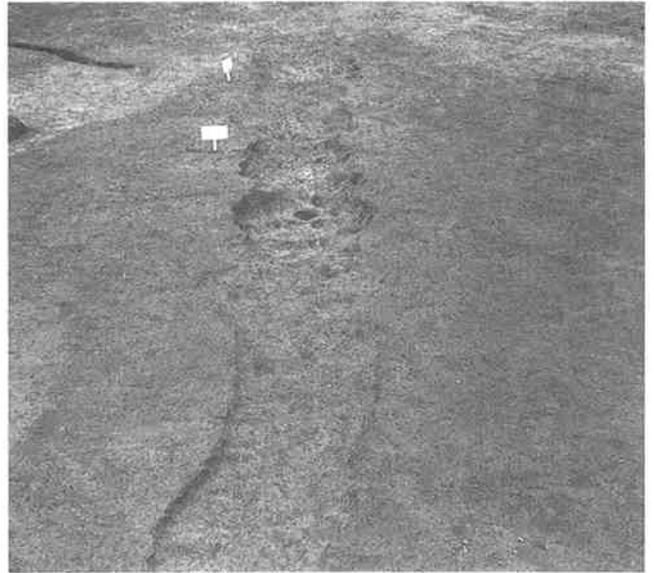


RD 408・409土坑

第2次調査



RG402 溝跡 (南西から)



RG403 溝跡 (北西から)



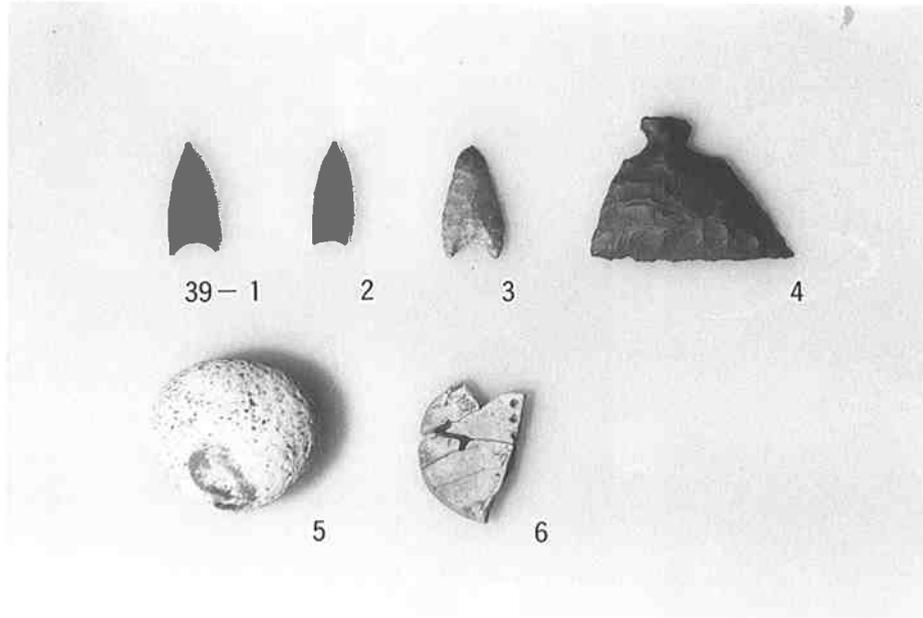
RG405 溝跡 (北から)

焼土遺構A～C



焼土遺構D



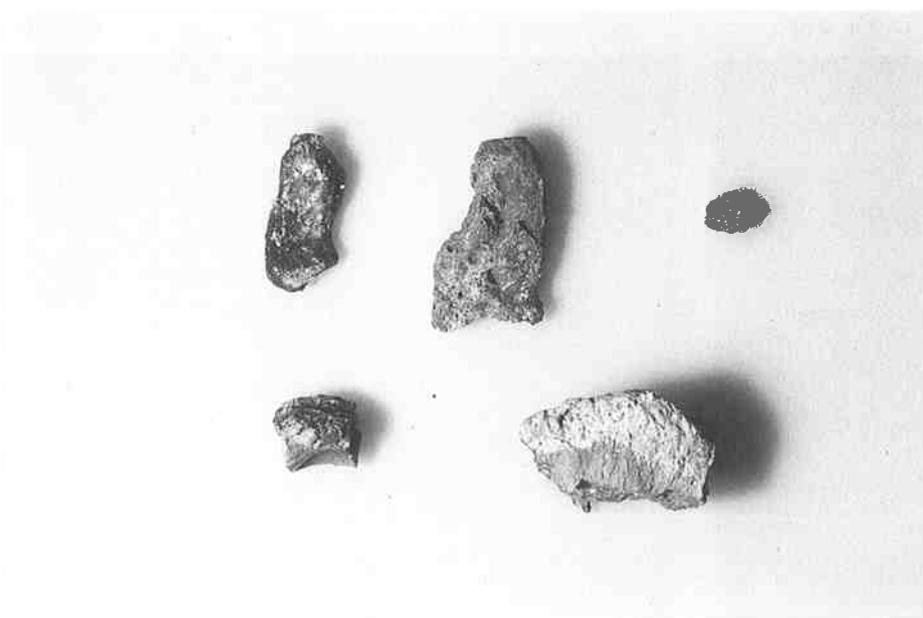


第2次調査
出土遺物(1)

縄文時代の遺物



RD407土塚
須恵器壺

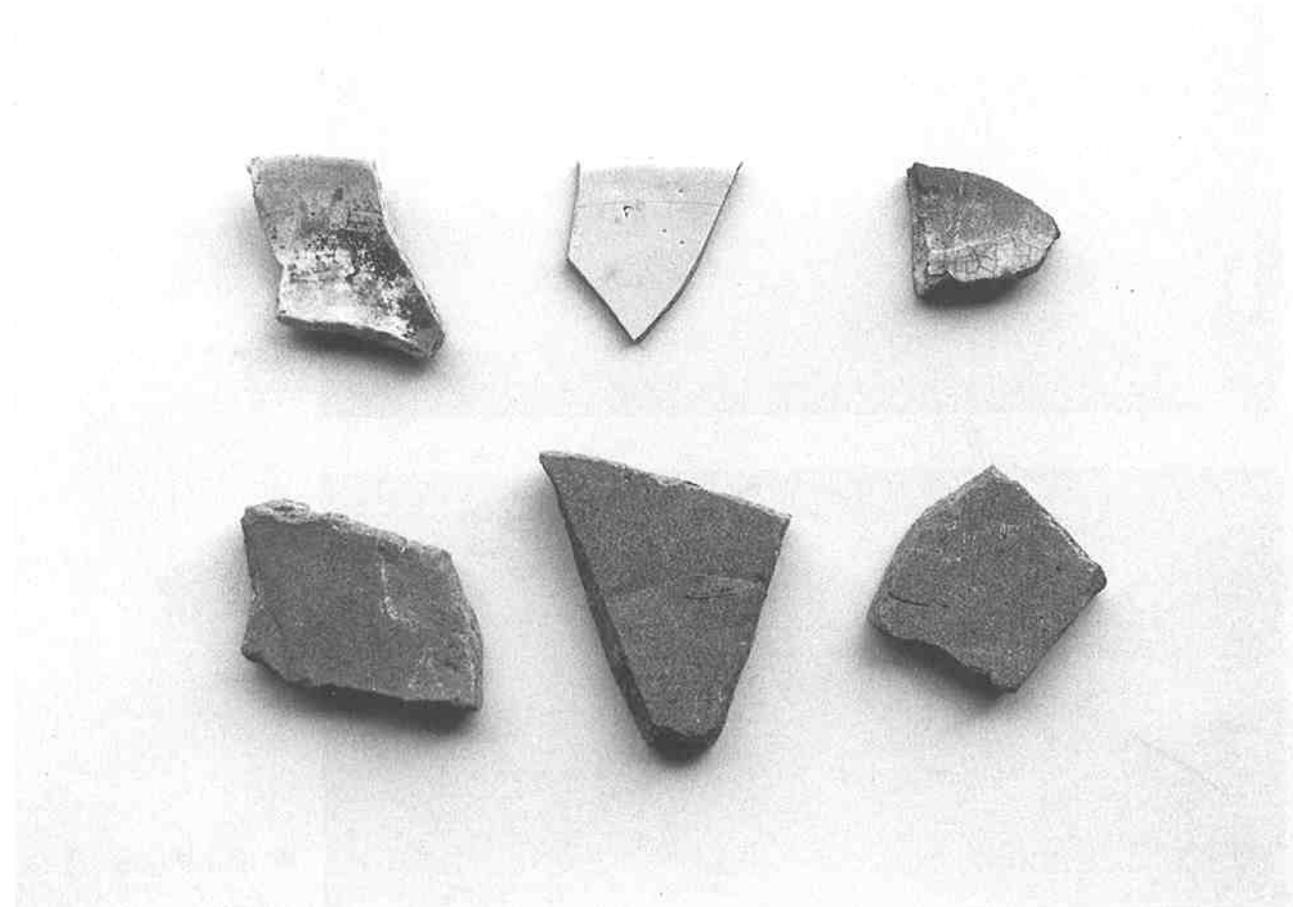


ふいご羽口
粘土片
炉体石材



第2次調査
出土遺物(2)

かわらけ (表)
白磁碗
灰釉盤
渥美系甕 (裏)

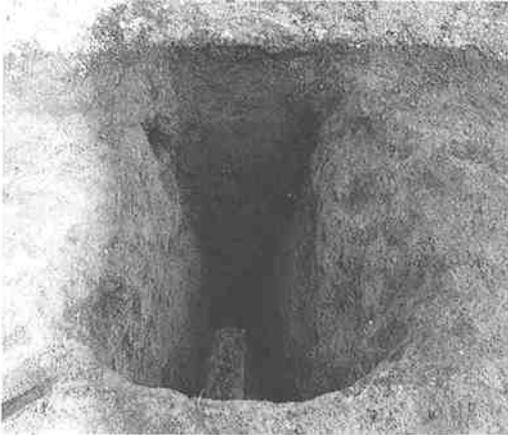


第18図版



第3次調査

(左)
調査区北半部
全景
(北西から)
(右)
調査区中央部
全景
(北から)



第4次調査

(左)
第3次調査
RD021土坑
(右)
第4次調査区
全景
(西から)



第6次調査

調査区全景
(西から)



調査区全景
(南から)

稲荷町遺跡

—第1～4・6次調査—

平成6年3月31日 発行

発行 盛岡市教育委員会

〒020 盛岡市津志田14-37-2
TEL(0196)51-4111 (内)7353

印刷 株式会社 白ゆり